

後 原 遺 跡 I

— 第 1 次～ 6 次調査 —

大野城市文化財調査報告書

— 第 53 集 —

1998

大 野 城 市 教 育 委 員 会

うしろ ばる
後 原 遺 跡 I

— 第 1 次～ 6 次調査 —

大野城市文化財調査報告書

— 第 53 集 —

1998

大 野 城 市 教 育 委 員 会

序

本市の白木原地区は市の中心部に位置し、市街化が進み、埋蔵文化財の存在はあまり知られていない地域でした。しかし平成6年度、都市計画街路の建設に先立って実施された後原遺跡第1次調査の結果、ここには江戸時代の遺跡があることがわかりました。今回は、第1次から6次調査の結果についてご報告をするものです。

文献の調査によると、白木原地区には室町時代から村があったことが分かっています。村は明治時代まで続き、明治22年に他の村と統合され大野村となりました。後原遺跡の調査では、江戸時代の住居やゴミを捨てた穴・墓などが見つかっています。このことから、後原遺跡は江戸時代の白木原村にあたり、これまで市内で調査された遺跡の中でも最も新しい遺跡です。

白木原地区は現在各種開発が進み、今まさに新しい街が生まれようとしています。埋蔵文化財の発掘調査は、開発に伴う形で行っています。その調査で見つかった古い村の上に新しい街ができてゆく様は、言い知れぬものがあります。しかし、江戸時代という埋蔵文化財では新しい時代の調査を行うことで、江戸時代から明治時代の白木原村、さらに大野村・大野町・大野城市と発展を続ける本市の歴史に新しい知識を与えてくれます。今後、遺跡の規模や内容についてはさらに多くの発見があることと思われませんが、本書がその第一歩となり、またその成果が市民に還元できれば幸いに思います。

最後に、費用の負担をはじめ調査にご協力を頂いた皆様や、白木原地区住民の方々、現地の作業や整理作業にご指導・助言を頂いた皆様に厚くお礼を申し上げます。

平成10年3月31日

大野城市教育委員会
教育長 堀内 貞夫

例 言

1. 本書は大野城市教育委員会が、白木原1丁目において平成6年から8年にかけて実施した後原遺跡の第1次～6次調査の発掘調査報告書である。
2. 挿図中の方位は磁北をあらわす。
3. 遺構の実測・写真撮影は、舟山良一・徳本洋一・石木秀啓・丸尾博恵がおこなった。また第3次調査31号墓出土人骨は、井上蘭子・石井博司・大森円（当時九州大学院生）が実測・骨の取り上げをおこなった。
4. 遺物の写真撮影は、岡紀久夫氏がおこなった。
5. 遺物実測は、武下里織・西村晴香・石木がおこなった。
6. 遺構・遺物の製図は、有田朱美・河鍋洋子・西村がおこなった。
7. 拓本は西村がおこなった。
8. 本書のIV章は、後原遺跡第3次調査出土の人骨について、九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座の田中良之教授に分析を依頼し、玉稿を賜った。
9. 本書の執筆は、III-2章を舟山・石木、III-5・6章を徳本・石木が執筆をおこない、その他は石木がおこなった。
10. 本書の編集は、石木がおこなった。

本文目次

I. はじめに	1
II. 位置と環境	2 ~ 4
III. 調査の結果	
1. 第1次調査	
(1)調査に至る経緯	5 ~ 6
(2)調査の結果	
A. 調査概要	6
B. 各区の調査	
i) A区	6
ii) B区	6 ~ 15
iii) C区	15 ~ 16
iv) G区	16 ~ 17
v) H区	17 ~ 20
vi) I区	20 ~ 24
vii) 小結	24 ~ 25
2. 第2次調査	
(1)調査に至る経緯	26
(2)調査の結果	26 ~ 27
(3)小結	27
3. 第3次調査	
(1)調査に至る経緯	28
(2)調査の結果	28 ~ 49
(3)小結	49
4. 第4次調査	
(1)調査に至る経緯	50
(2)調査の結果	50 ~ 52
(3)小結	52 ~ 53
5. 第5次調査	
(1)調査に至る経緯	54
(2)調査の結果	55
(3)小結	55
6. 第6次調査	
(1)調査に至る経緯	56
(2)調査の結果	56

(3)小結.....	57
IV. 福岡県大野城市後原遺跡 3 次調査出土の近世人骨について.....	58~62
V. まとめ	63~66

図 版 目 次

図版 1	(1) 1 次調査前全景 (手前 I 区より南を望む) (2) 1 次 A 区全景 (北西より)
図版 2	(1) 1 次 B 区全景 (北西より) (2) 1 次 C 区全景 (北西より)
図版 3	(1) 1 次 G 区全景 (南東より) (2) 1 次 H 区全景 (北西より)
図版 4	(1) 1 次 I 区北西部 (南東より) (2) 1 次 I 区南東部 (北より)
図版 5	(1) 1 次 I 区北東部 (南より) (2) 1 次 I 区南西部 (北より)
図版 6	(1) 1 次 A 区 S D 02 (南西より) (2) 1 次 B 区 S X 02 (南西より) (3) 1 次 B 区 S X 14~17・20 (南西より)
図版 7	(1) 1 次 B 区 S X 19 (北西より) (2) 1 次 G 区 S X 23 (南西より) (3) 1 次 G 区 S D 07 (南東より)
図版 8	(1) 1 次 H 区 S X 26 (東より) (2) 1 次 H 区 S X 27 (南西より) (3) 1 次 H 区 S X 31 (南西より)
図版 9	1 次 B 区出土遺物
図版 10	1 次 B・C 区出土遺物
図版 11	1 次 C~I 区出土遺物
図版 12	1 次 I 区出土遺物
図版 13	(1) 2 次調査全景 (北西より) (2) 2 次 S X 08 遺物出土状況 2 次調査遺構・出土 遺物
図版 14	(1) 3 次調査南西部全景 (北より) (2) 3 次調査北西部全景 (南東より)
図版 15	(1) 3 次 S X 01 遺物出土状況 (南西より) (2) 3 次 S X 01 セクション (南より) (3) 3 次 2 号墓 (東より)
図版 16	(1) 3 次 4 号墓 (東より) (2) 3 次 6 号墓 (北西より) (3) 3 次 7 号墓 (南より)
図版 17	(1) 3 次 11 号墓 (南より) (2) 3 次 12 号墓 (東より) (3) 3 次 18 号墓 (北西より)
図版 18	(1) 3 次 22 号墓 (南西より) (2) 3 次 23 号墓 (北東より) (3) 3 次 31 号墓人骨出土状況 (北東より)
図版 19	(1) 3 次 36 号墓 (東より) (2) 3 次 S X 03 (北より)
図版 20	3 次調査出土遺物①
図版 21	3 次調査出土遺物②
図版 22	3 次調査出土遺物③

図版23	3次調査出土遺物④
図版24	3次調査出土遺物⑤
図版25	(1) 4次調査北半部全景(南より) (2) 4次調査南半部全景(南より)
図版26	(1) 4次SX04(東より) (2) 4次SX14(東より)
図版27	4次調査出土遺物
図版28	(1) 5次調査西半部全景(南より) (2) 5次調査東半部全景(南より)
図版29	(1) 6次調査北半部全景(南より) (2) 6次調査南半部全景(北より)
図版30	後原遺跡出土人骨① (1) 2号人骨頭蓋上面観 (2) 2号人骨上肢骨 (3) 2号人骨下肢骨
図版31	後原遺跡出土人骨② (1) 31号人骨下顎骨 (2) 31号人骨上肢骨 (3) 31号人骨下肢骨

挿 図 目 次

第1図	周辺遺跡分布図	3
第2図	後原遺跡第1～6次調査配置図	5
第3図	1次調査A区遺構配置図	6
第4図	1次調査B・C区遺構配置図	7
第5図	1次B区SX02・12～18・20実測図	8
第6図	1次B区SX03・07実測図	9
第7図	1次B区SX02・07・13出土遺物実測図	9
第8図	1次B区SX14出土遺物実測図①	10
第9図	1次B区SX14出土遺物実測図②	11
第10図	1次B区SX16・17・19出土遺物実測図	12
第11図	1次B区SX19実測図	13
第12図	1次B区遺構検出面出土遺物実測図①	14
第13図	1次B区遺構検出面出土遺物実測図②	14
第14図	1次C区出土遺物実測図	16
第15図	1次調査G・H区遺構配置図	17
第16図	1次G区SX23実測図	18
第17図	1次G区SX23出土遺物実測図	18
第18図	1次H区SX25～29実測図	19
第19図	1次H区SX31実測図	20
第20図	1次H区出土遺物実測図	20
第21図	1次調査I区遺構配置図	21
第22図	1次I区墓実測図	22

第23図	1次Ⅰ区出土遺物実測図	23
第24図	1次Ⅰ区出土銅銭実測図・拓影	24
第25図	2次調査遺構配置図	26
第26図	2次S X 07出土遺物実測図	26
第27図	2次S X 08出土遺物実測図	26
第28図	3次調査遺構配置図	28
第29図	3次S X 01実測図	29
第30図	3次S X 01出土遺物実測図	29
第31図	3次1・2・4～7号墓実測図	31
第32図	3次1・2・6・7号墓出土遺物実測図・拓影	32
第33図	3次8～13・38号墓実測図	34
第34図	3次8・9・13号墓出土遺物実測図・拓影	35
第35図	3次14～19号墓実測図	37
第36図	3次12・14・17・20・22・23・25号墓出土遺物実測図・拓影	39
第37図	3次23号墓出土遺物実測図	40
第38図	3次20～24・43号墓実測図	41
第39図	3次25～30号墓実測図	42
第40図	3次31～36号墓実測図	43
第41図	3次31号墓人骨出土状況	44
第42図	3次37・39～42・44号墓実測図	45
第43図	3次31号墓出土遺物・出土遺構不明遺物実測図・拓影	46
第44図	3次墓出土銅銭実測図・拓影	47
第45図	3次S X 02出土遺物実測図	48
第46図	3次S X 03実測図	48
第47図	3次S X 03出土遺物実測図	48
第48図	4次調査遺構配置図	51
第49図	4次調査出土遺物実測図	53
第50図	5次調査遺構配置図	54
第51図	6次調査遺構配置図	56

付 図

後原遺跡第1～6次調査遺構配置図

I. はじめに

後原遺跡は白木原1丁目周辺に広がる遺跡である。今回報告する第1次調査から第6次調査は平成6年度から8年度にかけて実施した。このため、調査に至る経緯は各調査報告の中で記述する。また、整理作業は平成9年度に実施した。以下に、平成6年度から9年度にいたる調査体制について記載する。なお、各調査の担当者は氏名の横に調査次数を記して表した。さらに、各調査の調査に至る経緯にも記する。

	平成6年度	平成7年度	平成8年度	平成9年度
教 育 長	久野 英彦	堀内 貞夫	堀内 貞夫	堀内 貞夫
教 育 部 長	池田 嘉門	安河内一登(4～5月)	香野 信儀	香野 信儀
		香野 信儀(6月～)		(～1月)
社会教育課長	赤星 健彦	赤星 健彦	赤星 健彦	赤星 健彦
社会教育課長補佐	中村 茂	中村 茂		
文化担当係長	高橋 裕司	高橋 裕司		
文化財担当係長			舟山 良一	舟山 良一
主 査	吉田 悟	吉田 悟		
	舟山 良一(1・2次)	舟山 良一		
主 任 技 師	向 直也	向 直也	向 直也	向 直也
	徳本 洋一	徳本 洋一	徳本 洋一(5・6次)	徳本 洋一
			石木 秀啓(4次)	石木 秀啓(整理)
技 師	石木 秀啓(1次)	石木 秀啓(3次)		
			丸尾 博恵(4次)	丸尾 博恵
嘱 託	岸野 和子	岸野 和子	岸野 和子(～6月)	西村 晴香
			西村 晴香(10月～)	

〔発掘調査参加者〕岡本妙子、原田敬子、那波幸子、西田幸子、船越エミ子、高木幸子、河野房子、内山マサ子、田中フミ子、吉嗣波津子、高木冨子、中山三千代、川辺照子、中山チエ子、福岡麗子、篠原純子、大海雅子、島崎真知子、藤田和子、山口しげ子、池田タツヨ、川辺美喜子、前田チエ子、石井博司、大森円、井上蘭子(九州大学)

〔整理作業参加者〕河鍋洋子、松岡信子、町井裕子、鬼塚穂子、松藤レイ子、小林優美、渡辺直美、有田朱美、井手美智子、武下里織

II. 位置と環境

地理的環境

大野城市は福岡平野の東南部に位置し、市域の形はよく「ひょうたん」にたとえられる。また北側を三郡山地、南側を背振山地から派生する山に挟まれており、標高20m前後の平野はちょうど「ひょうたん」のくびれた部分にあたる。この平野は、御笠川や牛頸川の沖積作用により形成されている。

後原遺跡はこの平野部に位置し、現在の町名では白木原一丁目にあたる。周辺は古くから宅地化が進み既に平坦になっており、昔の地形など想像すらできないが、地元の方の記憶によると第1次調査のⅠ区や第3次調査区周辺はこんもりとした森になっており、現在の地面よりも高かったとのことである。なお、後原遺跡の調査地の小字名は後原と前田に分かれるが、各調査地の調査内容から周辺は一連の遺跡であると考えられ、第1次調査の際の遺跡名をそのまま用いた。

歴史的環境

後原遺跡は平成9年12月までに8次にわたる発掘調査が実施され、奈良時代・近世の遺構が確認されているが、遺物をみると弥生土器や古墳時代の須恵器も小片ながら含まれ、この時期の遺構の存在も伺わせる。周辺の遺跡の状況は既刊の報告書に詳述されているので、ここでは近世の白木原村の様子を知るため、やや長くなるが『大野城市史』民俗編に記載されている白木原村の項を引用してみたい。

四 白木原村

(1)概 要

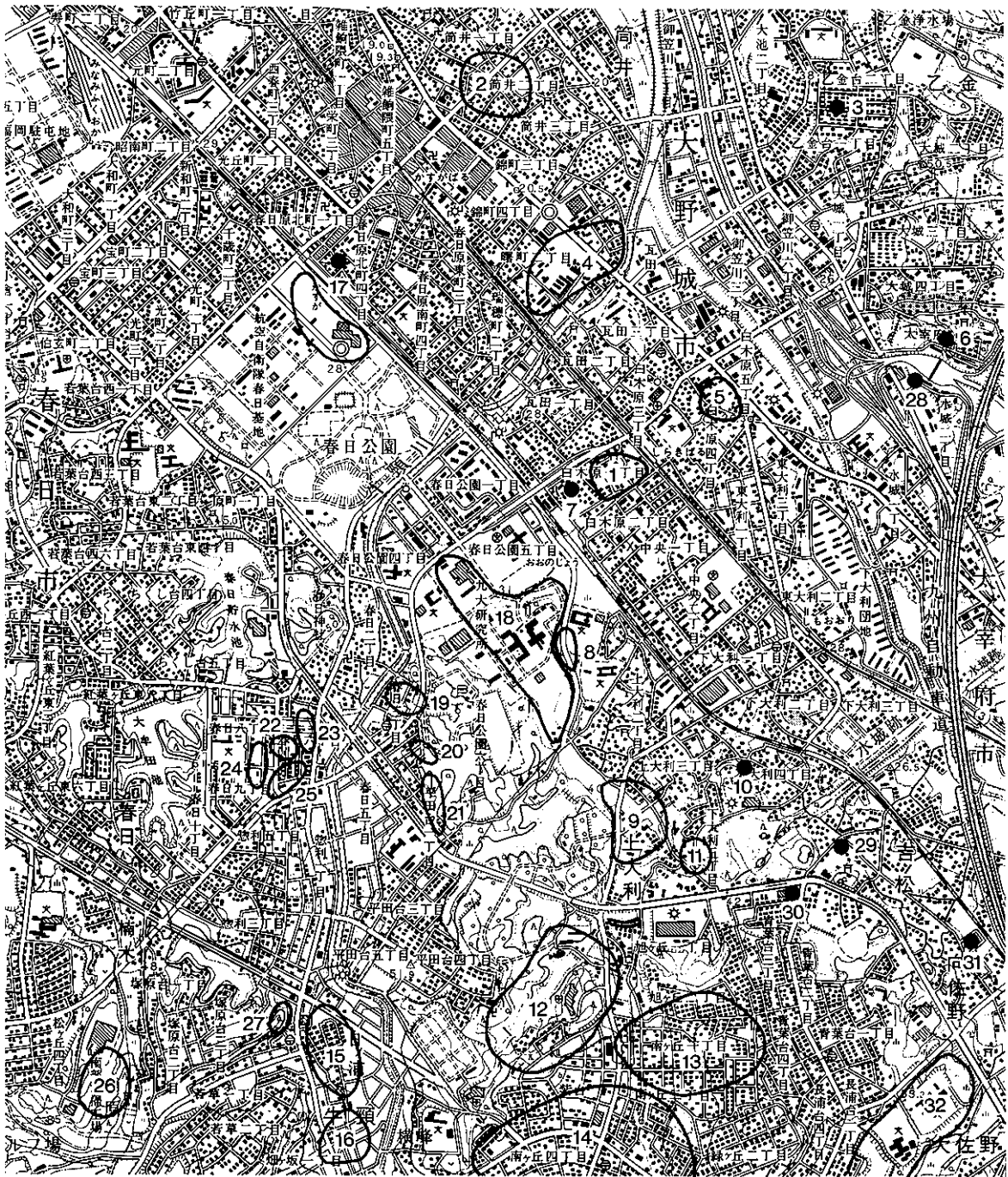
白木原村の面積は0.42平方キロで、東方は下大利村、南方は上大利村、西方は春日村（春日市）北方は瓦田村に接している。

『筑前国続風土記拾遺』には「大利、白木原は元一村なり、近代別村となる」と書かれているが、その別村となった時期は明確ではない。

しかし、明応8年（1499）正月24日の『光明寺々領注文案』（太宰府神社文書）に「白木原一所八段」と見え、天正年間（1580年ごろ）の『筑前国田畠之高村々指出前之帳』には、白木原村の地積・分米の記録があるので、上大利と下大利の分村の時期と同じ頃の分村ではないかと思われるが、300年後の1800年代に書かれた『筑前国続風土記拾遺』の「近代別村となる」という記事、あるいは氏神様は上大利・下大利村の老松神社に対し、白木原村は隣村の瓦田村と同じ地祇神社であることなど、なお後人の研究にまちたい。

(2)地名の起こり

『筑前国続風土記拾遺』に「白木は新羅なるべし、往古は新羅或ハ鷄林をも志良伎と訓たり、今国中所々に新羅明神を祀りて白木明神といふも是故なり。」とある。7世紀から9世紀にかけて新羅から相次いで渡来者があったことは、記録にも残されており、これら渡来者が居住し開拓した所であろうということである。



- | | | | | |
|----------|-------------|------------|------------|-----------|
| 〔大野城市〕 | 8. 池田・池の上遺跡 | 16. 塚原遺跡 | 22. 惣利遺跡 | 29. 島本遺跡 |
| 1. 後原遺跡 | 9. 上園遺跡 | 〔春日市〕 | 23. 惣利北遺跡 | 30. 神ノ前竊跡 |
| 2. 村下遺跡 | 10. 谷川遺跡 | 17. 駿河遺跡 | 24. 惣利西遺跡 | 31. 原口遺跡 |
| 3. 銀山遺跡 | 11. 出口遺跡 | 18. 九州大学筑紫 | 25. 惣利東遺跡 | 32. 宮ノ本遺跡 |
| 4. 石勾遺跡 | 12. 野添竊跡群 | キャンパス遺跡群 | 26. 浦ノ原竊跡群 | |
| 5. 原ノ畑遺跡 | 13. 大浦竊跡群 | 19. 向谷北遺跡 | 27. 塚原古墳群 | |
| 6. 笹原古墳 | 14. 平田竊跡群 | 20. 向谷古墳群 | 〔太宰府市〕 | |
| 7. 御供田遺跡 | 15. 日ノ浦遺跡 | 21. 平田北遺跡 | 28. 成屋形古墳 | |

第1図 周辺遺跡分布図 (1/25000)

また、『同拾遺』には「後口原と云所に榊樹多し、往来の人立寄りて枝を折取事有。」とも書かれている。榊の木等暖帯林の樹肌白色の木が多く生育している所であったため、白木原というようになったとも言われている。

(3)戸口

白木原村には17の小字がある。

川原、原ノ畑、大道端、ハサコ、原ノ前、原、原ノ後、後原、前田、後田、道場、荒田、沼尻赤岸、コク高、池田、三兼

右の小字の外に古文書等には次の小字名も見える。

本村、ムラウチ、安行、町口

これらの小字の中で集落を形成していた地区については、『筑前国続風土記拾遺』に「民居は本村及び原、安行（大道側作出也）にあり」とある。

また、『福岡県地理全誌』には

「人家本村16戸、町（町立東南ヨリ西北、長3町、町ノ西北ハ瓦田村ニ属ス）22戸、原2戸、三所ニアリ」

と記録されており、戸数47戸、人口213人であり、職業は支那学1人、大工5人で、残りはすべて農業である。その他の統計資料としては次のものがある。

享和2年（1802）	19戸	84名（男47、女37）
安政3年（1856）	28戸	130名（男71、女59）
明治16年	51戸	271名
明治17年	55戸	139名
明治22年	49戸	291名

聞き取り調査によれば大正初期には

町往還上組	13戸	村組	13戸
町往還下組	13戸	4件	4戸

計48戸で、町往還の上組と下組は太宰府往還に沿って開けた町であり、次のような商店があった。

上組 酒屋1戸、饅頭屋1戸、大工1戸

下組 酒屋1戸、菓子屋1戸、紺屋1戸、雑貨屋1戸、綿糸屋1戸、煙草屋1戸
鍛冶屋1戸、魚屋1戸、臘・油屋2戸、焼瓦屋1戸

村組は往還の西方の氏神様地祇神社の周辺にあり、焼瓦屋が1戸あった。四軒屋は比較的新しい集落である。

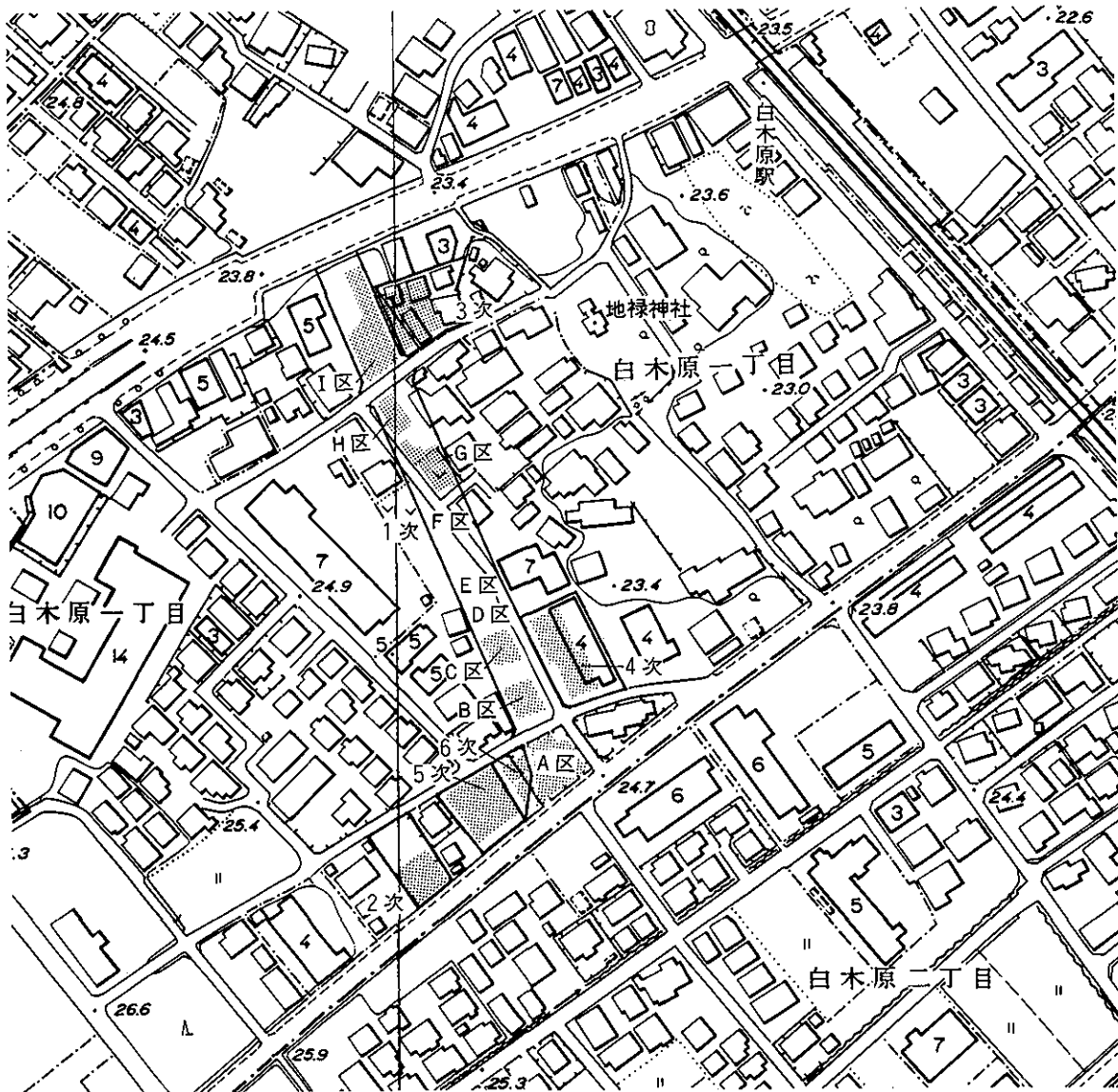
『大野城市史』民俗編（1990年）P.341～343より抜粋

Ⅲ. 調査の結果

1. 第1次調査

(1) 調査に至る経緯

都市計画道路大野城駅前線の建設が予定されたのは、平成6年度のことである。予定地は大野城市白木原1丁目233-40外の略南北方向にのびる道路用地であった。当地は1980年発行の福岡県遺跡分布地図では遺跡として確認されていなかった。しかし、道路用地の西方約100mの所で1990年に御供田遺跡の発掘調査が実施されていることから、当地も遺跡の範囲に含まれることが考えられ、平成6年7月に試掘調査を実施した。その結果、一部攪乱等で遺構が検出できなかった部分もあるが、道路用地のほぼ全面にわたって遺構の広がり認められた。この結果を受けて、事業主である大野城市都市計画課と協議を行い、8月中旬から発掘調査を実施することとなった。発掘調査は平成6年8月23日から10月28日の間実施した。調査は、現状の道路を使用しながら実施したため、調査で



第2図 後原遺跡第1～6次調査配置図 (1/2500)

きたのは道路以外の空き地部分である。開発対象面積2,840㎡の内、発掘調査面積は1,255㎡である。発掘調査は舟山良一・石木秀啓が担当した。

(2) 調査の結果

A. 調査概要 (第2図、図版1)

先述のように、発掘調査は道路を使用したまま空き地の部分を調査した。このため南側からアルファベット順にA～I区まで設定したが、D区は埋設管、E区は攪乱、F区は狭小のため調査を実施できなかった。また道路下は調査できず、部分的な調査になったことは残念である。

B. 各区の調査

i) A区 (第3図、図版1)

地表下90cmで溝、ピットを検出した。溝は後述の5・6次調査検出の溝へと続く。土師器・須恵器・黒色土器A類がビニール袋5袋分出土したが、いずれも小片である。

SD01 (第3図、図版1)

調査区の南側に位置し、一部途切れているが東西方向にのびる。幅60～80cm、検出面からの深さは10cm以内、断面は浅い鍋底状を呈する。溝底のレベルは西へむかってやや下る。溝内からは須恵器・黒色土器A類が出土しているが図化できない。

SD02 (第3図、図版6)

北東～南西方向に蛇行しながらのびる。幅約40cm、検出面からの深さは約13cm、断面はU字型を呈する。溝底のレベルは東へむかってやや下る。溝内からは土師器が出土しているが、小片のため図化できない。

ii) B区 (第4図、図版2)

土坑、ピットを検出した。調査区西側の土坑が集中する部分は、表土剥ぎ時は大きく黒色土が広が

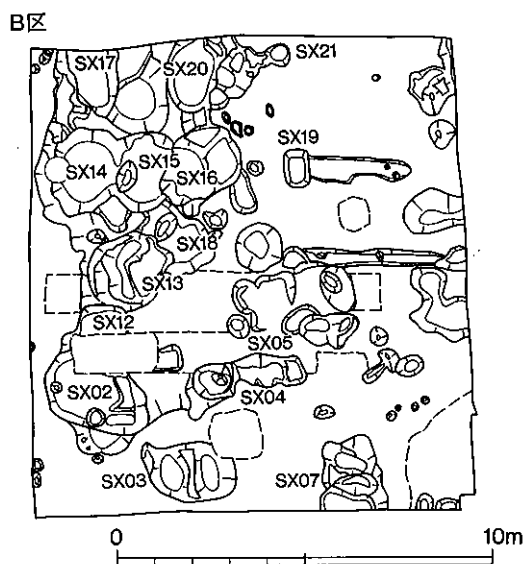


第3図 1次調査A区遺構配置図 (1/200)

っており、これを掘り下げてゆくと土坑のプランを検出できた。このため土坑の切り合い関係は一部を除きほとんど確認できなかった。また、土坑が調査区の西半部に集中していることは、何らかの規則性が伺える。1次調査地内では最も遺物量が多く、特に近世陶磁器の出土が目立つ。土師器・瓦質土器・陶磁器・瓦・鉄器・砥石がパンケース4箱分出土した。

SX02 (第5・7図、図版6・9)

試掘調査のトレンチに切られ、SX12に切られる。径2.1~2.7mの不整円形を呈し、検出面からの深さは最大63cm。検出面と埋土中から、土師器・須恵器・陶磁器・瓦が出土した。



第4図 1次調査B・C区遺構配置図(1/200)

土師器

甗(1) 把手のみ残存する。胎土は粗く、一部黒斑が残る。

磁器

碗(2) 底部のみ残存する。底径3.7cm。見込みに砂目積みの跡が残る。唐津・朝鮮系、17世紀前半。

皿(3) 底部のみ残存する。底径7.1cm。見込みに山水文を描く。蛇ノ目凹形高台。19世紀。

陶器

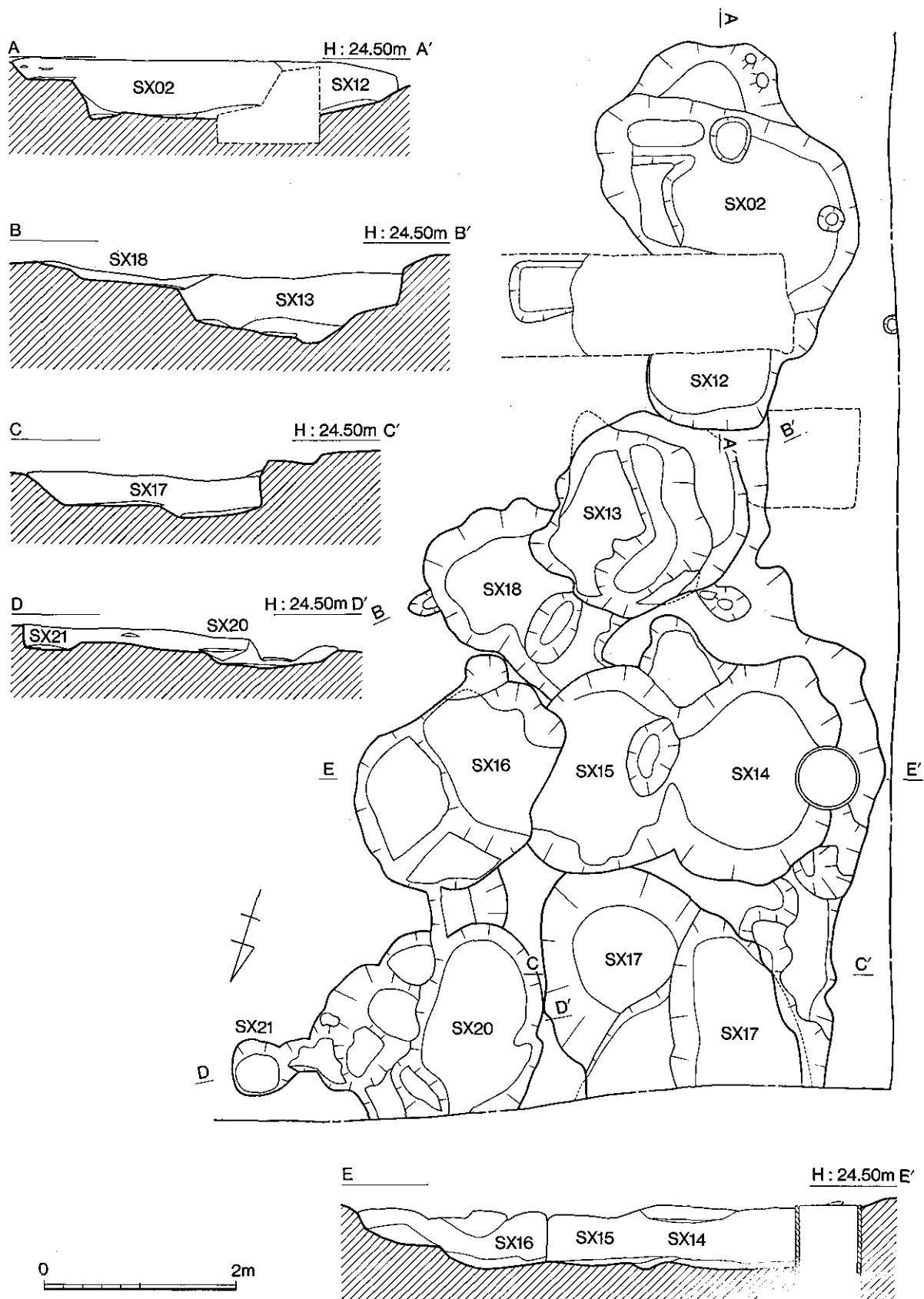
壺(4) 半身ほど残存し、口径7.8cm、器高12.0cm、底径9.0cmに復元される。胴部が大きく張り、肩部には把手が2つつく。胎土は灰白色を呈し、外面はうぐいす色の釉をかけ、内面は肩部以下に黄褐色土の釉をかける。底部~外面下部は露胎である。武雄系。

SX03 (第6図)

SX02の東側に位置し、長さ2.6×幅1.6mの隅丸長方形プランを呈する。北隅を攪乱により切られているが、他の土坑とは切り合わない。検出面からの深さは約50cm、中央の高くなる部分の検出面からの深さは13~27cmである。龍泉窯系青磁碗や染付碗・皿などが出土したが、小片のため図示できない。

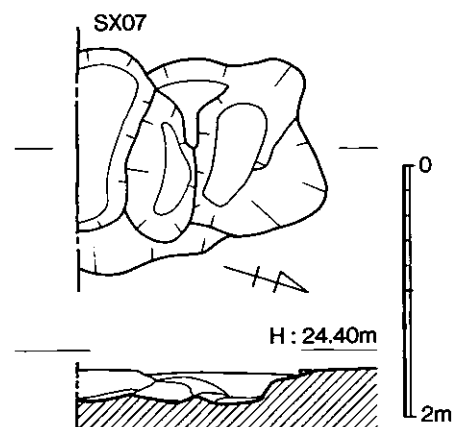
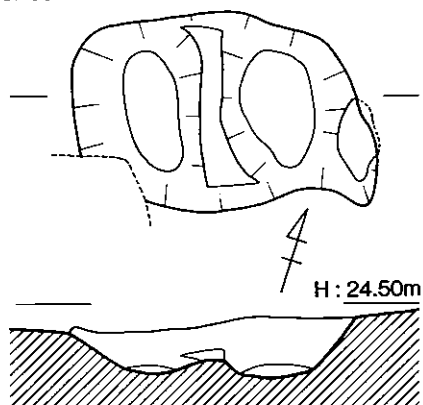
SX07 (第6・7図、図版9)

SX03の東側に位置し、一部調査区外にのびるが、辺約1.5mの不整形プランを呈する。検出面からの深さは29~33cmである。本来いくつかの土坑が切り合っていたようであるが、現場では確認



第5図 1次B区SX02・12~18・20実測図 (1/60)

SX03



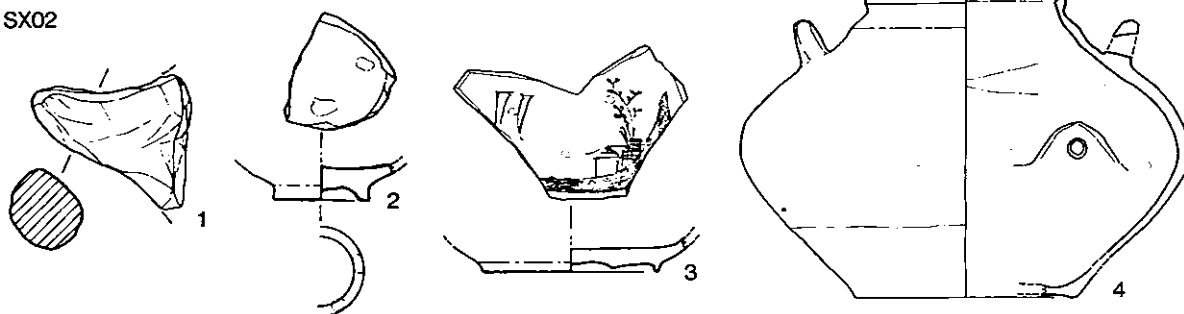
第6図 1次B区SX03・07実測図 (1/60)

鉄器が出土したが、量は少ない。

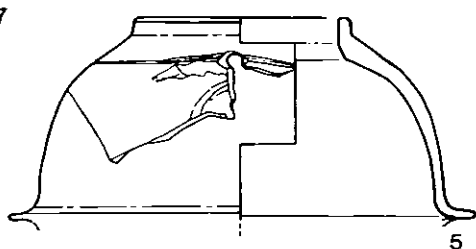
鉄器

釘 (6) 残存長4.3cm、一辺5mmの角柱状をなす。

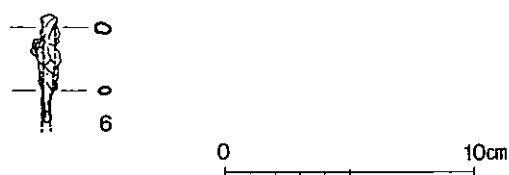
SX02



SX07



SX13



第7図 1次B区SX02・07・13出土遺物実測図 (1/3)

できなかった。土師器・陶器が出土したが、量は極めて少ない。

陶器

釜 (5) 復元口径8.6cm。剥離しているが注口があり、上部には把手の剥離跡が認められるが、剥離後穿孔しさらに使用している。胎土は橙色を呈し、外面は褐色の釉を施し、内面は露胎である。鐏の下面には煤が付着している。

S X 12 (第5図)

S X 02とS X 13を切る。試掘調査トレンチに切られるが、残存部で一辺1.37mの隅丸方形プランを呈する。検出面からの深さは45cm、埋土は上層より褐色土→黒褐色土→黒色土でしまりのない土であった。炭が1点のみ出土したが、土器類はなかった。

S X 13 (第5・7図、図版9)

S X 12に切られ、S X 18を切る。径約2.1mの円形プランを呈し、検出面からの深さは71~88cm、東側のテラスは中央へむかってくぼみ、断面は浅いスリ鉢状を呈する。埋土は上層から褐色土→暗褐色土→黒褐色土→黒色土でレンズ状に堆積していた。弥生土器・土師器・陶磁器・瓦質土器・

S X 14 (第5・8・9図、図版6・9・10)

調査区北東側の土坑が最も切り合う所に位置し、S X 15を切ると思われる。径約2.3mの不整円形を呈し、検出面からの深さは80cmである。遺物の出土量はB区内で最も多く、パンケース2箱分ほどある。弥生土器・須恵器が少量あるほかは陶磁器・瓦が多く、瓦質土器・鉄器・砥石なども出土した。

磁器

碗(7) 口径9.8cm、器高6.05cm、底径4.0cm。外面は簡略化した蝶を描き、内面は「寿」を簡略化した銘が見られる。呉須の発色が悪く、焼成不良である。肥前系、19世紀前半。

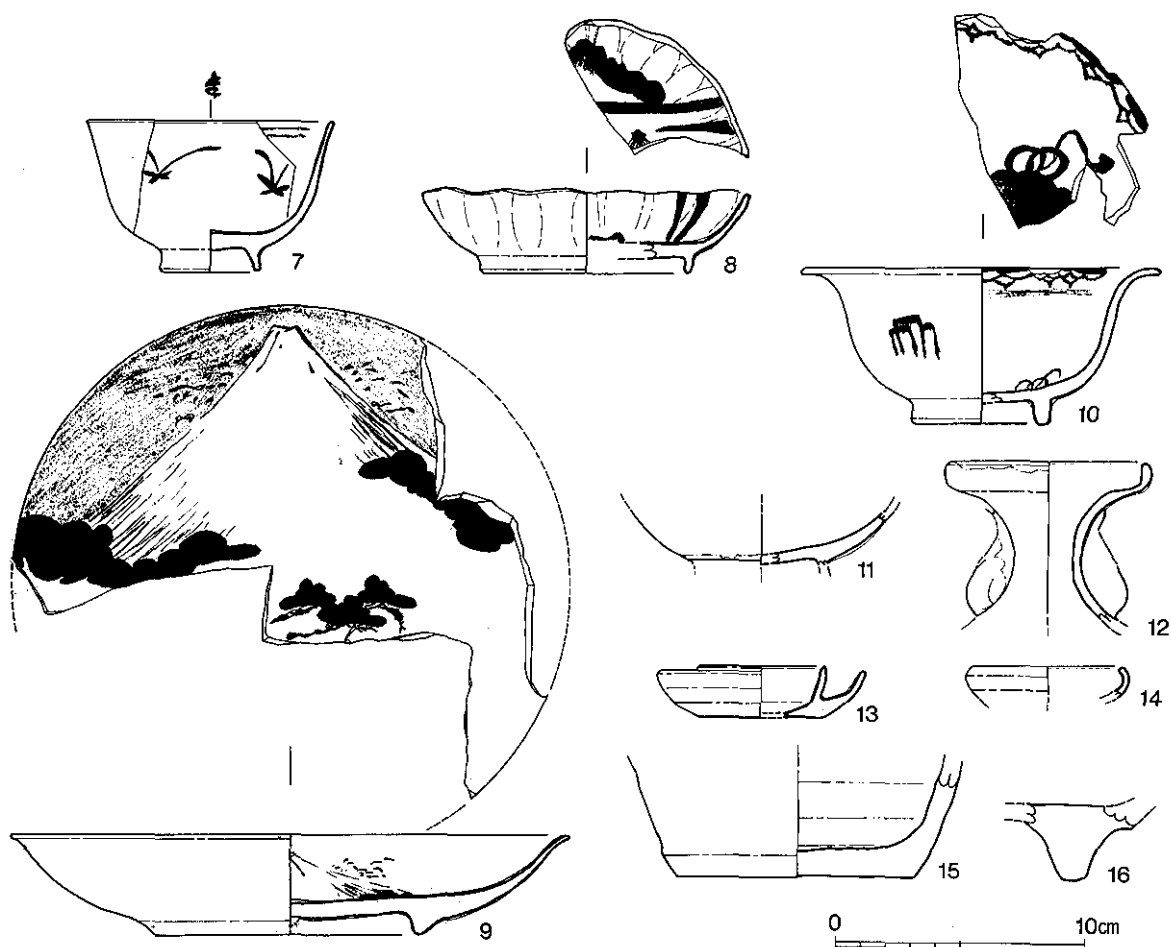
皿(8・9) 8は復元口径13.0cmの輪花型の皿、9は径22.2cmの中皿。それぞれ内面に富士山を中心とした山水文を描く。志田焼の可能性はある。19世紀前半。

鉢(10) 復元口径14.4cm、器高6.2cm、底径6.2cm。口縁は大きく外反し、端部に鎬を入れる。内底面に草花文を描く。19世紀前半。

徳利(11) 小片であるが、内面露胎でありここでは一応徳利とした。

陶器

花瓶(12) 口径7.8cm。口縁部のみ残存。褐色の釉にうぐいす色・白色の釉をかける。19世紀。



第8図 1次B区SX14出土遺物実測図①(1/3)

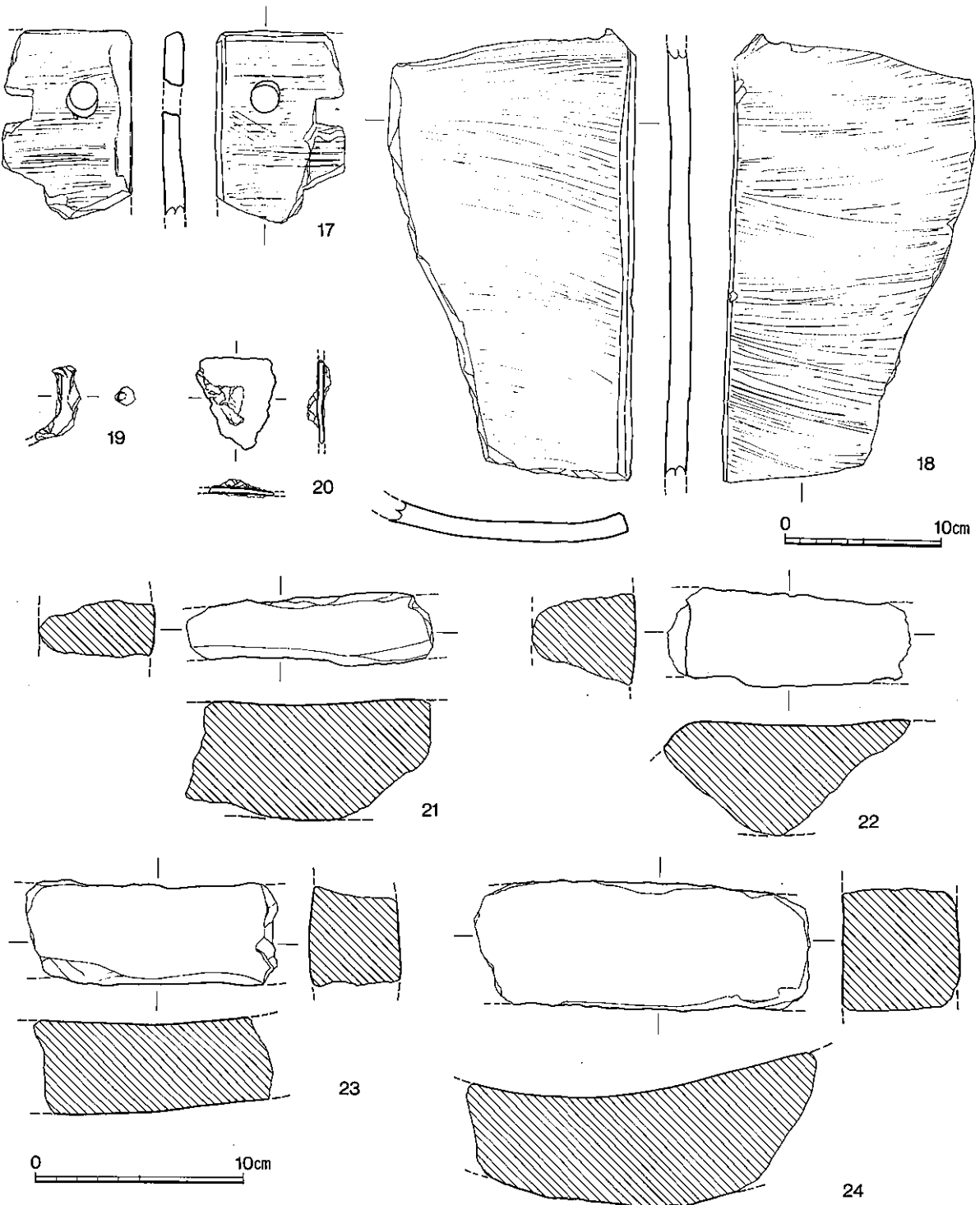
灯明皿 (13) 底部糸切り。外面は露胎。口縁部は緑色の釉をふきとっている。

皿 (14) 褐色の釉をかける。

壺 (15) 底径9.4cm。褐灰色の胎土に、褐色釉をかける。底部露胎。

瓦質土器

火鉢 (16) 火鉢もしくは七輪の脚部と思われる。



第9図 1次B区SX14出土遺物実測図② (17・18は1/4、その他は1/3)

瓦 (17・18) 形状より一応瓦とした。両面とも全体にハケを施す。胎土は黄褐色で、全面燻されており、黒くなっている。長辺が30cmをこえ、隅に径2cmほどの穿孔が見られる。雁振瓦か？

鉄器

釘 (19) 錆が著しい。L字型に曲がっているが、長さ4cm程に復元できる。

不明鉄製品 (20) 厚さ2mmの鉄板で、形状はまったく不明。鎌などであろうか？

石器

砥石 (21~24) いずれも打ち欠かれた状態である。24は研ぐ面が弧をなす。

SX15 (第5図)

SX14・16の間に位置し、2つの土坑に切られる。径2.1mの円形に近い土坑で検出面からの深さは69cmである。弥生土器・陶磁器が少量出土しているが、小片のため図化できない。

SX16 (第5・10図、図版6)

SX15を切り、SX20とも切り合う。径約2.0mの不整円形を呈し、北側にテラスがつく。検出面からの深さは67cm、テラスの深さは20~46cmである。弥生土器・陶器が出土した。

弥生土器

鉢 (25~27) 基部~脚部のみの残存で、全体の形は不明である。いずれも黄褐色を呈し、胎土には白色石粒を多く含む。

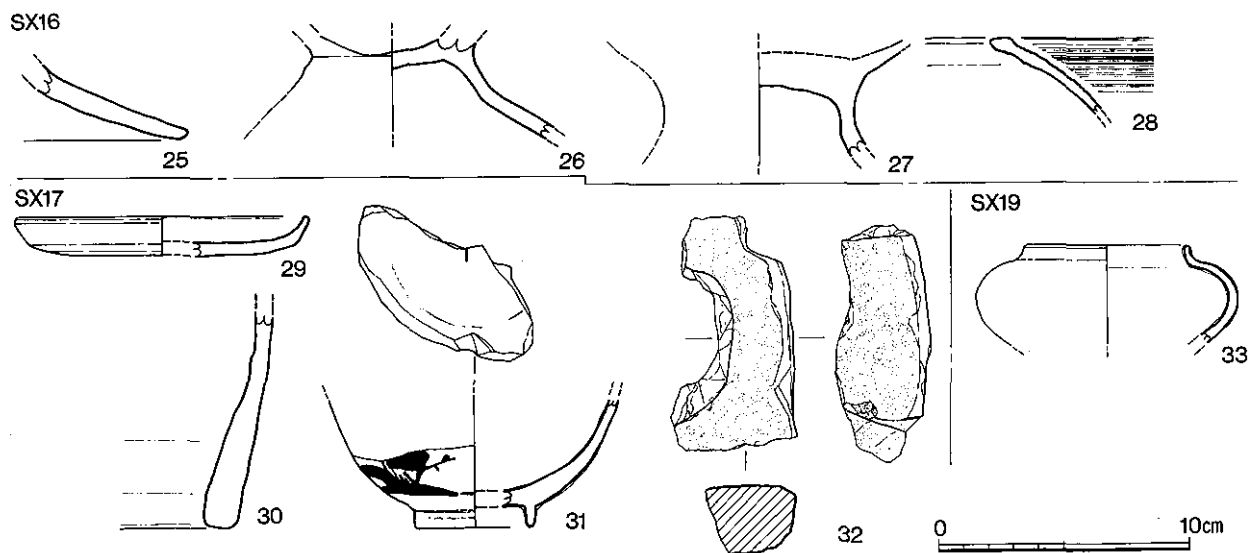
陶器

壺 (28) 肩部にカキメを有し、内外面に褐色の釉を施すが、内面の釉は体部上半のみである。

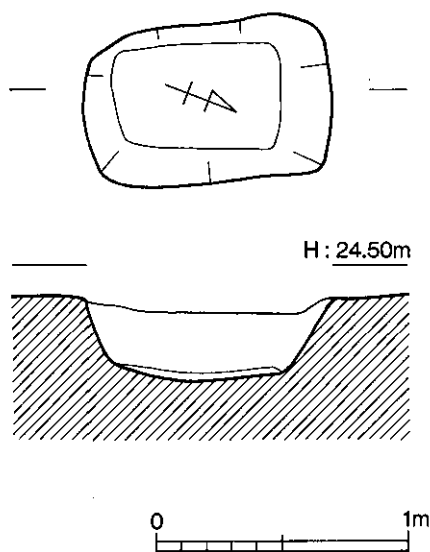
SX17 (第5・10図)

調査区の北西部に位置し一部調査区外にのびるが、残存部で2.6m以上の楕円形プランを呈する。検出面からの深さは最大67cm、東側の2つのテラスは35~43cmである。弥生土器・土師器・陶磁器が少量出土した。

土師器



第10図 1次B区SX16・17・19出土遺物実測図 (1/3)



第11図 1次B区SX19実測図(1/30)

杯(29) 復元口径11.6cm。体部下半に屈曲部をもち、口縁部は内湾している。内面および外面の屈曲部までヨコナデ。屈曲部以下には布痕が認められる。

磁器

碗(31) 底径は復元値で4.6cm。外面の文様は山であろうか？肥前系、18世紀後半。

瓦質土器

火鉢(30) 脚部のみ残存。内外面赤橙色を呈し、内面はヨコハケ。

不明石製品(32) 断片のみ残存。角形の石材に円形と方形のくりこみが認められる。

SX18(第5図)

SX13と切り合うが、前後関係は明らかでない。残存部で長さ2.0×幅1.1mの略方形プランを呈し、検出面からの深さは最大27cm、底面には長さ79×幅47cm深さ9cmの楕円形プランの土坑が認められる。陶器花瓶が出土したが、図示できない。

SX19(第11図、図版7)

SX16の北東側に位置し、長さ1.0×幅0.64mの方形プランを呈する。検出面からの深さは32cm、埋土は黒色・黒灰色砂質土、土坑断面は箱型に掘り込まれることから墓の可能性はある。陶器壺が出土した。

陶器

壺(33) 胴の張りは大きく頸部は短く立ち上がる。内外面ともうぐいす色の釉を施す。

SX20(第5図、図版6)

SX17の東側に位置する。一部調査区外にのび、残存部で径2.22mの不整形プランを呈する。検出面からの深さは最大38cm、土坑の東側は二段掘りを呈し深くなる部分で30cmである。弥生土器・陶磁器・瓦が少量出土したが、小片のため図示できない。

SX21(第4図)

SX20と切り合い、径62cmの不整形円形プランを呈する。検出面からの深さは30cmである。遺物の出土はなかった。

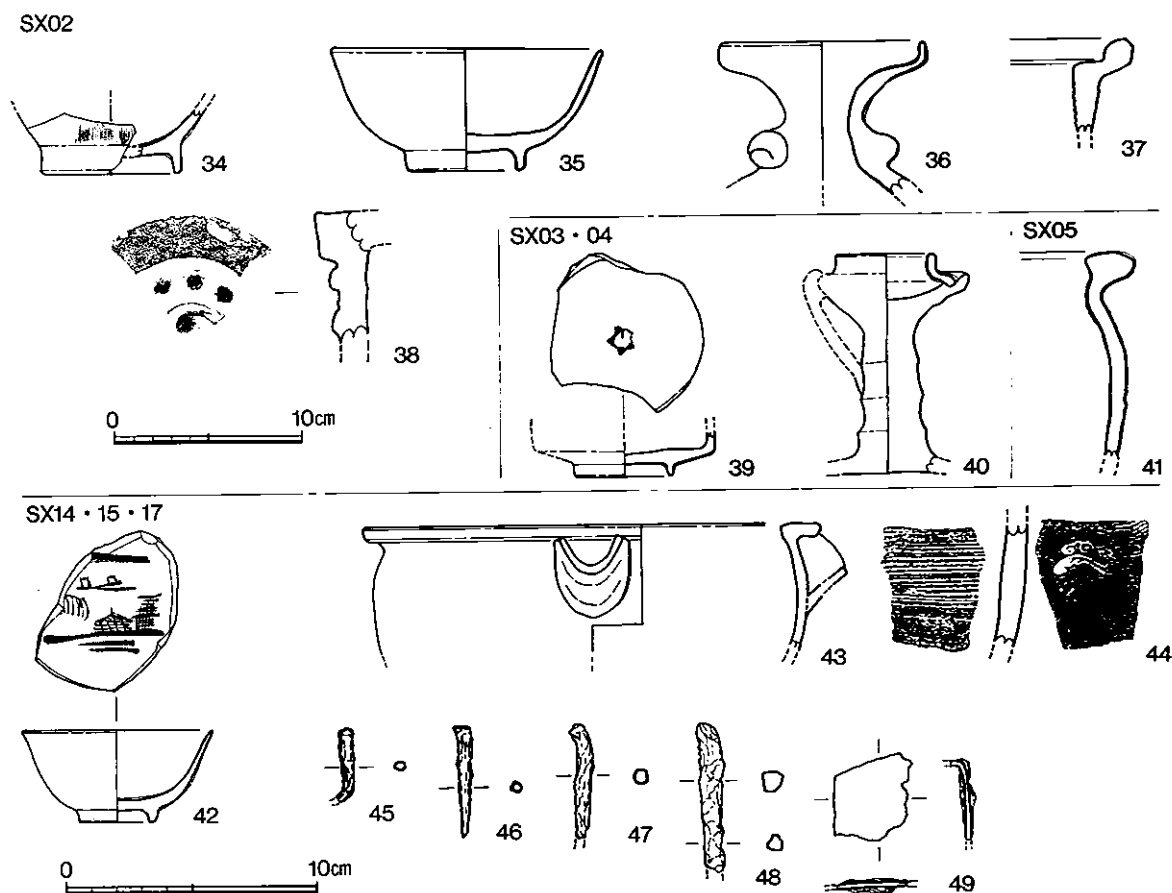
その他の出土遺物(第12・13図、図版10)

検出中に多量の遺物が出土したが切り合い関係が判然とせず、どの遺構に伴うか不明であった。ここでそれらの遺物を報告したい。

SX02周辺

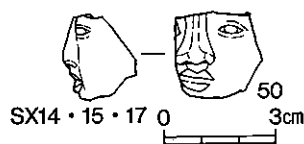
磁器

碗(34) 復元底径5.5cm。広東型。外面の文様は不明である。17世紀末～18世紀初頭。



第12図 1次B区遺構検出面出土遺物実測図① (38は1/4、その他1/3)

陶器



碗 (35) 口径10.8cm。見込みに蛇ノ目釉剥ぎを施し、砂を塗り付ける。
19世紀。

花瓶 (36) 灰白色の胎土に黄緑色の釉をかけさらに褐色釉をかける。

第13図 1次B区遺構検出面出土遺物実測図② (1/2)

瓦質土器

鍋 (37) 口縁部がL字状に立ち上がり、内面にヨコハケを施す。外面には煤が付着し、器壁は非常に滑らかである。

軒丸瓦 (38) 1/4ほどの破片である。

SX03・04周辺

磁器

碗 (39) 高台付近のみ残存する。筒型碗である。見込みにくずれた五弁花、外面に円文・放射状の文様を描く。呉須の発色は悪く、焼成不良品である。18世紀末。

陶器

灯明具 (40) 器高8.7cm。受け口状の杯部をもち、灰白色を呈する胎土に褐色釉をかけ、底部は露胎である。欠失するが把手がつくようである。

SX05周辺

陶器

甕 (41) 体部の破片も出土しているが接合しない。褐色の胎土に光沢のある褐色釉をかける。

S X 14・15・17周辺

磁器

碗 (42) 口径7.6cm、器高3.6cm、底径3.0cm。内面に山水文を描く。19世紀。

陶器

鉢 (43) 復元口径18.3cm。ての字状の口縁部に片口がつく。灰白色を呈する胎土に黄白色の釉をかけ、さらに口縁部上面には緑色の釉がかけられる。

瓦質土器

器種不明 (44) 内面ヨコハケを施す。外面に麒麟の文様がスタンプされる。

鉄器

釘 (45～48) いずれも錆が著しい。長さ2.8～5.8cm。

不明鉄器 (49) 小片のため全形は不明であるが、一方の端をL字状に折り返している。鎌など農具の破片であろう。

土製品

土人形 (50) 顔の部分のみ残存する。内面に成形時の指頭痕が残る。

iii) C区 (第4図、図版2)

地表下50cmで溝・ピットを検出した。ピットは建物を構成すると思われるが、調査区が狭く実態は不明である。弥生土器・土師器・陶磁器がパンケース1箱分出土した。

S D 03 (第4・14図、図版10)

調査区の南端で検出した幅40cmの溝である。検出面からの深さは9～24cmで、溝底のレベルは東へ向かって下っている。陶磁器・瓦がビニール袋1袋分出土した。

磁器

香炉 (51) 小片のため器種については迷うが、ここでは一応香炉とする。内面露胎で型作りによる指頭痕が残る。19世紀?

瓦質土器

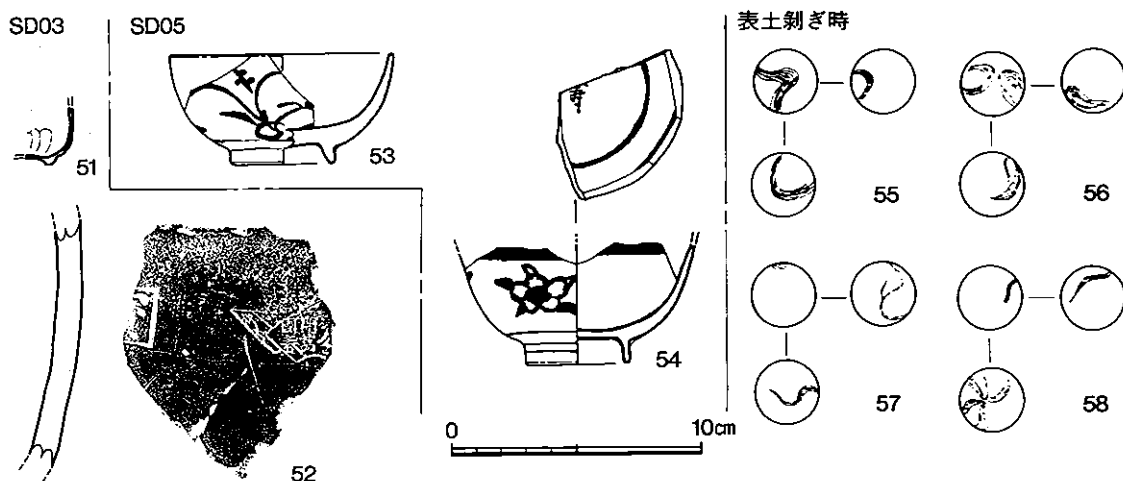
器種不明 (52) 破片のため器種不明であるが、壺もしくは甕の胴部と考えられる。外面に扇形のスタンプが見られ、中に「開萬・國春」の文字が見える。またその右側に判読できないが、方形の文字入りスタンプが認められる。久留米蒲地焼?

S D 04 (第4図)

S D 05に直交して切られ、攪乱にも切られる。北東～南西方向にのびるが、攪乱より西へはのびていない。検出面からの深さは4～12cm、溝底のレベルは東側に下っている。弥生土器が60点ほど出土したが、図化できるものはなかった。

S D 05 (第4・14図、図版10)

S D 04を切り、S D 06に切られる。幅21～47cm、検出面からの深さは1～16cmであるが、南へむかって下っており、S D 06から約8mのびた所で途切れている。弥生土器・土師器・陶磁器・瓦・



第14図 1次C区出土遺物実測図 (1/3)

石炭層が出土した。

磁器

碗 (53・54) 53は半身ほど残存し、口径9.0cm、器高4.4cm、底径4.2cm。外面に草花文を描くが、呉須の発色が悪く緑色を呈する。肥前波佐見系、18世紀後半。54は見込みに「寿」、外面に椿を描く。肥前系。18世紀後半～19世紀前半。

SD06 (第4図)

調査区の北壁に沿って検出され、約半分は調査区外にのびる。検出面からの深さは確認できた部分で32cm、断面はU字型を呈する。遺物の出土はなかった。

その他の出土遺物 (第14図、図版10)

表土剥ぎ中に出土した。

石製品

球 (55～58) いずれも直径2.5cm。丁寧に研磨され非常に滑らかで、球体は真円に近い。

iv) G区 (第15図、図版3)

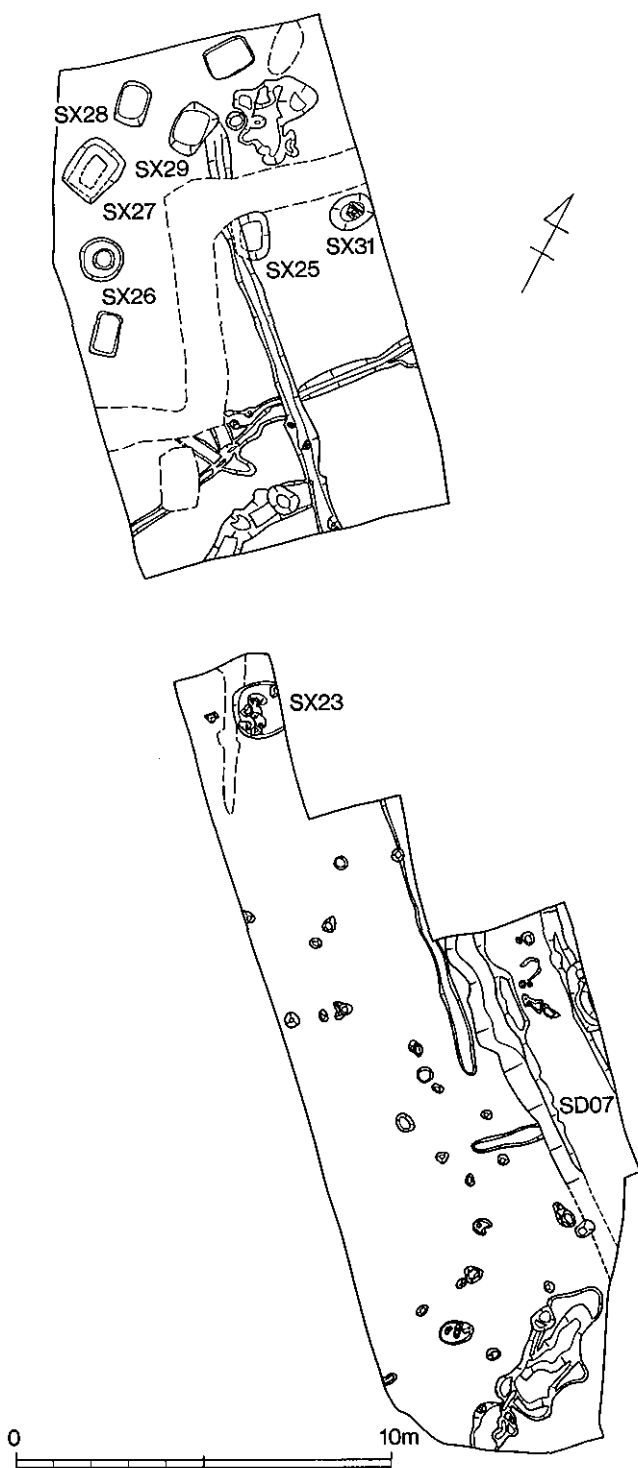
地表下60cmで土坑・溝・ピットを検出した。調査区の北側には大きな柿の木や低木が植わっており、これを避けて調査区を設定したため不自然な形になってしまった。北側で検出された隅丸方形の土坑 (SX23) からは、大量の炭とともに仏飯器・土師器杯が出土した。土師器・陶器がビニール袋4袋分出土した。

SD07 (第15図、図版7)

調査区の東側で約7m検出され、略北西～南東方向で調査区外にのびるが約11m離れたH区では検出されていない。幅2.45～3.13m、検出面からの深さ45～83cm、溝底のレベルは北東へむかってわずかに下っている。断面は鍋底状を呈する。遺物は弥生土器が1点出土したが、小片のため図化できない。

SX23 (第16・17図、図版7)

調査区の最も北側で検出された。土坑の東側は調査区外へのびるが、1辺1.45mの隅丸方形プラ



第15図 1次調査G・H区遺構配置図(1/200)

隅丸長方形プランを呈し、検出面からの深さは65cmである。陶器碗が1点出土した。

陶器

碗(65) 体部上半を失う。底部糸切り。底径2.8cm。淡黄色の胎土に、灰白色の釉をかける。

ンを呈する。検出面からの深さは16~22cmであるが、底面には深さ4~6cm程度の小穴と6cmほどの高まりが見られ凹凸が著しい。炭とともに土師器・須恵器・陶器が出土したが、図化したもの以外はいずれも小片である。

土師器

杯(59~63) いずれも底部糸切り。口径9.1~12.0cm、器高1.65~2.0cmと口径の割に器高の変化はあまりない。

陶器

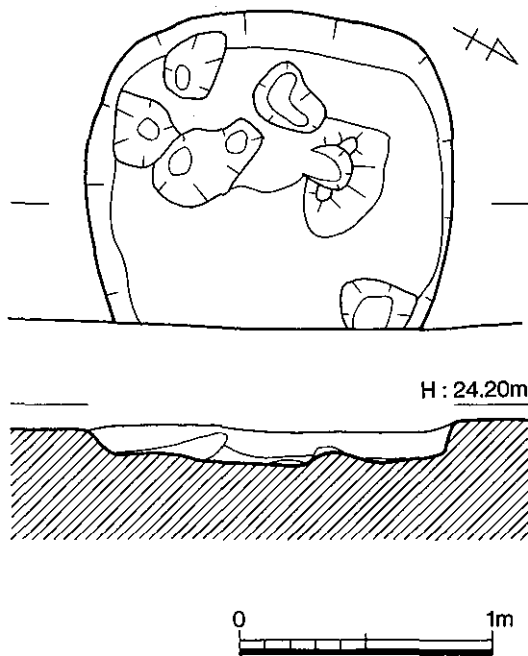
仏飯器(64) 復元口径7.0cm、器高5.05cm、底径5.3cm。赤褐色の胎土に白い化粧土をかけるが、高台部先端と底部は露胎。底部は糸切り。口縁部には煤が付着する。

v) H区(第15図、図版3)

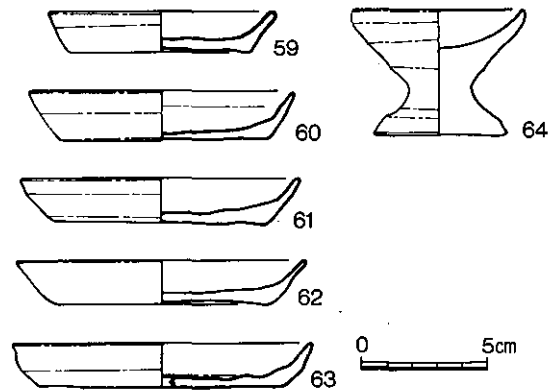
地表下70cmで円形・長方形プランの土坑と溝・ピットを検出した。土坑は調査区の北半部に集中し、調査時はこれらを性格不明土坑(SX)として取り扱ったが、調査の結果から見るとこれらの土坑は墓であった。このため、墓の遺構番号は混乱を避けるため調査時の遺構番号をそのまま用いることとし、遺物が出土したもののみ報告する。土師器・須恵器・陶器がビニール袋10袋分出土した。

SX25(第18・20図、図版11)

G区よりのびる幅50cmほどの溝に西側を切られる。長さ1.22×幅0.88mの



第16図 1次G区SX23実測図(1/30)



第17図 1次G区SX23出土遺物実測図(1/3)

S X 26 (第18・20図、図版 8)

S X 27の南側に位置し、径1.12mの円形プランを呈する。墓坑は深さ70cm、断面二段掘りを呈し、棺材の出土はなかったが早桶を据えた跡と推測される。二段目の墓坑は深さ27cm、底面の径は45cmである。炭が1点出土したほか、遺物の出土はなかった。

S X 27 (第18・20図、図版 8・11)

S X 28の南側に位置し、長さ1.52×幅1.25mの長方形プランを呈する。墓坑を約70cm掘り下げ底面まで半載した後、断面とプランで長方形の落ち込みを検出した。断面を見ると、墓坑を深さ90cm掘り込んだ後に棺を据えたものと判断された。したがって、棺の大きさは残存部で長さ25cm、幅40～45cmしか確認できなかった。陶器碗が1点出土した。

陶器

碗(66) 一部欠けるがほぼ完形。口径8.4cm、器高4.8cm。灰白色の胎土に、光沢のある灰白色の釉をかけるが、体部下半と高台は露胎である。

S X 28 (第18図)

S X 29の西側に位置し、長さ1.13×幅0.80mの長方形プランを呈する。墓坑は深さ60cmである。須恵器杯蓋片が1点出土したが、小片のため図化できない。

S X 29 (第15図)

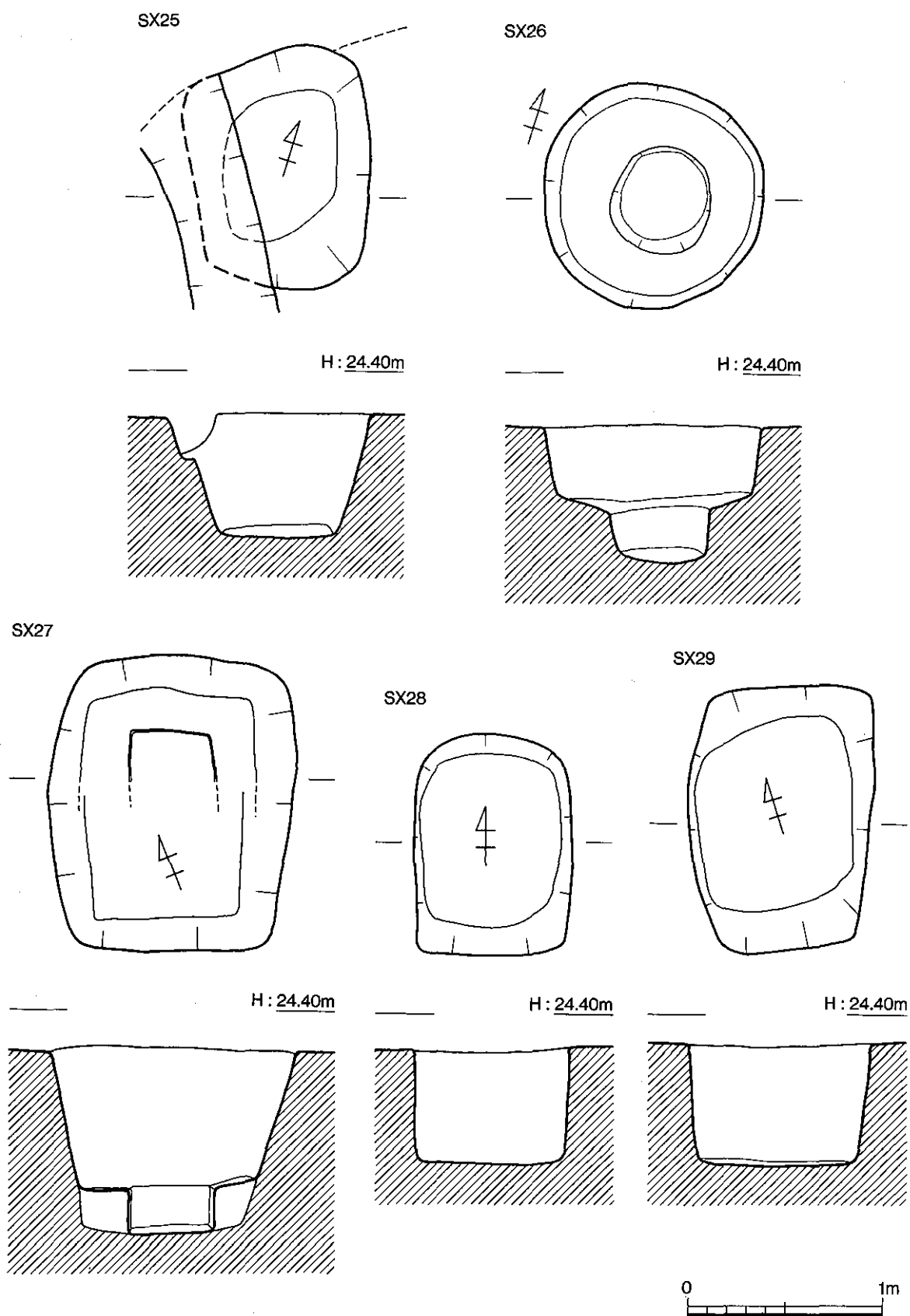
G区からのび、S X 25を切る溝に切られる。長さ1.35×幅0.84mの長方形プランを呈し、墓坑の深さは61cmである。土師器と須恵器の小片が1点ずつ出土したが、図化できない。

S X 31 (第19・20図、図版 8・11)

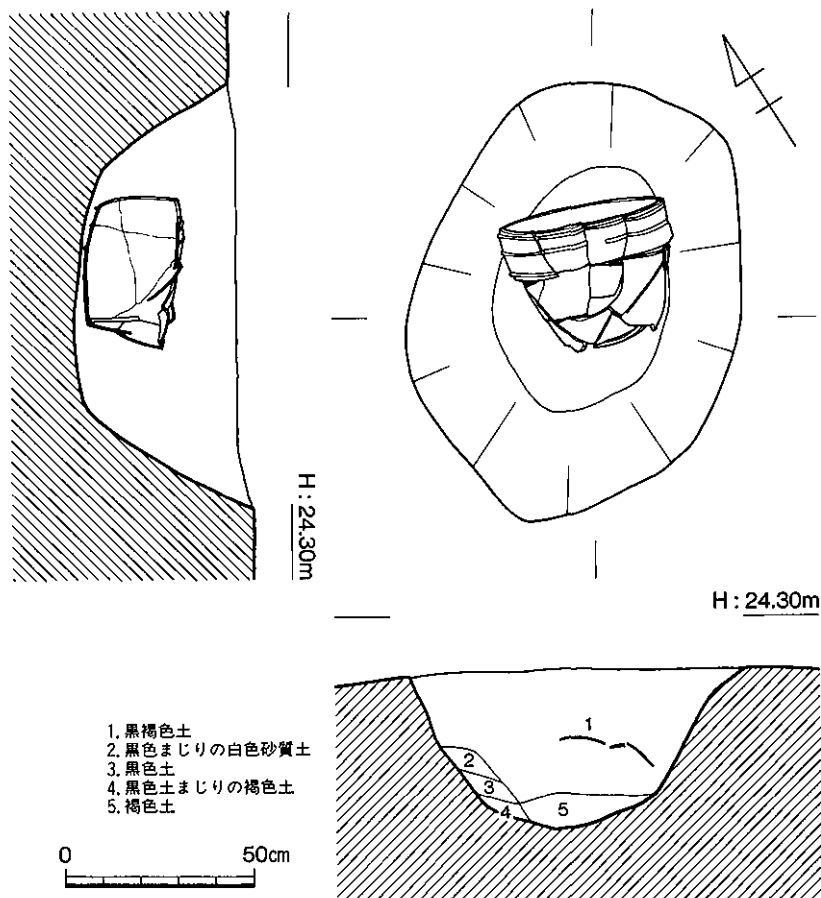
調査区の東側に位置する。墓坑は長さ1.19×幅0.85mの不整楕円形プランを呈し、深さ43cm。墓坑内には火鉢が横倒しになった状態で検出され、口縁部を略北側へ向けている。

瓦質土器

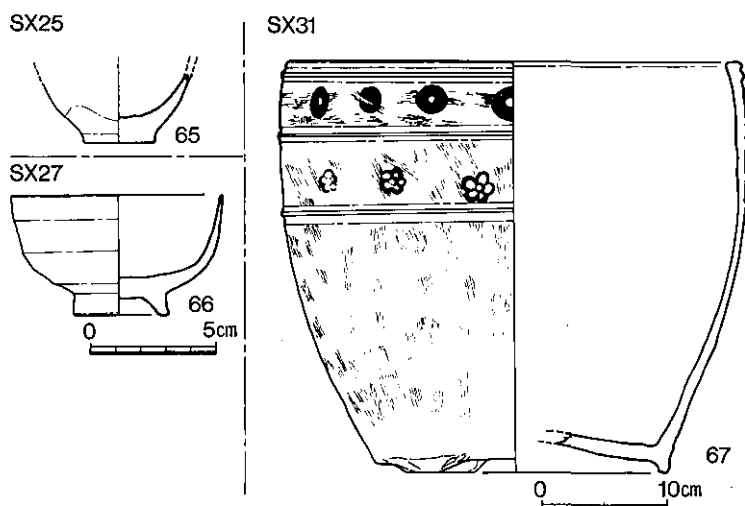
火鉢(67) 体部中位よりやや上に最大径をとり、口縁部はやや内湾気味に立ち上がる。色調は黒褐色を呈し、口径36.3cm、器高33.0cm。体部上半に低いカマボコ形の突帯を巡らし、突帯間は上の段に菊花文、下の段に梅花文のスタンプを千鳥状に施す。底部中央には欠失部が見られ、口縁端部



第18図 1次H区SX25~29実測図 (1/30)



第19図 1次H区SX31実測図 (1/20)



第20図 1次H区出土遺物実測図 (67は1/6、その他1/2)

り下げをおこない、一部改葬を受けたと考えた墓坑も掘り下げた。

調査の結果、墓は115基検出されたが、調査の都合上掘り上げたものは24基だけであり、また時間的制約から縮尺1/20で実測できたものは3基しかない。このため実測分以外の墓坑の規模などは不明であり、不十分な調査結果となってしまった。したがって、H区検出の墓は、遺物が出土したものののみを取り上げて報告したい。墓からは、陶磁器・銅銭などがパンケース半箱ほど出土した。

は滑らかで長期間使用された後、墓に転用されたものと考えられる。

vi) I区 (第21図、図版5)

地表下50cmで円形・長方形プランの墓とピットを検出した。表土剥ぎの途中、明治22年と刻まれた墓石や近代の墓の花立てや線香立てなどが出土した。地元の方々に聞くと、調査区周辺はやや小高い丘になっていたという。この丘は墓地として利用されていたが、昭和30年代に改葬をおこなったとのことである。検出

された墓坑内の埋土は褐色土に白色砂質土が混じり、土もしまりがなく上にのると軟らかい状態であった。一方、墓坑埋土が黒色土のみで白色砂質土が混じらないものがあり、遺構検出の時点では前者を改葬を受けたもの、後者を改葬を免れたものと判断した。調査の都合上、墓を全掘することはできなかったため、まず改葬を受けていないと思われた黒色埋土の墓坑から掘



第21図 1次調査Ⅰ区遺構配置図(1/200)

土師器

小皿(72) 底部糸切り。口径7.2cm、器高0.95cm。口縁端部には煤が付着する。

銅銭(87) 全体に緑青がふき、6枚が錆着した状態で出土したが、1枚は剥落しバラバラになってしまった。実測後剥がして銭種の特定制を行ったが、バラバラになった1枚が寛永通宝であること以外はまったく分からなかった。

1号墓(第23図、図版11)

磁器碗が出土した。

磁器

碗(68) 肥前系。19世紀前半。体部に文字が描かれるが、内容は不明。

2号墓(第23図、図版11)

磁器紅皿・須恵器片が出土した。

磁器

紅皿(69) 口径4.6cm、器高1.45cm、底径1.8cm。白色の釉は内面のみかかる。19世紀?

4号墓(第23図、図版11)

磁器碗・皿が出土した。

磁器

碗(70) 広東型の碗である。肥前系、18世紀末~19世紀初頭。

皿(71) 蛇ノ目凹形高台。口径13.2cm、器高3.4cm、底径8.8cm。体部内面に半菊を格子目とともに描き、見込みに花と唐草を描く。肥前波佐見系の可能性がある。18世紀後半。

5号墓(第23・24図、図版12)

土師器小皿・銅銭が出土した。

6号墓 (第22図)

調査区の西側に位置する。墓坑は径0.86～1.00mのやや楕円形気味のプランを呈し、深さは86cm、墓坑内には棺の痕跡はなかった。遺物は出土しなかった。

7号墓 (第22・23図、図版12)

調査区の西側、6号墓の北側約1.3mの所に位置する。墓坑は、径1.04mの円形プランを呈し、攪乱により上部を削平されるが検出面からの深さは1.30m、墓坑内に棺の痕跡はなかった。不明鉄器が出土した。

鉄器

不明鉄製品 (73～75) 73は径2～3mmの細い針金状のものを折り曲げているが、先端は平らにつぶされている。74・75は径3mm、73とは別個体。

9号墓 (第22～24図、図版12)

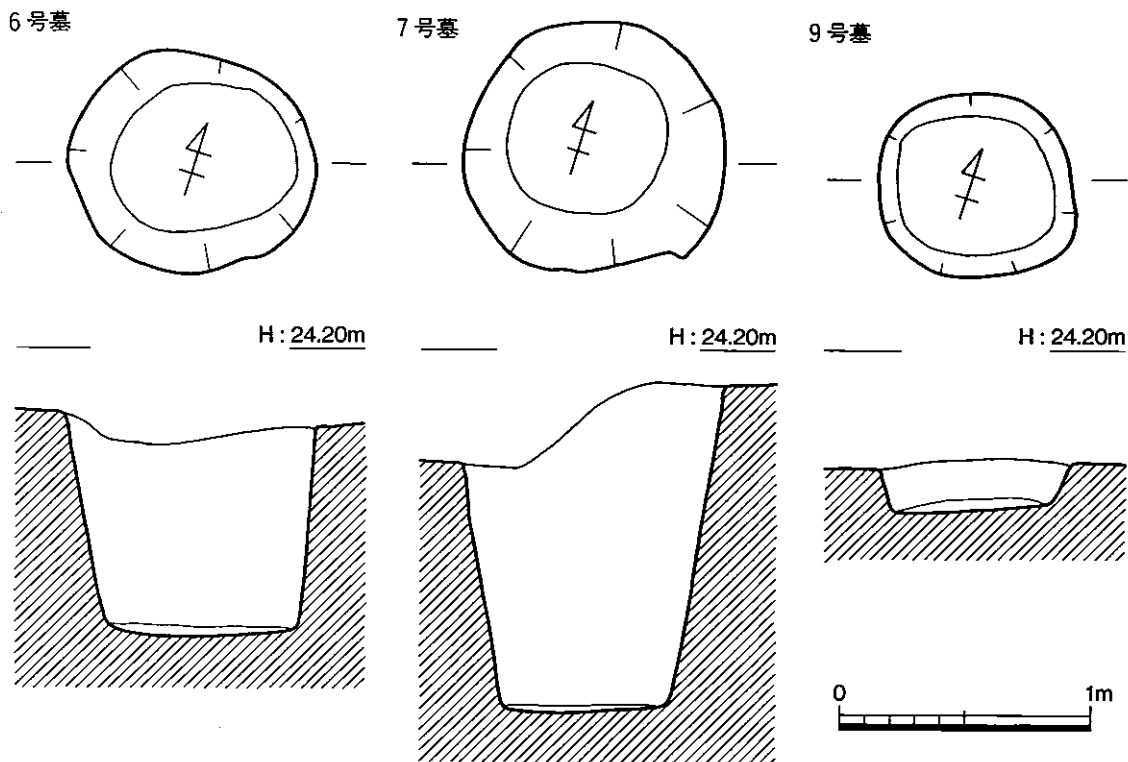
調査区の西側、6号墓の北西側0.7mの所に位置する。墓坑は径0.76mのやや方形に近いプランをとる。深さは20cmと浅い。墓坑内に棺の痕跡はなかった。鉄釘・銅銭が出土した。

銅銭 (88～93) 6枚重ねた状態で出土した。実測後剥がして銭種の特定制と拓本をとったが、1枚は鉄銭で錆が著しく、拓本をとれなかった。89・90は寛永通宝 (特定制不能)、91は新寛永銭、92・93は判読できなかった。

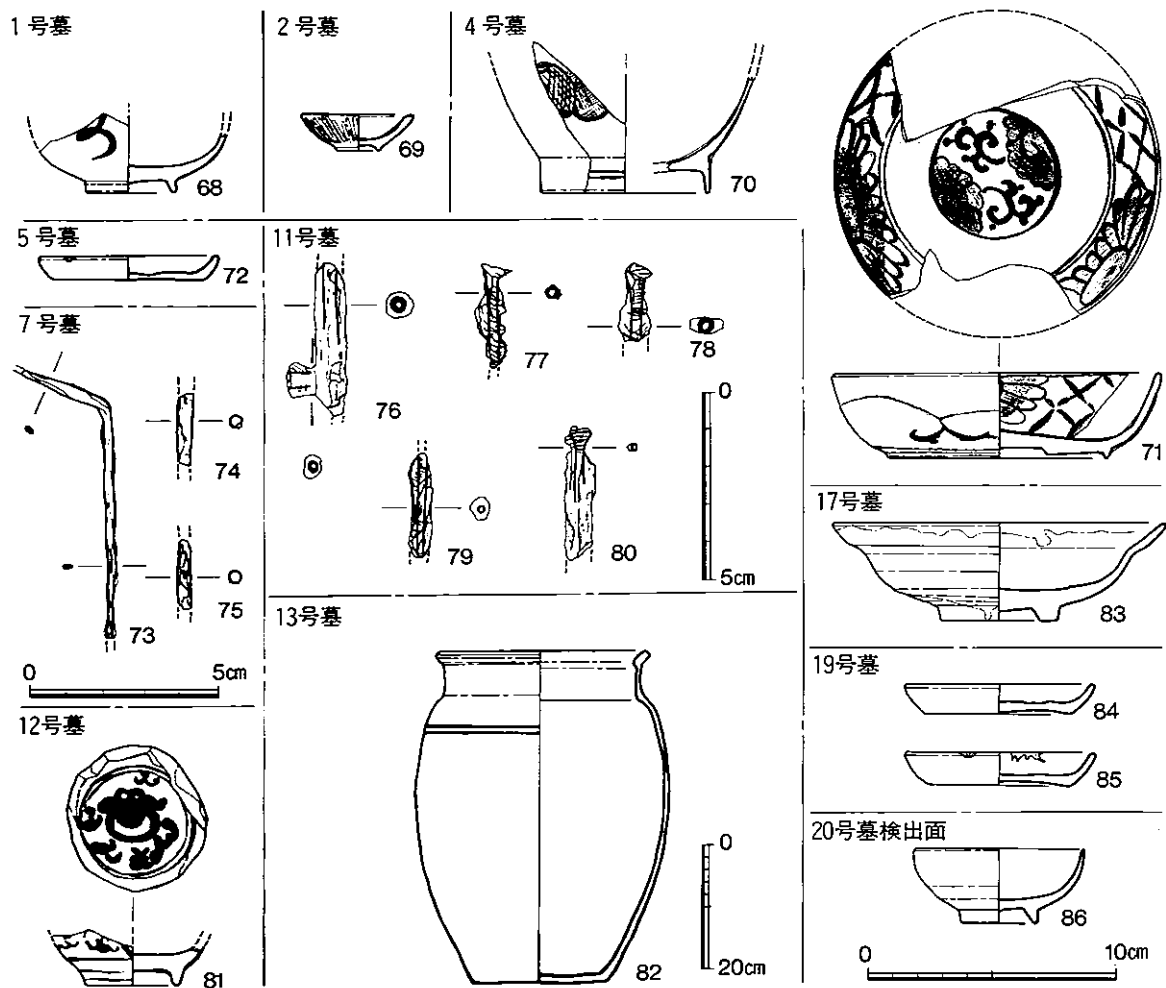
11号墓 (第23図、図版12)

鉄釘が出土した。

鉄器



第22図 1次I区墓実測図 (1/30)



第23図 1次Ⅰ区出土遺物実測図 (74～80は1/2、82は1/12、他は1/3)

釘 (76～80) 棺をとめたもので、76・80には木質が残存している。錆が著しく、全形を明らかにできない。

12号墓 (第23図、図版12)

磁器碗が出土した。

磁器

碗 (81) 体部上半を失う。底径3.8cm。見込みに唐草文が描かれる。肥前系、19世紀代。

13号墓 (第23図、図版12)

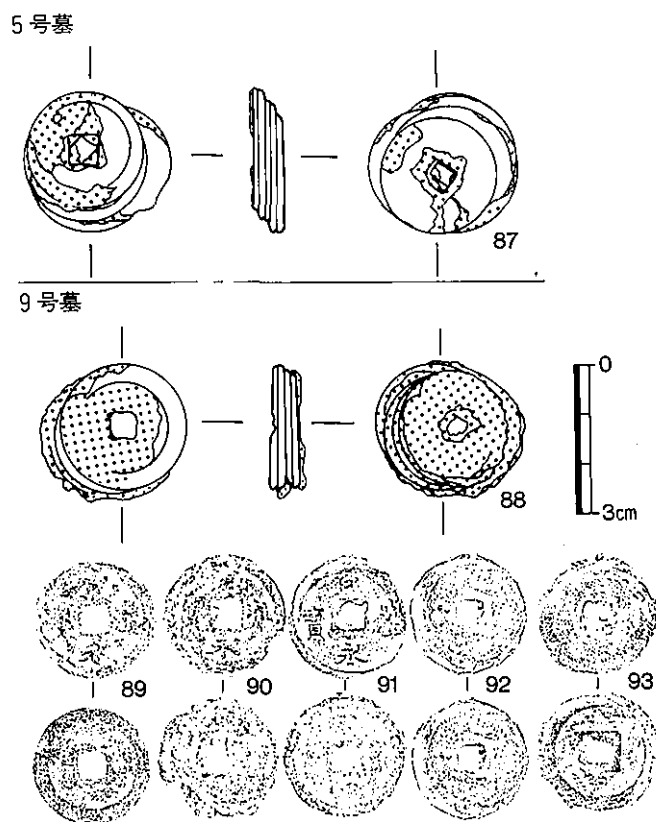
出土遺物 陶器甕が出土した。

陶器

甕 (82) 表土剥ぎの際、口縁～体部上半を失ったが、復元口径34.3cm、器高53.2cm、底径22.0cmの中型の甕である。頸部は直立し、口縁部外面は外方へ折れ、内面は玉縁状を呈する。肩部に2条沈線が巡らされる。胎土は赤褐色を呈し、くすんだ褐色の釉をかける。口縁部は釉を拭き取っており、目跡が残る。

17号墓 (第23図、図版12)

陶器皿が出土した。



第24図 1次I区出土銅銭実測図・拓影(2/3)

陶器

皿(83) 口径13.4cm、器高3.9cm、底径4.8cm。灰白色の胎土に、黄褐色の釉をかける。高台は露胎。内面蛇ノ目釉剥ぎ。肥前内ノ山窯系、17世紀末～18世紀前半。

19号墓(第23図、図版12)

土師器小皿が出土した。

土師器

小皿(84・85) 口径7.6cm、器高1.2～1.35cm。85は内面に煤が付着する。

20号墓(第23図、図版12)

陶器碗が出土した。

陶器

碗(86) 復元口径6.8cm、器高3.0cm、底径3.2cm。赤褐色の胎土にうぐいす色の釉がかけられるが、内外面の一部のみである。

(3) 小結

第1次調査地はA～C・G～I区の計6ヵ所で調査を行い、一番南側のA区から北側のI区まで約200m離れている。各調査区で検出された遺構の内容をみると、それぞれ異なった性格の遺構が検出されている。各調査区の調査成果について、以下にまとめる。

A区

検出された遺構のうち、ピットは非常に散漫で建物を構成するとは考えられない。また、隣接するB区で多量に出土した近世陶磁器の出土はなかった。さらに、試掘調査ではA区の南側を走る道路より南で遺構は検出されていない。このことから、A区は遺跡の中心から外れた端の部分にあたると考えられる。

B区

土坑が連続して掘られており、中からは陶磁器・鉄器が出土した。時期的に見ると、一部17世紀前半で、他は18・19世紀代のものが中心となる。陶磁器の組成を見ると、碗・皿・甕・釜・花瓶・灯明皿などがあり、釜などは実際使用されたもので煤が付いている。これらのことから、B区で検出された土坑は使用後破損したものを廃棄するための穴で、周辺に住居等の生活遺構の存在を伺わせる。また、この土坑群が切り合いながら集中することは、これらのゴミ穴を掘る場所は決まっていたことを伺わせる。

C区

隣接するB区とは全く異なり、ピットと溝しか検出されていない。このピットは建物を構成する

と考えているが、調査区が狭く規模・構成は判然としない。また、ピット内からの出土遺物で時期の判明するものではなく、即断はできないが、隣接するB区との土地利用の違いから、ここに17世紀以降の住居（集落）があったと考えたい。また、C区からは多くの弥生土器が出土しており、SD 04はこの時期として捉えることができ、周辺にこの時期の遺構が広がっていると考えられる。

G区

溝と土坑が検出された。このうち調査区北側で検出されたSX23は土坑内より多量の炭や煤のついた仏飯器が出土したことから墓（あるいは火葬墓か？）である可能性がある。また、SX23から北側の調査区において建物を構成するようなピットやゴミ穴としての土坑は検出されていない。したがって、主に第1次調査H・I区で主に見られる墓域とB・C区で見られるような集落域との境界付近にあたるものと考えられる。

H区

調査区の北半部で墓が集中して検出された。遺物の出土が少なく、時期的に明らかにできる部分は少ない。SX31から出土した火鉢は16世紀後半ごろのもので、火鉢として使用後、転用されたものである。したがって16世紀後半以降のものであろう。SX27は箱棺であろう。本調査区は遺構の配置状況から見て、I区を含めた墓地の南端部にあたり、墓域の南側の境界は本調査区内にある。

I区

115基の墓が検出された。墓域の中心に当たると考えられる。その範囲は調査区の北側では墓は検出されないことから、墓地の北側の境はI区の中にあると考えられる。墓内には大甕を用いるものと、棺の跡も検出されないものがあるが、後者はおそらく早桶を使用したと考えられる。時期的には、表土剥ぎの途中に明治年間の墓石の出土があったことと、遺物の出土した墓のうち時期の判明するものでは17世紀後半～19世紀初頭のものが含まれることから、17世紀後半から少なくとも明治時代までは墓地として利用されたことが分かる。しかし、本調査地の墓地はほとんどが改葬を受けしており、それぞれの墓から出土した遺物が確実にその墓の年代を示すとは限らない。したがって、個々の墓の位置づけについては不確実な部分がある。

2. 第2次調査

(1) 調査に至る経緯

第2次調査地は、大野城市白木原1丁目290-6、7に所在する。当地は市有地であり、都市計画道路大野城駅前線の代替地として用意された土地であった。平成6年9月に試掘調査を実施したところ予定地の南半部に遺構が検出され、10月に都市計画課から発掘調査の依頼を受けた。発掘調査は平成6年10月24日から31日の間実施した。調査地は、遺構の検出された南半部について実施した。開発対象面積496.1㎡のうち、発掘調査面積は175.5㎡である。発掘調査は舟山良一が担当した。

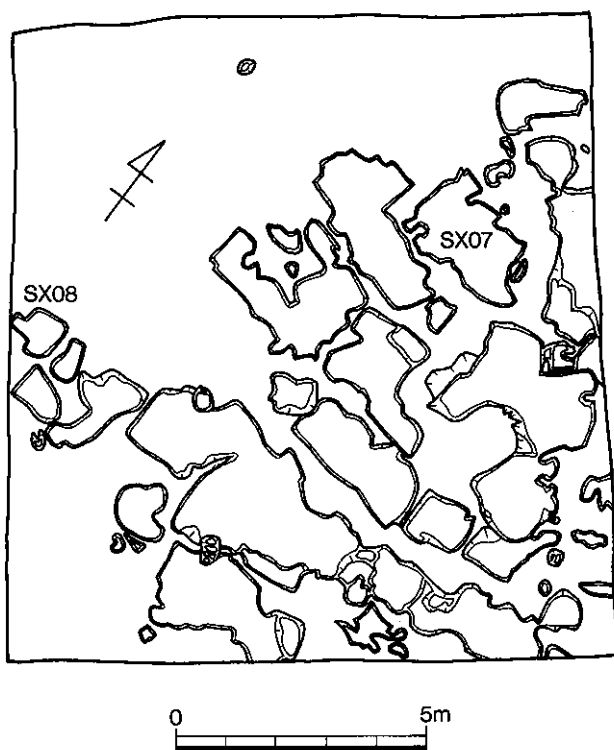
(2) 調査の結果 (A. 調査概要、B. 遺構と遺物)

A. 調査概要 (第25図・図版13)

前述のように、発掘調査は開発対象地の南半部について実施した。調査区内からは不整形の土坑とピットが検出され、不整形の土坑は調査区の南東部に集中し、深さは2～12cm程である。各土坑・ピットからは弥生土器・須恵器・土師器・瓦・青磁・石鏃がビニール袋で10袋分出土したが、いずれも少量・小片であり図化できるものは2点しかない。このため、検出された土坑やピットが遺構として捉えてよいか疑問である。

B. 遺構と遺物

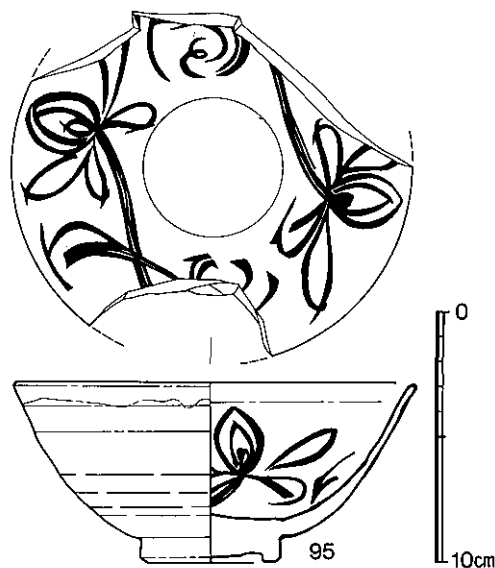
SX07 (第26図・図版13)



第25図 2次調査遺構配置図 (1/150)



第26図 2次SX07出土
遺物実測図 (1/2)



第27図 2次SX08出土遺物実測図 (1/3)

調査区の北東側に位置する。長さ約2.3m×幅約1.5mの略長方形プランを呈し、深さは4～5cmと浅い。黒曜石製石鏃が出土した。

石器

石鏃 (94) 黒曜石製である。長さ1.8cm、幅1.3cm、重さ0.65g。

S X 08 (第27図・図版13)

調査区西側に位置し、約0.8mほどの略方形プランを呈する。深さは2cmと浅い。土坑内からは、青磁碗が正置された状態で出土した。

磁器

碗 (95) 龍泉窯系の青磁碗である。土坑内に置かれた状態で出土した。全体の2/3ほど残存しており、元々完形品ではなかったかと思われる。口径16.0cm、器高7.2cm、底径5.6cm。高台は断面四角で、緑色の釉を施し、体部内面に草花文を施すが内底見込みは無文である。I類にあたる。

(3) 小結

本調査地では土坑・ピットが検出されたが、遺構と断定できるかは疑問が残る。しかし、龍泉窯系青磁碗が出土しており、これは森田氏分類I-2類・III-1期(12世紀中葉から13世紀初頭)、山本氏分類D期(12C中～後半)にあたる。第1次調査において遺構は明らかでなかったが、龍泉窯系青磁碗の底部破片が出土している。このことから、非常に散漫ではあるが周辺にこの時期の遺構が存在すると思われる。また、S X 08が墓である可能性もある。

また、本調査地では第1次調査B・C区で検出された近世の遺構や遺物は見つかっておらず、建物を構成するようなピットも検出されていない。このことから、本調査地は近世の集落の範囲外にあたると考えられる。

参考文献

森田 勉 「大宰府出土の輸入中国陶磁器について」『大宰府陶磁器研究』(1995)

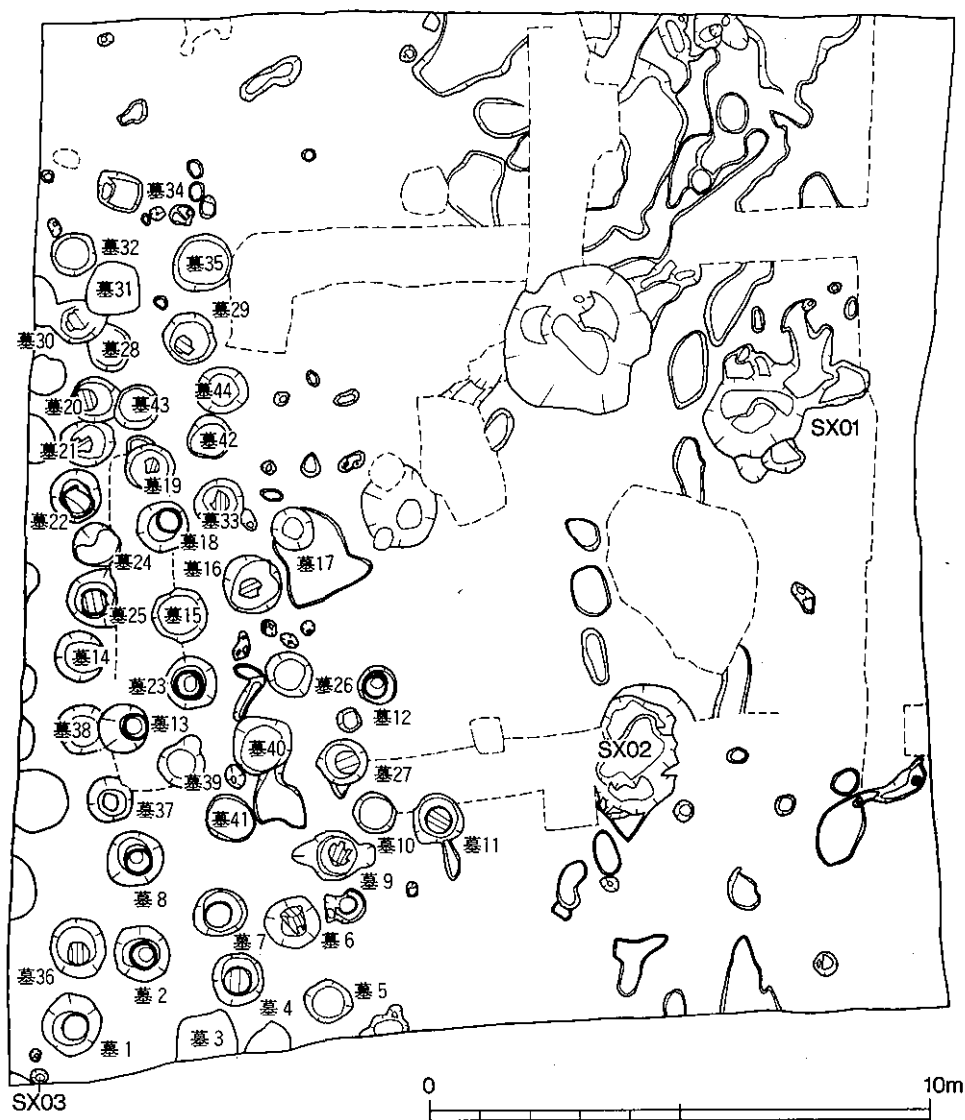
山本 信夫 「11-(2) 中世前期の貿易陶磁器」『概説 中世の土器・陶磁器』(1995)

3. 第3次調査

(1) 調査に至る経緯

第3次調査地は大野城市白木原1丁目234-8、9、235-3に所在する。当地の埋蔵文化財の有無について(有)エステート若久より照会があったのは平成6年10月であった。そこは、当時発掘調査中の第1次調査地に隣接し、遺跡の存在が予想されたため、平成7年3月に試掘調査を実施したところ、西半部で遺構を検出した。当地は高層の共同住宅の建設が予定されていたため、土地所有者である岡本甲奉氏・田村正信氏・田村久子氏の3氏と委託契約を締結し、発掘調査を実施した。発掘調査は平成7年4月3日から5月10日の間実施し、石木秀啓が担当した。また、調査は遺構の検出された西半部を行ったため、開発対象面積708.8㎡の内、発掘調査面積は437.89㎡である。

(2) 調査の結果 (A. 調査概要、B. 遺構と遺物)



第28図 3次調査遺構配置図 (1/150)

A. 調査概要 (第28図、図版14)

第3次調査は調査対象地の西半部をおこない、表土を一度に剥ぐことができなかったため南北に分けて打って返して調査した。調査地の層序は、盛土(20cm)→黒色土(70cm・I面)→地山(II面)となる。表土剥ぎではII面まで下げたが、調査区西壁を土層観察した結果、本調査地で検出された遺構の大部分を占める近世墓はI面から切り込まれていることが判明した。また近世墓以外の遺構はII面で検出された。以上より、調査地では2つの生活面が認められたが調査時の不手際によりII面からの調査となった。また近世墓は調査区内で54基検出したが、危険防止のため調査区の端にかかるものは掘り上げておらず、完掘したものは43基である。ほとんどが改葬を受けていた。

調査の結果、奈良時代の井戸・近世墓・ピットが検出された。遺物は土師器・須恵器・陶磁器・キセル・土人形がパンケース28箱分出土した。

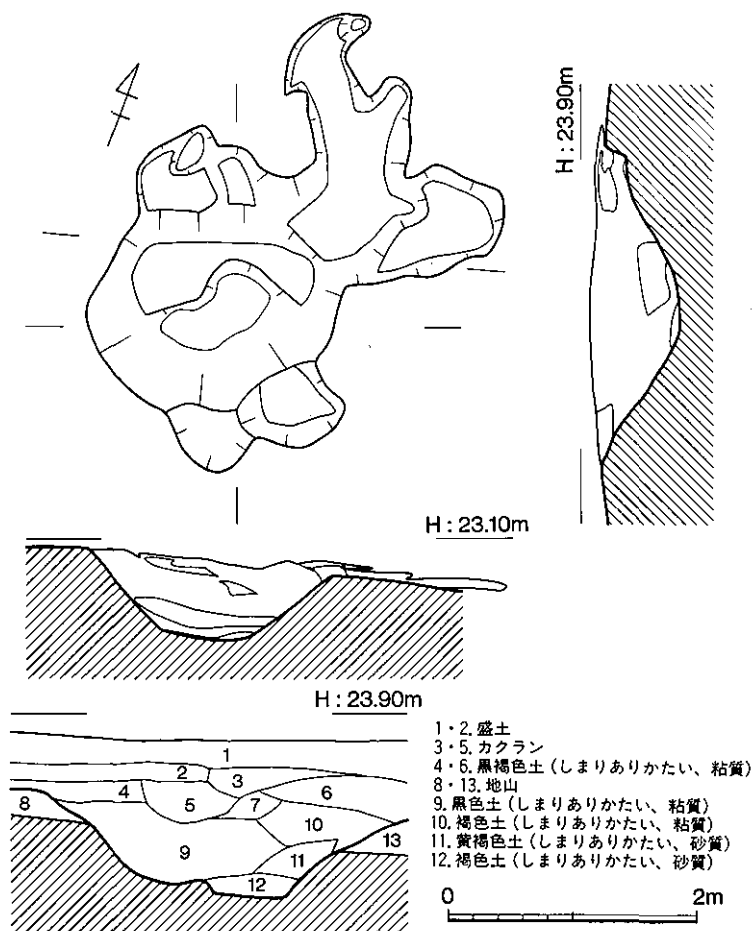
B. 遺構と遺物

調査地の遺構は奈良時代と近世に別れるため、これを分けて記述する。

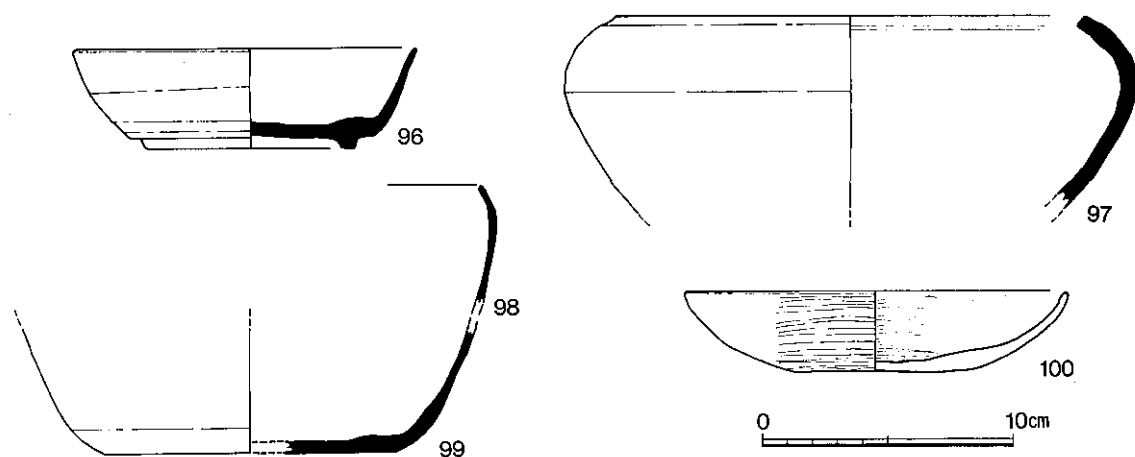
奈良時代の遺構

SX01 (第29・30図、図版15・20)

調査区の東側で検出された。周りに不整形プランの別の浅い土坑が連



第29図 3次SX01実測図(1/60)



第30図 3次SX01出土遺物実測図(1/3)

続し、本来の土坑プランは分かりにくいですが、径1.85～2.0mの不整円形プランを呈すると考えられ、深さは65cmである。埋土は粘性にとむことから、この土坑が井戸である可能性もある。土坑底面からは土師器杯・須恵器杯身・鉢が重ねられた状態で出土した。

須恵器

杯身(96) 完形品。口径14.2cm、器高4.0cm。底部外面に墨書が残るが、字がにじみ判読不能。

鉢(97～99) 97は口縁部から体部上半の破片。口径は復元値で18.6cm。98・99は接合しないが同一個体と思われる。底径11.6cm、器高10.5cmに復元できる。

土師器

杯(100) 完形品。口径15.2cm、底径6.8cm、器高3.2cm。底部へう切り、内外面に粗雑な回転ミガキが施される。

近世の遺構

1号墓(第31・32図、図版20)

墓坑プランは径1.2mのほぼ円形を呈し、検出面からの深さは1.44m。墓坑内には早桶の底板と側板の一部が残存しており、底板の径は48cmである。土師器小皿が出土した。

土師器

小皿(101・102) いずれも糸切り。101は口径7.6cm、器高1.5cm。102は、体部が丸く口縁部は外反し、片口がつく。内面には褐色の釉が施され、片口部には煤が付着している。

2号墓(第31・32図、図版15・20)

墓坑プランは1.08～1.18mの不整円形を呈し、検出面からの深さは1.47m。墓坑内には陶器大甕が据えられていたが、改葬の際動かされている。銅銭・人骨が出土した。

陶器

大甕(103) 口径54.8～56.5cm、器高71.4～72.8cm、底径28.6～29.0cm。やや歪んだ甕である。頸部は長く、大きく外反している。口縁部外面は角張っており、端部には目跡が残る。肩部と胴部中位には太い沈線がそれぞれ3条施されるが、明瞭でない。灰褐色の胎土にくすんだ暗赤褐色の釉をかける。底部外面には「千」の墨書が認められる。

銅銭(133～135) 133は古寛永銭、134・135は新寛永銭。

3号墓(第28図)

調査区の南東端にかかり、調査区外へのびるため完掘できなかった。検出プランは、一辺1.0m程の方形を呈する。遺物は出土しなかった。

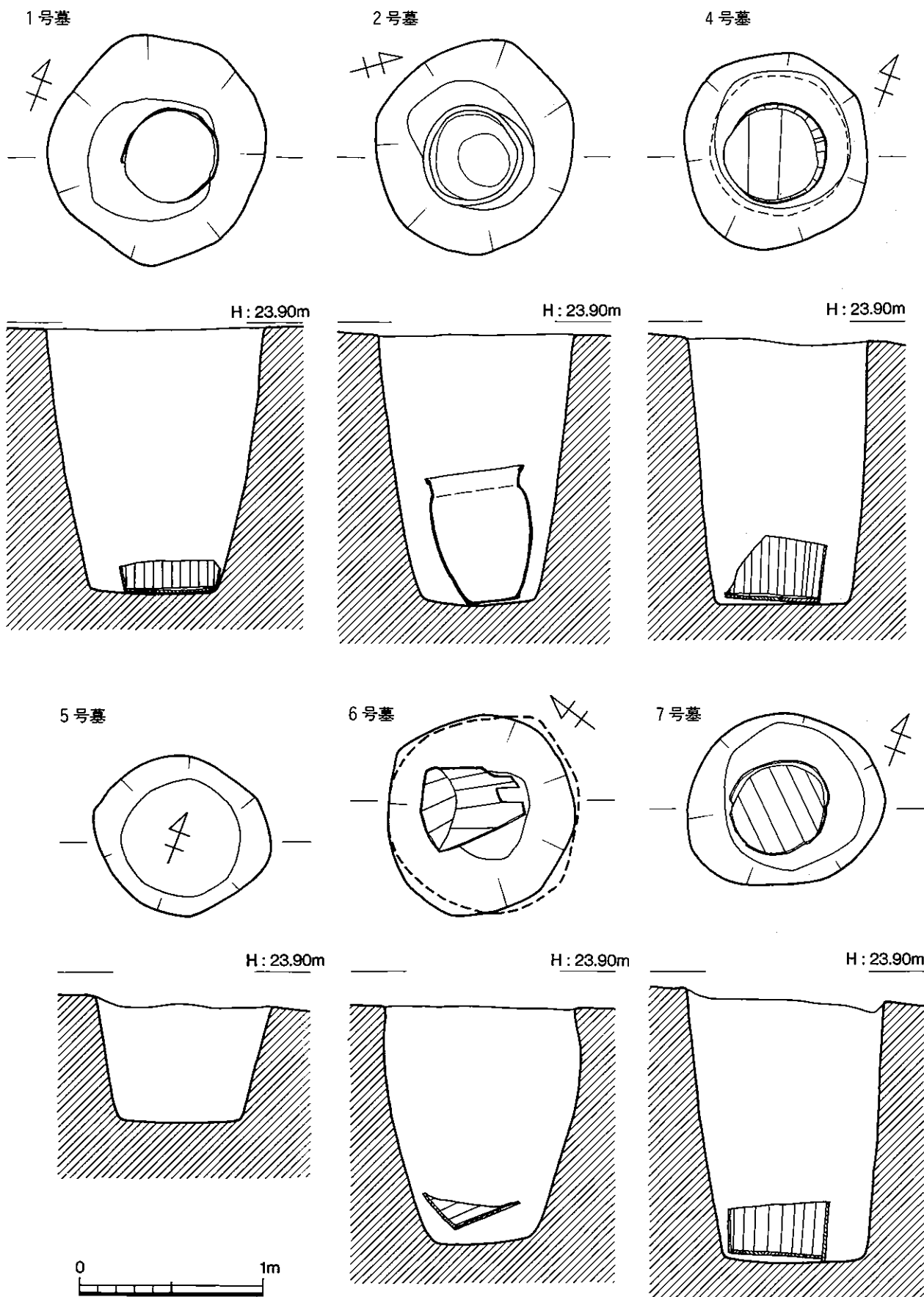
4号墓(第31・32・44図、図版16)

墓坑プランは0.98～1.08mのほぼ円形を呈し、検出面からの深さは1.44m。墓坑内には早桶の下部が残っており、底板は3枚の板を組み合わせ、板と板の間は竹釘でつなぐ。銅銭が出土した。

銅銭(136) 字形より新寛永銭と判断される。

5号墓(第31図)

近世墓群の東端に位置する。墓坑プランは0.84～0.98mのほぼ円形を呈し、検出面からの深さは0.66m。墓坑内に棺は存在しなかった。昭和時代の磁器が出土した。



第31图 3次1・2・4~7号墓実測図 (1/30)

6号墓 (第31・32図、図版16・20)

墓坑プランは約1.10mの円形を呈し、検出面からの深さは1.28m。墓坑内には早桶が転倒した状態で残存しており、底板は4枚の板を組み合わせている。墓石が2個、銅銭が1枚出土した。

墓石 (104・105) いずれも花崗岩の転石を使用する。106は高さ57cm、幅33cm、厚さ15cm。正面に「寛政五年 釈妙祐信女 丑七月十八日」と刻まれる。107は高さ44cm、幅30cm、厚さ20cm。正面に「文化二天 釈妙因信女 丑七月十四日」と刻まれる。

銅銭 (137) 一部欠けているが、字形より新寛永銭と判断される。

7号墓 (第31・32・44図、図版16・20)

墓坑プランは0.96~1.08mのやや楕円形を呈し、検出面からの深さは1.45m。墓坑内には早桶の下部が残存しており、底板は6枚の板を組み合わせている。土師器小皿と銅銭が出土した。

土師器

小皿 (106・107) いずれも糸切り。106は口径7.5cm、器高1.35cm。体部の丸みはなく、杯部は浅い。107は口径7.8cm、器高1.5cm。体部はやや丸く、杯部は深い。内外面に煤がつく。

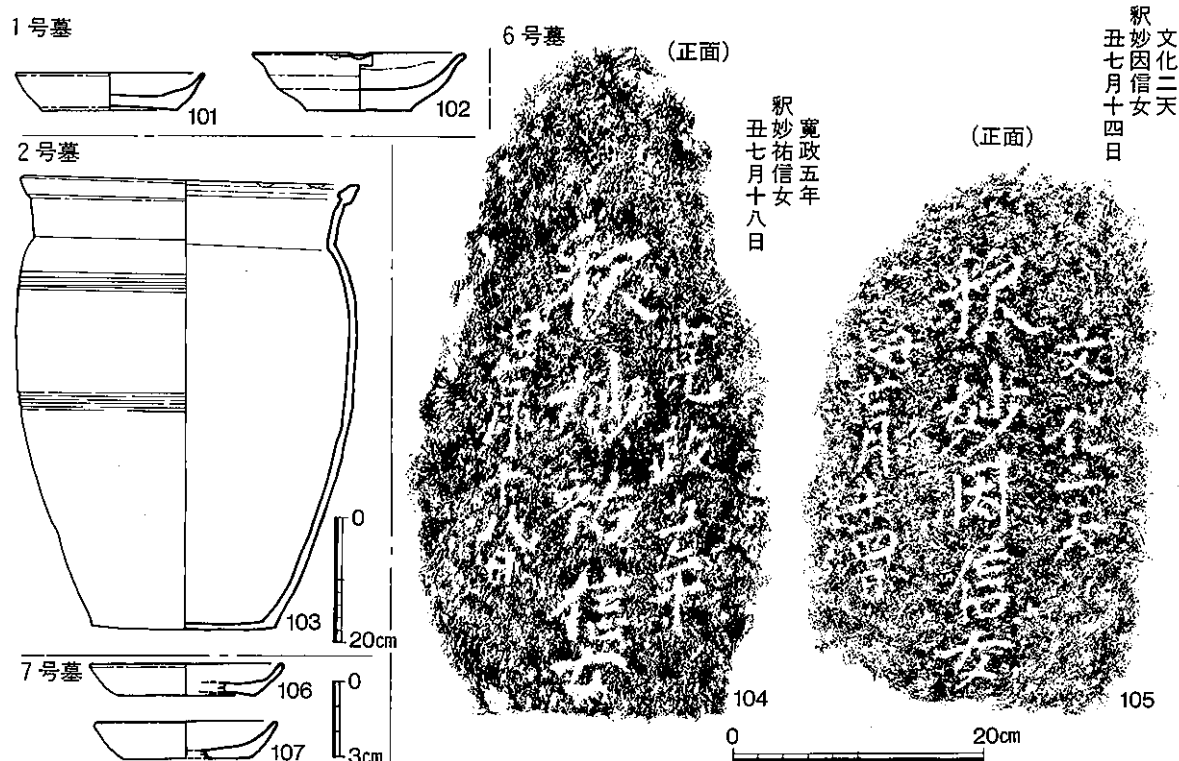
銅銭 (138~141) 138~140は字形より新寛永銭と判断される。141は寛永通宝であるが、遺存状態が悪く分類できない。

8号墓 (第33・34図、図版21)

墓坑プランは1.14~1.20mの不整円形を呈し、検出面からの深さは1.30m。墓坑内には大甕が残るが、改葬のためかやや傾いている。大甕と鉄器が出土した。

陶器

大甕 (108) 口径53.0~55.0cm、器高72.9~74.3cm、底径28.4cm。口縁部外面は角張っており、



第32図 3次1・2・6・7号墓出土遺物実測図・拓影 (104・105は1/6、103は1/12、その他1/3)

体部はあまり張らない。胴部の上位と中位には太く浅い沈線が3条ずつ施される。胎土はにぶい褐色を呈し、くすんだ灰褐色の釉をかける。口縁部には施釉時についた指の跡が残る。

鉄器

鉄棒 (109) 長さ31.3cm。断面は幅4.5mm、高さ6mmのU字型を呈する。

9号墓 (第33・34図、図版21)

墓坑の本来のプランは約1.0mの円形と推定される。検出面からの深さは1.03m、墓坑内には早桶が残存していたが、改葬のため動かされている。底板は5枚の板を組み合わせている。土師器小皿と土人形が出土した。

土師器

小皿 (110) 糸切り。復元口径7.8cm、器高1.5cm。杯部は深く、器壁は薄い。内面には灯明の芯の跡が明瞭に残る。

土製品

土人形 (111) 器高31.4cm。埋土上層から逆さまの状態出土した。前面と後面をそれぞれ型押しで成形し、両者を合わせて整形する中空の人形である。このため内面には指頭痕がおびただしい。意匠は左肩に宝箱を担いだ童子が亀の甲羅にのろうとしている所で、山村信榮氏のご教示によればこれは浦島太郎を表している。後面には浅い線で波が表現されている。

10号墓 (第33図)

墓坑の一部を試掘調査のトレンチにより切られる。墓坑プランは0.83~0.90mの円形を呈し、検出面からの深さは0.58m。墓坑内に棺材は残っていなかった。遺物は出土しなかった。

11号墓 (第33図、図版17)

墓群の東端に位置する。墓坑の半分を試掘調査のトレンチにより切られる。墓坑プランは1.04mの円形を呈し、検出面からの深さは0.92m。墓坑内には早桶の下部が残存しており、底板の径は48cm、4枚の板を組み合わせている。遺物は出土しなかった。

12号墓 (第33・36図、図版21)

墓群の東端に位置する。遺構検出時より、中に据えられた大甕の口縁部が露出していた。墓坑プランは約0.76mの円形を呈し、検出面からの深さは0.68m。

陶器

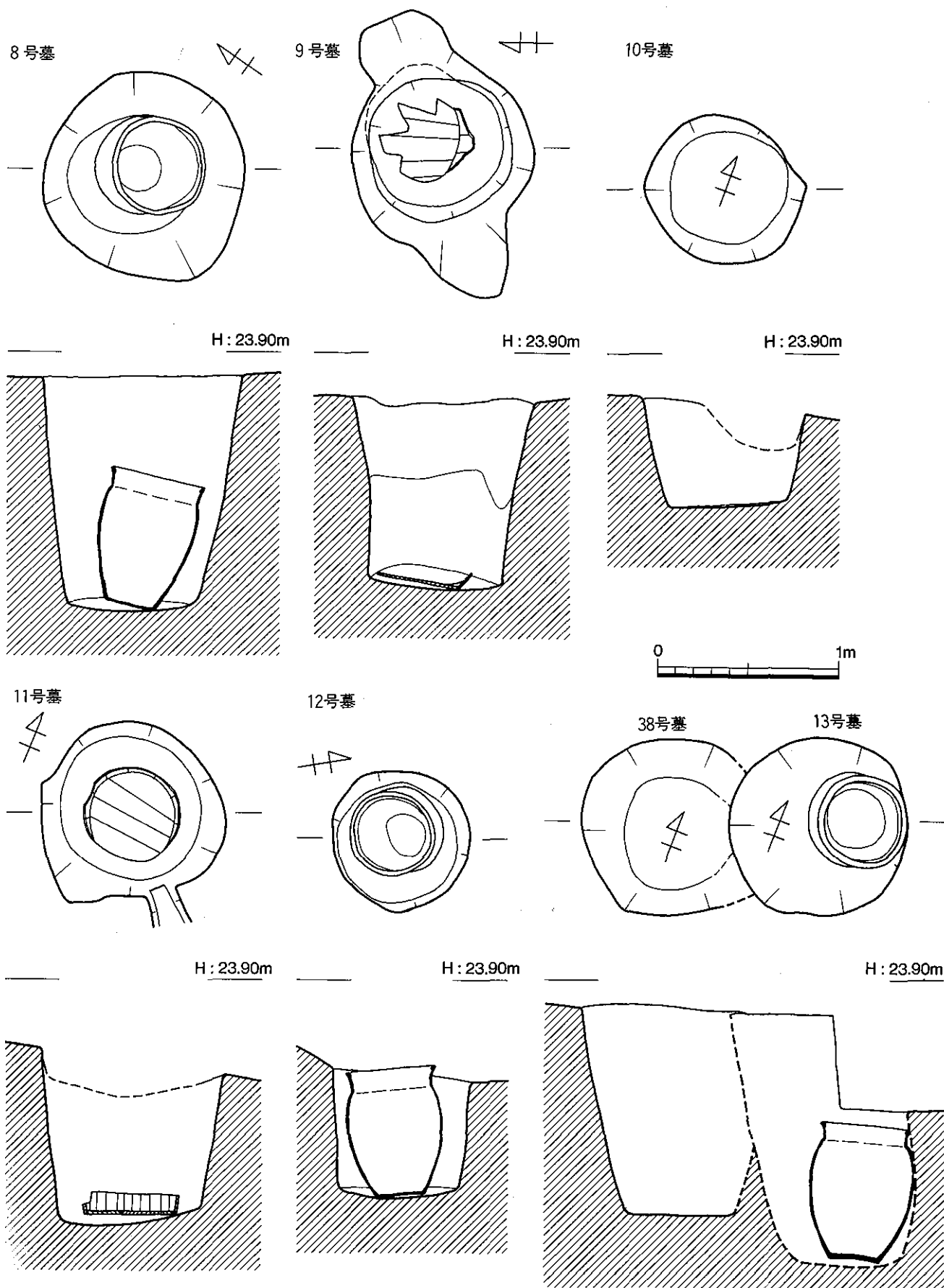
大甕 (112) 口径49.6cm、器高71.1cm、底径27.6cm。頸部は長く途中で段がつき、口縁部内面は玉縁状を呈し、端部は釉を拭き取っている。胴部はあまり丸みをもたない。肩部に2条、胴部中位下に3条沈線を施す。にぶい赤褐色の胎土に褐色の釉をかけ、さらに黄橙色の釉をかけており、胎土・釉は3次調査出土の他の大甕と異なっている。

13号墓 (第33図、図版17・21)

38号墓を切る。墓坑プランは0.98mの円形プランを呈し、検出面からの深さは1.35m。墓坑の東側に寄せるように、大甕が据えられていた。土師器小皿・墓石が出土した。

土師器

小皿 (113) 糸切り。復元口径6.8cm、器高1.4cm。体部は丸みを持ち、杯部は深い。口縁部には煤



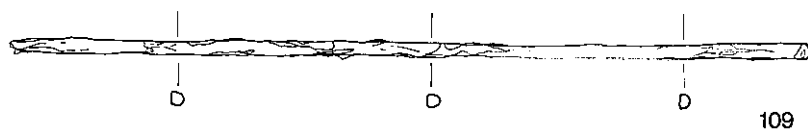
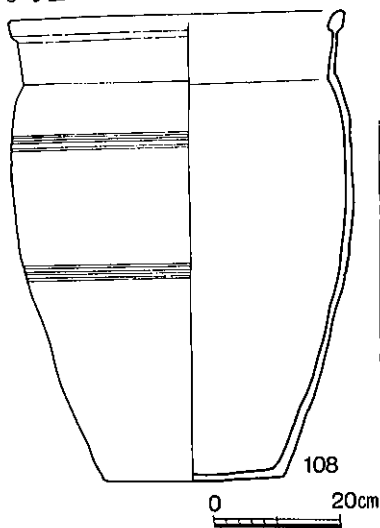
第33图 3次8~13・38号墓实测图 (1/30)

が付着する。

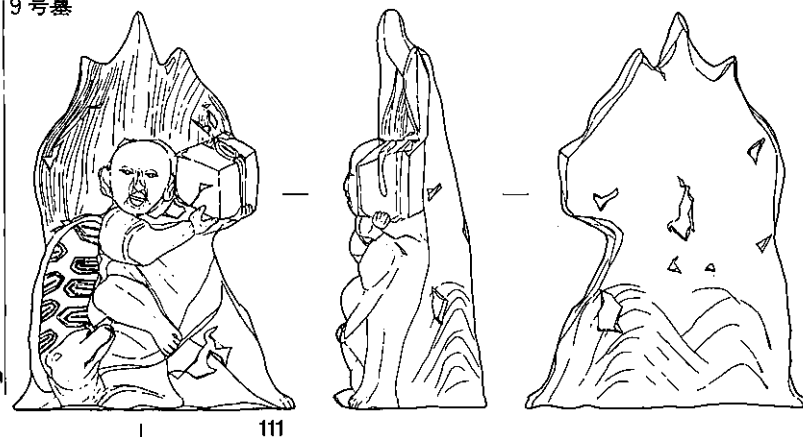
陶器

大甕 (114) 口径51.5~52.5cm、器高75.1~75.4cm、底径26.5cm。頸部は短く大きく外反し、口縁部内面は玉縁状を呈し、胴部の丸みがつよい。肩部・胴部中位・胴部下位に2・2・3条沈線が施される。赤褐色の胎土に光沢のある暗褐色の釉をかけ、口縁端部と頸部と胴部の境は釉を拭き取っている。口縁端部には目跡が残っており、底部には砂目が残る。

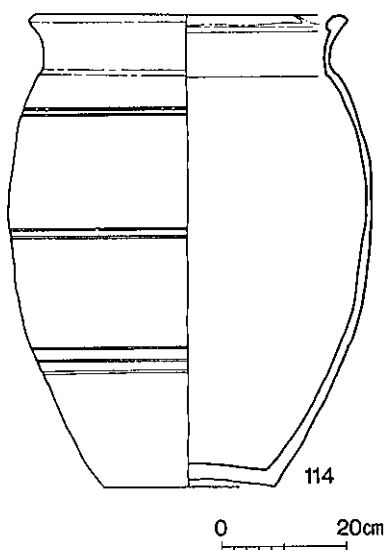
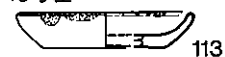
8号墓



9号墓



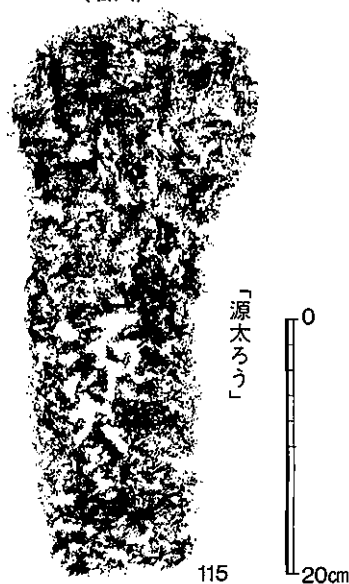
13号墓



(正面)



(右面)



安永二巳天
釈智了信土
一十月三日

「源太ろう」

第34図 3次8・9・13号墓出土遺物実測図・拓影 (111・115は1/6、108・114は1/12、その他1/3)

墓石 (115) 花崗岩の転石を高さ48cm、幅21cm、厚さ17cmの方柱状に加工しているが、基部の幅が狭く、単独では自立しない。正面に「安永二巳天 釈誓了信士 一 十月三日」、右面に「源太ろう」と刻まれる。

14号墓 (第35・36図・図版21)

墓坑プランは0.96～1.04mの円形を呈し、検出面からの深さは1.44m。墓坑内に棺材は残存しない。土師器小皿が出土した。

土師器

小皿 (116) 糸切り。口径7.6cm、器高1.35cm。体部はまっすぐひらく。口縁部には煤がつく。

15号墓 (第35図)

一部試掘調査のトレンチにより削平される。墓坑プランは1.08mの円形を呈し、検出面からの深さは1.37m。墓坑内に棺材は残存しない。遺物の出土はなかった。

16号墓 (第35図)

墓坑プランは1.15～1.23mの円形を呈し、検出面からの深さは0.98m。墓坑底面には早桶の底板が残存していた。底板の径は48cmである。遺物の出土はなかった。

17号墓 (第35・36図・図版22)

墓坑プランは0.83～0.86mの円形を呈し、検出面からの深さは0.75m。墓坑内に棺材は存在しない。磁器紅皿が出土した。

磁器

紅皿 (117) 高台は小さく、体部の丸みはつよい。白色の釉は体部内面と体部外面の一部におよぶ。18世紀後半、肥前系。

18号墓 (第35・36図、図版17・22)

墓坑プランは1.03～1.08mの円形を呈し、検出面からの深さは1.46m。墓坑内からは大甕が出土したが、改葬のため転倒していた。土師器杯・墓石が出土した。

土師器

杯 (118) 糸切り。復元口径11.8cm、器高2.0cm。底部は丸く、体部との境ははっきりしない。体部は丸く、口縁部には煤が付着している。

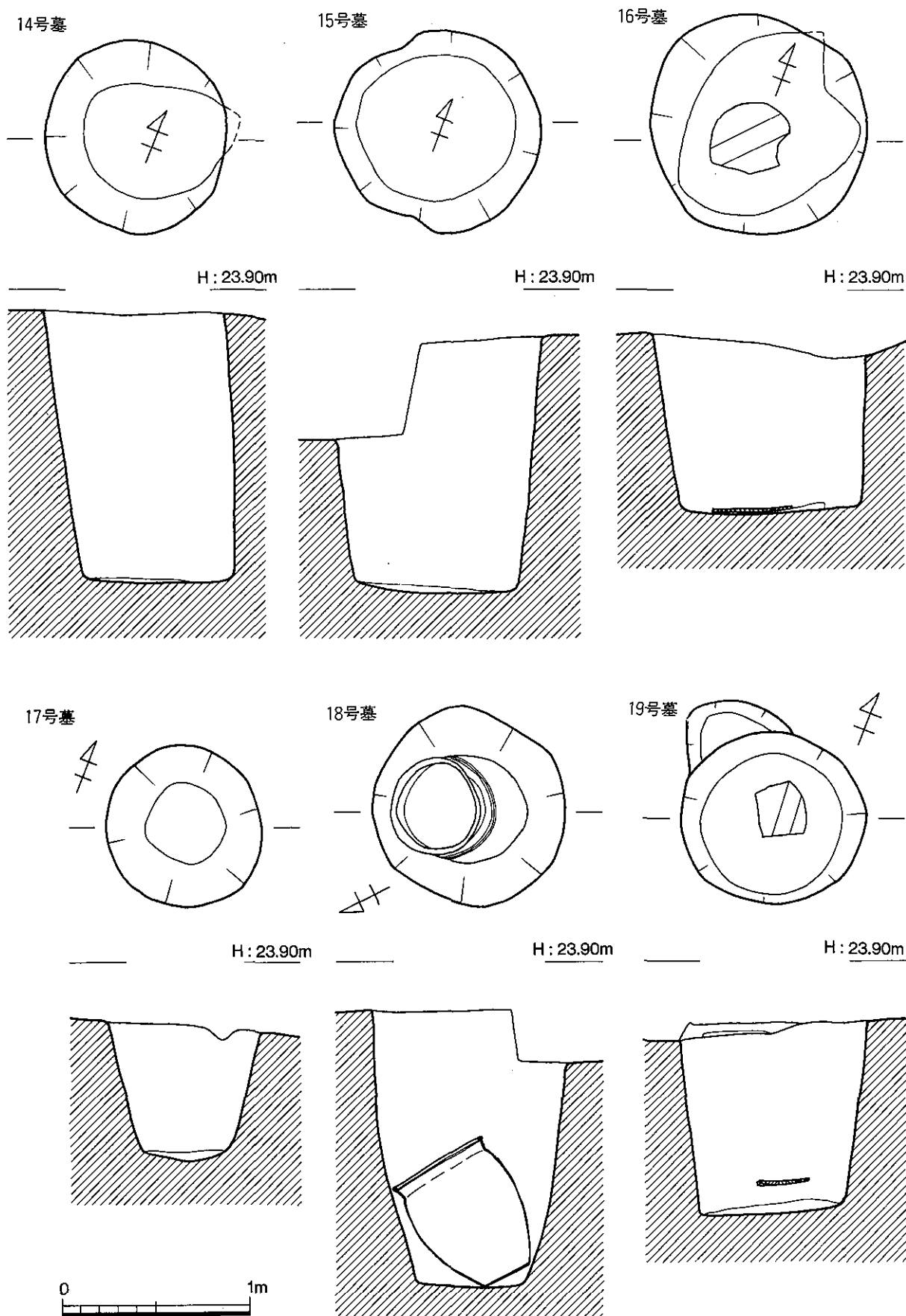
陶器

大甕 (119) 口径51.0～55.8cm、器高70.2～70.8cm、底径29.2cm。やや歪んでいる。頸部は短く、中位で段がつき、口縁部内面は玉縁状を呈し、胴部は丸みがつよい。肩部と胴部中位下にそれぞれ3条の沈線が施される。胎土は橙色を呈し、外面は暗褐色の釉をかけ、内面は褐灰色の釉をハケで螺旋状に施している。底部は露胎、口縁部には目跡が残る。

墓石 (120) 花崗岩の転石を利用する。高さ53cm、幅28cm、厚さ13cm。正面に「享和三年 釈妙林 信女 亥十一月十五日」と刻まれる。

19号墓 (第35図)

墓坑プランは0.92～0.99mの円形を呈し、検出面からの深さは0.98m。墓坑内には早桶の底板が残存していたが、墓坑底面より約15cm浮いた状態で検出された。遺物は出土しなかった。



第35图 3次14~19号墓実測図 (1/30)

20号墓（第38・44図）

検出時には確認できなかったが、掘り下げの結果21→20→43号墓の前後関係が確認できた。墓坑プランは円形を呈するが、正確な大きさは明らかにできない。墓坑底面には早桶の底板が残存しており、底板の径は47cmである。銅銭と昭和時代の磁器が出土した。

銅銭（142） 4枚重なった状態で出土した。うち3枚は鉄銭で、全体に錆に覆われ銭種の確認はできない。残る1枚も実測後銭種の判定をおこなったが、劣化が著しく判読できなかった。

21号墓（第38・44図）

20号墓に切られる。墓坑プランは1.05mの円形を呈し、検出面からの深さは0.98m。墓坑底面には早桶の底板が残存しており、底板の径は47cmである。銅銭が出土した。

銅銭（143） 紐を通して重なった状態で出土したが、1枚を除き他はすべて鉄銭のため全体が錆で覆われている。このため枚数は確認できない。また錆が著しく、銭種の判読はできない。

22号墓（第36・38・44図、図版18・22）

墓坑プランは0.99～1.06mの円形を呈し、検出面からの深さは1.08m。墓坑内には大甕が転倒し、上半部は割れた状態で検出された。墓石・銅銭・人骨が出土した。

陶器

大甕（121） 口径49.0～53.1cm、器高72.2～72.5cm、底径25.9cm。土圧により歪む。頸部はあまりのびず中位で段をもち、体部との境は明確でない。口縁部内面は玉縁状を呈する。体部内外面はタタキの後丁寧なナデ、底部内面は回転ナデを施し、外面に沈線は巡らされない。胎土は橙色を呈し、光沢のある褐色の釉を全体にかける。口縁部には目跡が残り、底部外面には砂目が残る。

墓石（122） 高さ42cm、幅22cm、厚さ13cmの楕円形状の花崗岩を使用する。正面に「享和三年 釋如露靈 寅七月二日」、裏面に「俗名 梅吉」と刻まれている。

銅銭（144・145） 両者はもともと重なって出土したもので6枚一組となり、うち4枚は銅銭、2枚は鉄銭である。銅銭の内1枚は寛永通宝であるが、他は錆のため判読できない。

23号墓（第36～38・44図・図版18・23）

墓坑の一部を試掘調査のトレンチにより切られる。墓坑プランは1.05mの円形を呈し、検出面からの深さは1.32m。墓坑内には大甕を据える。磁器・銅銭・キセル・木製品・人骨が出土した。

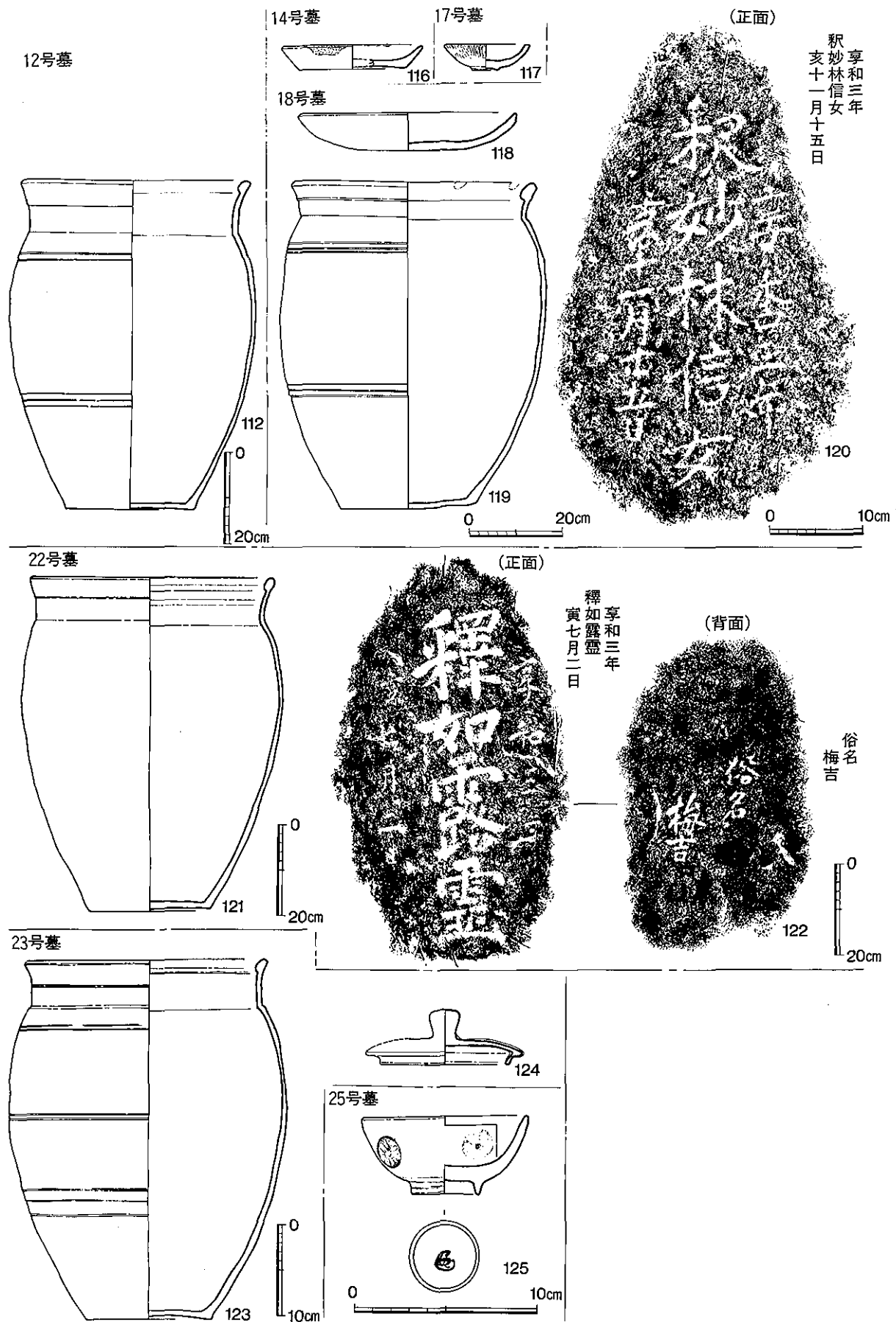
磁器

蓋（124） 光沢のある褐色釉をかける。「鑄込み」技法により作られる。大正時代。

陶器

大甕（123） 口径51.6～52.4cm、器高77.6～77.9cm、底径26.6cm。頸部はほぼ直立し、中位に1条沈線を巡らせる。口縁部はやや外反し、内面は玉縁状を呈する。肩部・体部中位・下位に2・2・3条の沈線が巡らされ、頸部と体部の境ははっきりしない。体部は丸みがあり、最大径を中位よりやや上にとる。橙色の胎土に光沢のある暗褐色の釉をかけ、口縁部釉拭き取り、底部中央は露胎となる。内外面とも丁寧にナデを施すが、底部内面には格子目の当て具痕が残る。

銅銭（146～152） 6枚一組で重なった状態で出土した。147は古寛永銭、148・149は文銭、150・151は新寛永銭、152は清銭「咸豊通宝」である。



第36図 3次12・14・17・20・22・23・25号墓出土遺物実測図・拓影
(120・122は1/6、112・119・121・123は1/12、その他1/3)

木製品

煙管 (126・127) 126は薄い鉄板を巻いた上から銅製の雁首を差し込んでいる。火皿は一部欠けている。127は吸い口。銅製か? 長さ7.1cm、径0.5~1.0cm。両者とも羅字が残存する。

不明木製品 (128・129) 128は径5.3cm、厚さ1.2cm、内面はくぼんでおり中央には径1.0cmの円孔がつく。129は高さ2.3cmの葺形を呈し、芯の中途に径5.5mmの円孔が穿たれる。出土状態では128の中心にある円孔に、129を内面から差し込んでおり、一対で何らかの機能を果たすものと考えられるが、用途は不明である。

24号墓 (第38図)

一部を試掘調査トレンチに切られる。墓坑プランは0.87m、検出面からの深さは1.05m。墓坑内に棺材は残存しなかった。遺物の出土はなかった。

25号墓 (第39図・図版23)

墓坑の一部を試掘トレンチに切られる。墓坑プランは1.16mのやや楕円形を呈し、検出面からの深さは1.33m。墓坑内には早桶の下部が残存していた。底板は4枚の板を組み合わせ、直径は46cm。磁器碗が完形で出土した。

磁器

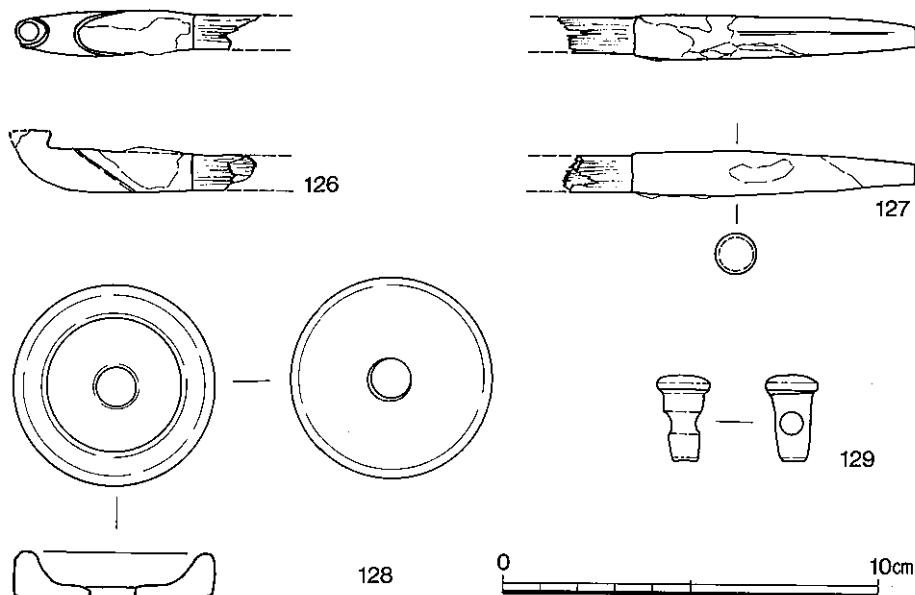
碗 (125) くらわんか碗である。口径9.0cm、器高4.2cm、底径5.6cm。体部外面にコンニャク印判により菊花を5つ施し、底部外面には「福」をくずした銘が認められる。18世紀中葉~後半、肥前波佐見系。

26号墓 (第39図)

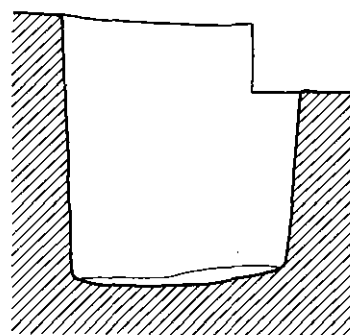
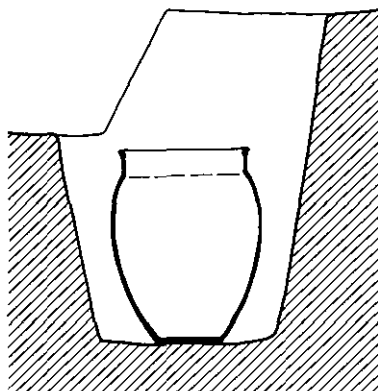
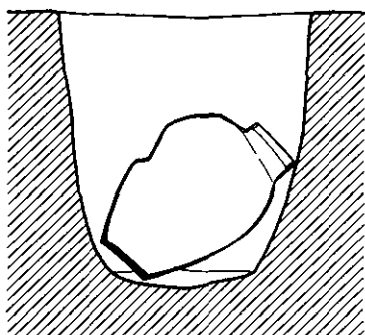
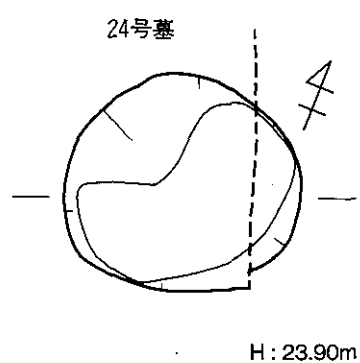
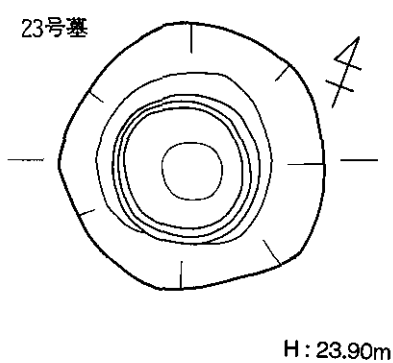
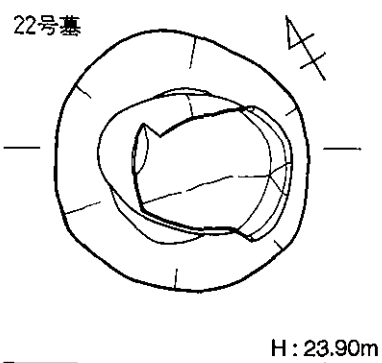
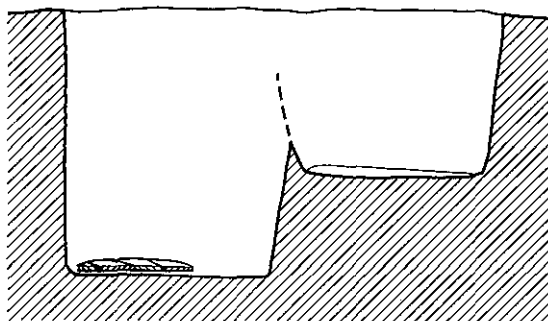
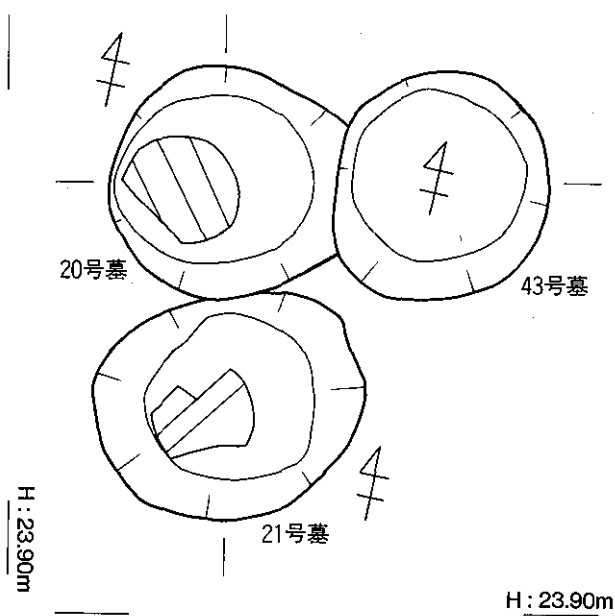
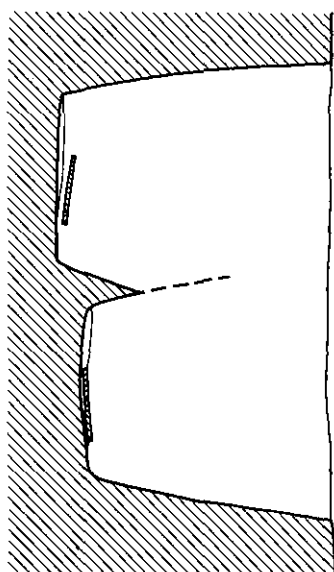
墓坑プランは0.88~0.96mの円形を呈し、検出面からの深さは0.87m。墓坑内に棺材は残存しなかった。遺物の出土はなかった。

27号墓 (第39図)

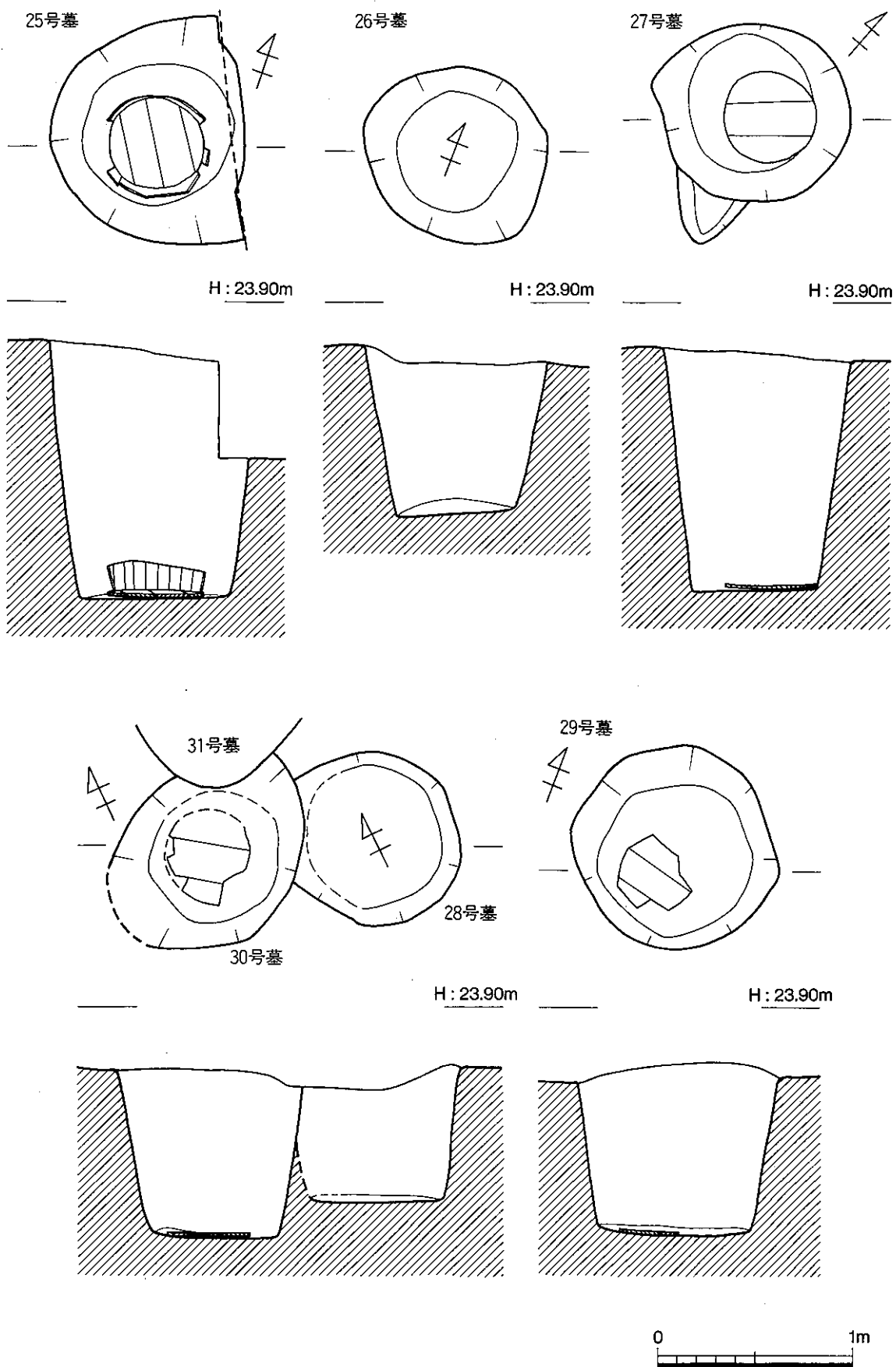
一部を試掘トレンチに切られる。墓坑プランは0.95mの円形を呈し、検出面からの深さは1.26m。墓坑底面には早桶底板が残存していた。底板は3枚の板を組み合わせ、径は48cmであった。遺物の出土はなかった。



第37図 3次23号墓出土遺物実測図 (1/2)



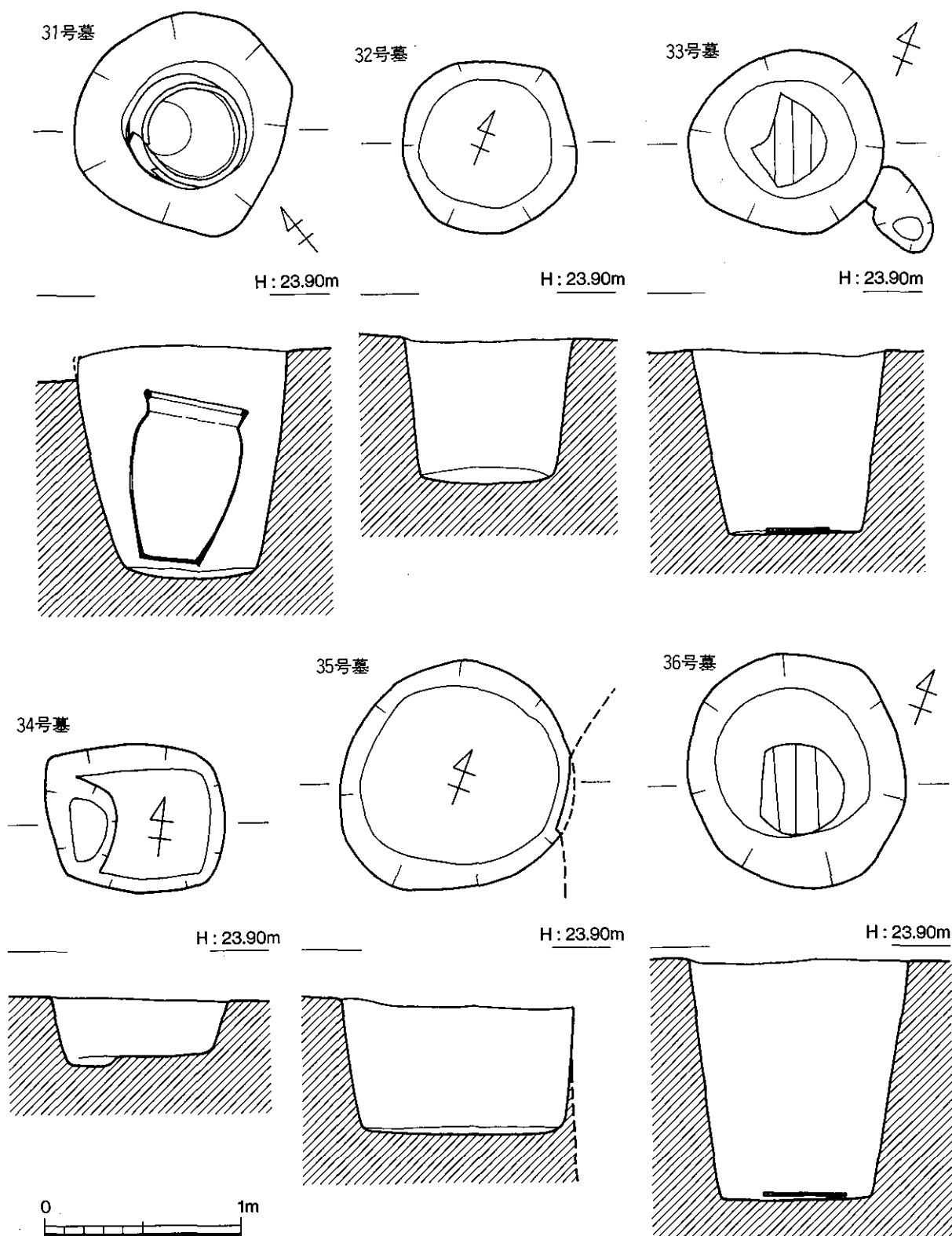
第38図 3次20~24・43号墓実測図 (1/30)



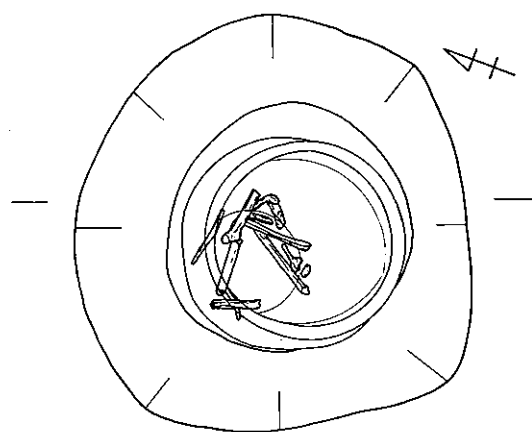
第39図 3次25~30号墓実測図 (1/30)

28号墓 (第39図)

30号墓に切られる。墓坑プランは0.84~0.89mの円形を呈し、検出面からの深さは0.68m。墓坑内に棺材は残存しなかった。遺物の出土はなかった。



第40図 3次31~36号墓実測図 (1/30)



29号墓 (第39図)

墓坑プランは0.99～1.08mのほぼ円形を呈し、検出面からの深さは0.88m。墓坑底面には早桶底板が残存していたが、半分壊れた状態であった。遺物の出土はなかった。

30号墓 (第39図)

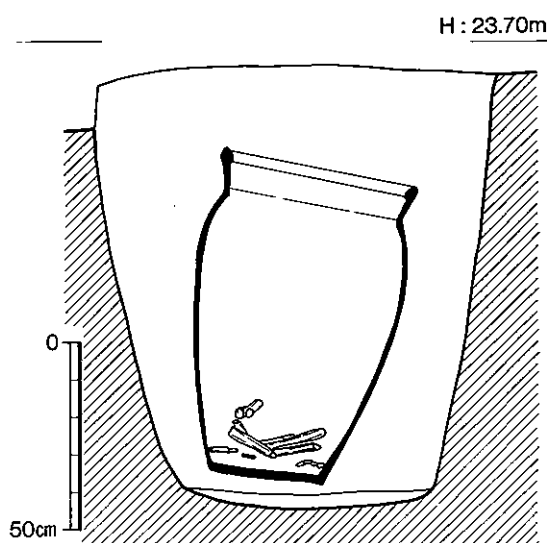
切り合い状態より28→30→31号墓の前後関係が考えられる。また調査区外へのびる墓とも切り合うが、前後関係は明らかにできなかった。墓坑プランは0.86～1.17mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.86m。墓坑底面には早桶の底板が残存し、一部は腐食し痕跡のみを止めていた。遺物の出土はなかった。

31号墓 (第40・41・44図、図版18・24)

30号墓を切る。墓坑プランは1.03～1.08mの円形を呈し、検出面からの深さは1.17m。墓坑内には大甕が残っていたが、改葬の際動かされ胴部も壊されていた。甕内には人骨が残存していたが、改葬を受けるため大半の骨は失われていた。

陶器

大甕 (130) 口径52.2cm、器高83.9cm、底径29cm。



第41図 3次31号墓人骨出土状況 (1/20)

本調査地内で出土した大甕の中で最も大きく、最大径を体部上位でとるためほっそりとしたプロポーションをとる。器高の割に頸部は短く、中位に2条沈線が巡らされる。口縁部内面は玉縁状を呈する。頸部と体部の境は明瞭でなく、肩部・体部中位・下位にはそれぞれ2・2・3条の沈線が巡らされる。胎土は赤色を呈し、くすんだ灰褐色の釉をかけた後、口縁部・頸部と体部の境の釉を拭き取っている。口縁部には目跡が残る。

銅銭 (153) 重なった状態で出土し、1枚が銅銭、5枚が鉄銭の6枚1組である。錆が全面に覆い、銭種の判読はできない。

32号墓 (第40・44図)

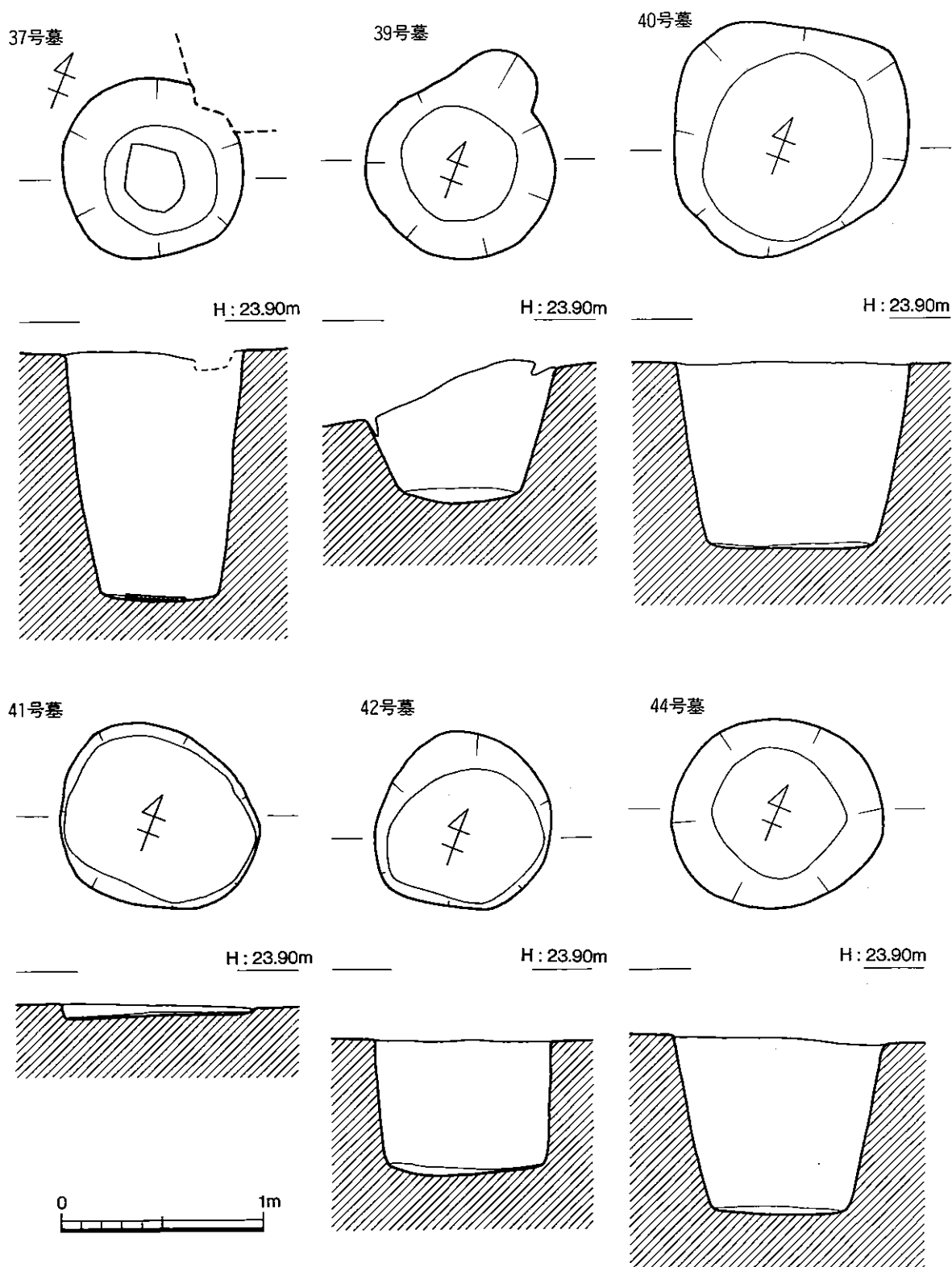
墓坑プランは0.87mの円形を呈し、検出面からの深さは0.75m。墓坑内に棺材は残存しなかった。銅銭が出土した。

銅銭 (154・155) すべて鉄銭。両者は出土時には重なっており、元々は一連のものである。全面に錆が覆い、154は3枚、155は2枚以上の銭が錆着している。銭種の判読はできない。

33号墓 (第40図、図版24)

墓坑プランは0.93～0.99mの楕円形を呈し、検出面からの深さは0.93m。墓坑底面には早桶の底板が残存し、底板の径は47cmであった。墓坑の埋土中からは、墓石が逆さまの状態出土した。

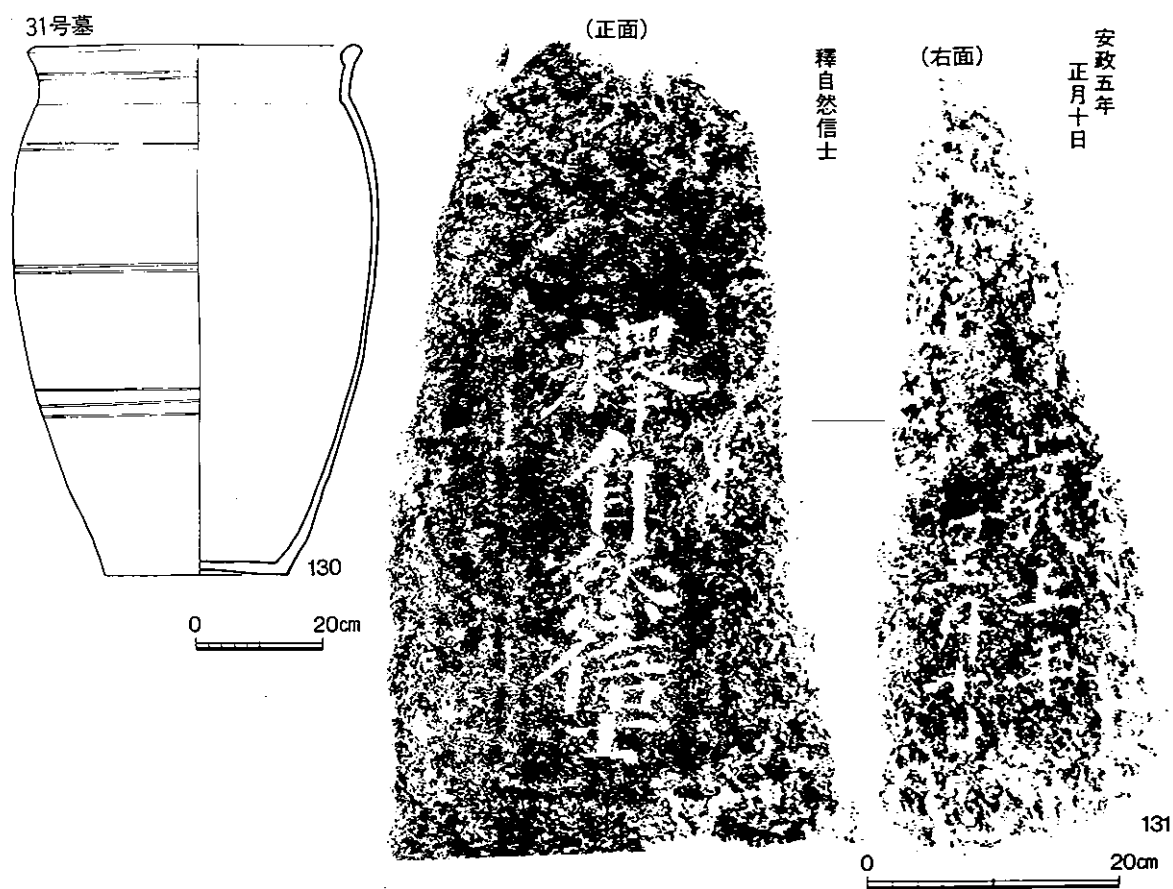
墓石 (131) 本調査地出土の墓石の中で最も大きかったため、現場で拓本・写真をとった。花崗岩を用い、正面は平らに加工され、戒名を刻むためさらに1段彫りくぼめられている。正面に「釋自然信士」、右面に「安政五年 午正月十日」と刻まれる。



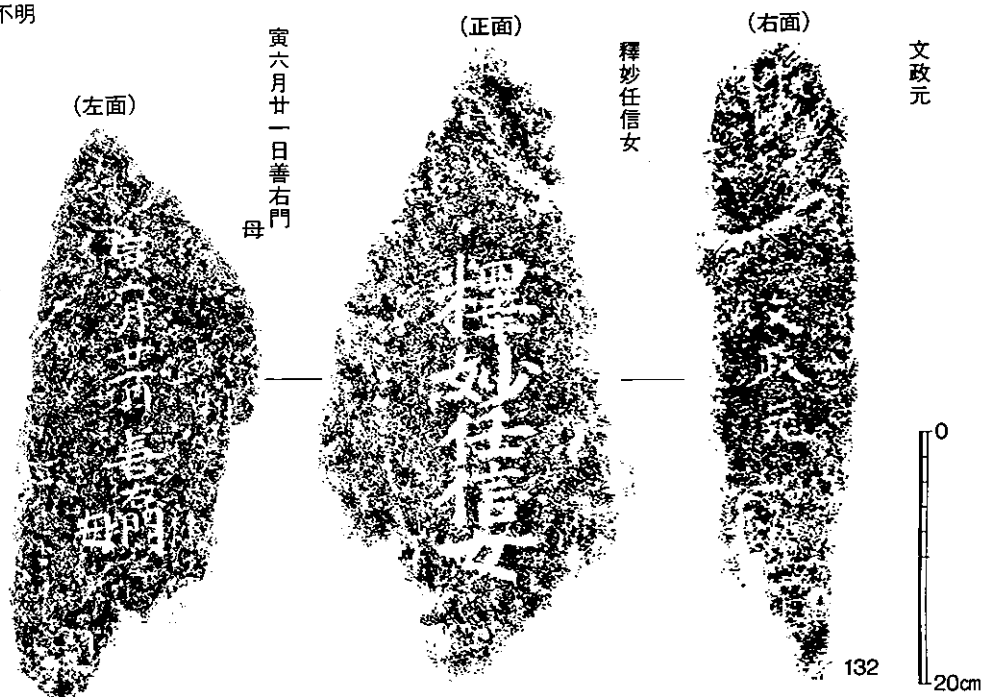
第42図 3次37・39~42・44号墓実測図 (1/30)

34号墓 (第40図)

墓群の北東端に位置する。墓坑プランは長さ0.89×幅0.76mの隅丸長方形を呈し、検出面からの深さは0.28～0.34m。遺物の出土はなかった。



出土遺構不明



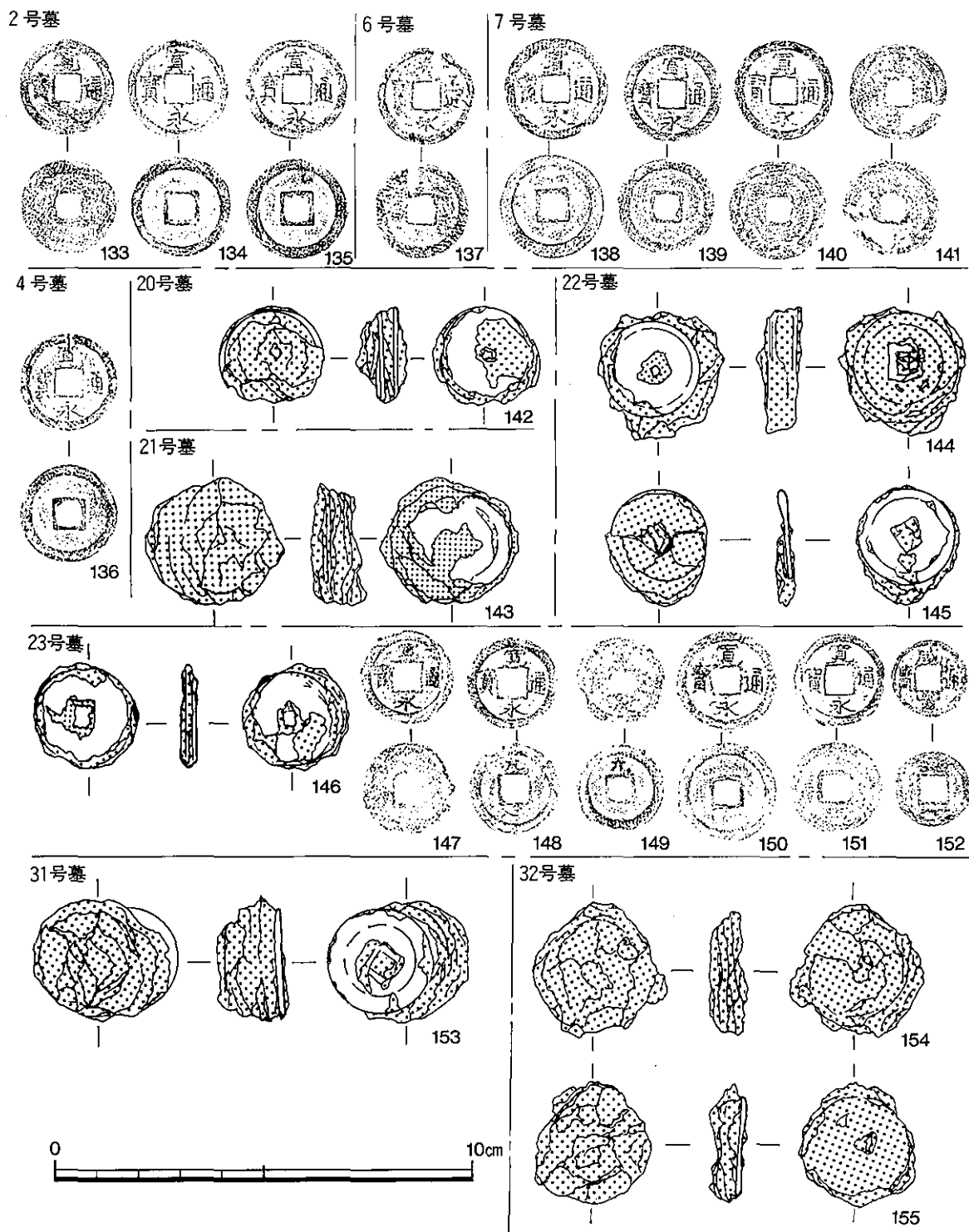
第43図 3次31号墓出土遺物・出土遺構不明遺物実測図・拓影 (131・132は1/6、130は1/12)

35号墓 (第40図)

墓群の北東端に位置し、一部を試掘調査トレンチに切られる。墓坑プランは1.15~1.23mの円形を呈し、検出面からの深さは0.68m。墓坑内に棺材は残存しなかった。遺物の出土はなかった。

36号墓 (第40図・図版19)

墓坑プランは1.08~1.20mの円形を呈し、検出面からの深さは1.22m。墓坑底面には早桶の底板



第44図 3次墓出土銅銭実測図・拓影 (2/3)

が残っていた。遺物の出土はなかった。

37号墓（第42図）

試掘調査トレンチに墓坑の一部を切られる。墓坑プランは0.92mの円形を呈し、検出面からの深さは1.23m。墓坑の底面には早桶の底板が残存していた。遺物の出土はなかった。

38号墓（第33図）

13号墓に切られる。墓坑プランは0.97mの円形を呈し、検出面からの深さは1.15m。墓坑内に棺材は残存しない。遺物の出土はなかった。

39号墓（第42図）

墓坑プランは0.93mの円形を呈し、検出面からの深さは0.68m。墓坑内に棺材は残存しなかった。遺物の出土はなかった。

40号墓（第42図）

墓坑プランは1.15～1.30mの不整方形を呈し、検出面からの深さは0.93m。墓坑内に棺材は残存しなかった。遺物の出土はなかった。

41号墓（第42図）

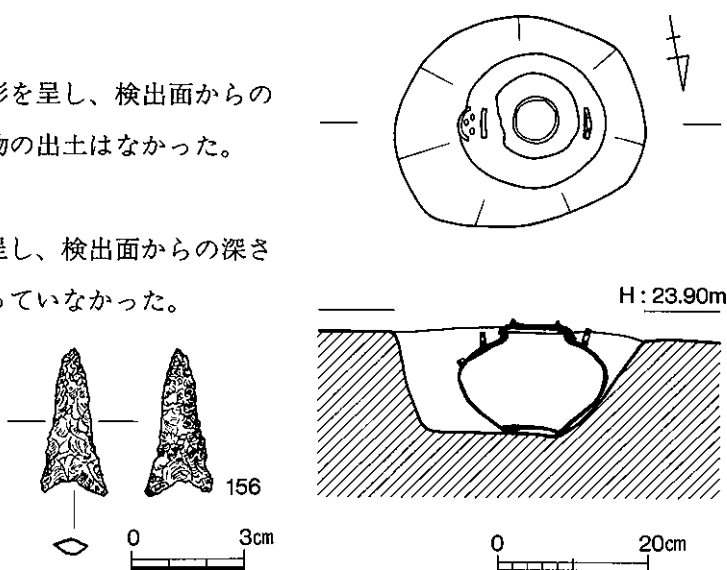
墓坑プランは0.89～1.01mの楕円形を呈し、検出面からの深さはわずか5cmと非常に浅い。遺物の出土はなかった。

42号墓（第42図）

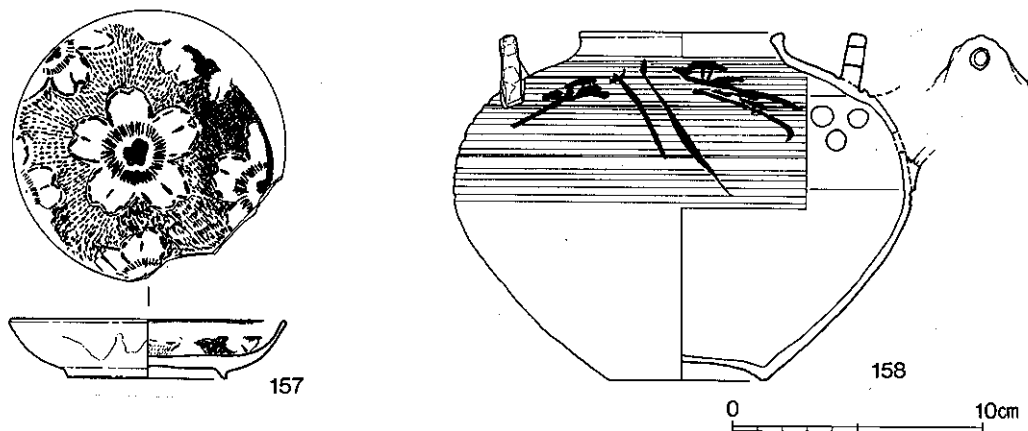
墓坑プランは0.85mの不整円形を呈し、検出面からの深さは0.66m。墓坑内に棺材や遺物は残っていなかった。

43号墓（第42図）

20号墓を切る。墓坑プランは0.90～0.95mの円形を呈し、検出面からの深さは0.67m。墓坑内に棺材は残存しなかった。遺物は出土しなかった。



第45図 3次SX02出土遺物実測図（1/2） 第46図 3次SX03実測図（1/10）



第47図 3次SX03出土遺物実測図（1/3）

44号墓（第42図）

墓坑プランは0.93～1.04mのほぼ円形を呈し、検出面からの深さは0.88m。墓坑内に棺材は残存しなかった。遺物の出土はなかった。

その他の近世墓出土遺物（第43図、図版24）

墓石（132） 墓内より出土したが、遺物収蔵時の不手際により出土場所が不明となった。高さ60cm、幅24cm、厚さ17cmの三角形の花崗岩を用い、正面に「釋妙任信女」、右面に「文政元」、左面に「寅六月廿一日善右門母」と刻まれる。基部が尖っており、単独では自立しない。

S X 03（第46・47図、図版19）

調査区の南西隅に位置し、調査区外へのびる近世墓に接する。平面プランは直径31cmの円形を呈する深さ13cmの坑内に、陶器土瓶を据えた後、磁器皿をかぶせて蓋としていた。胞衣壺である。

磁器

皿（157） 口径11.0cm、器高1.35cm、底径6.4cm。出土時よりすでに口縁部の一部を失っていた。内面の文様は型紙刷りの技法を用い、緑色の釉で、桜花を中心に置き周囲に半桜花を施すが、型紙がずれている。明治後半から大正時代。

陶器

土瓶（158） 出土時より注口を失っていた。口径8.2cm、器高13.9cm。灰白色の胎土で体部上半に透明釉をかけ、鉄絵で山水文を描く。器壁は薄く、非常に軽い。明治時代。

その他の遺構

S X 02（第28・45図、図版24）

近世墓群より東へ約3m離れた所に位置し、一部を試掘調査トレンチにより切られる。長さ約3.1m、幅約1.5mの不整形を呈し、検出面からの深さは59cm。黒曜石石鏃が出土した。

石器

石鏃（156） 長さ3.9cm、基部幅1.6cm、厚さ5mm、重さ1.5g。基部に袈りがはいる。

（3）小結

本調査地では54基の近世墓を検出し、隣接する第1次調査H・I区と合わせると187基の近世墓が確認された。未調査分を含めると、200基を越えるのは確実と思われる。また、近世墓は調査区の西半部において検出され、東側には全く無いことから墓地の東の境は本調査地内にある。

墓からは、陶磁器のほか墓石・キセル・土人形など、第1次調査検出の墓に比べ豊富な種類の副葬品が出土している。しかし、墓は昭和30年代に改葬を受けており、墓内から出土した遺物は改葬の際動かされ他の墓坑に投げ込まれ、攪乱された可能性がある。したがって、個々の墓の年代を決定することはできないが、出土遺物から墓地の年代を推定すると、墓石に刻まれた年号のうち最も古いものは安永二年（1773年）のものであり、出土した陶磁器の年代もほぼ同じである。したがって、本調査地の近世墓は18世紀後半以降の墓である。またS X 03は大正時代の胞衣壺であり、墓地としての利用がこの時期まで続いていた可能性を示している。

またS X 01のように奈良時代の遺構が確認されており、周辺に古代の遺構の展開が想定される。

4. 第4次調査

(1) 調査に至る経緯

第4次調査地は大野城市白木原1丁目276-2、267-4・7・8に所在する。平成8年1月、埋蔵文化財の有無について㈱春日建設より照会があったが、当地は第1次調査B・C区の東隣に位置し、遺跡に含まれる可能性が極めて高い所であった。当時、当地内には鉄筋コンクリートのビルがあり居住者がいたため、建物解体後の平成8年5月に試掘調査を実施した。その結果、調査対象地の東半部はビルの基礎により既に破壊されていたが、西半部は遺構が残存していた。これを受けて、㈱春日建設より売買された㈱パスコと協議を行ったが、当地に分譲マンションの建築を予定しており、発掘調査を実施することで協議が整った。発掘調査は平成8年6月10日から7月27日の間実施し、調査は遺構の残存する西半部を行った。このため調査対象地面積853.56㎡のうち発掘調査面積355.56㎡である。発掘調査は丸尾博恵・石木秀啓が担当した。

(2) 調査の結果 (A. 調査概要、B. 遺構と遺物)

A. 調査概要 (第48図、図版25)

前述のように、発掘調査は調査対象地の西半部について実施した。この際排土を持ち出せなかったため、南北2回に分け打って返して調査を行った。現地表面から遺構面までは約1.3～2mと深い。層序は現地表面→盛土(70～100cm)→黒褐色土(20～40cm)→褐色土(20～80cm)→遺構面(地山)となり、褐色土上面には新しい時期の生活面がある。地元の方によれば、昭和初期、当地は造り酒屋があったとのことである。遺構は白色～褐色の砂質土に掘り込まれ、全体的に浅く、削平を受けていると思われる。土坑・ピットが多数検出され、土坑は調査区南側と南西側に集中している。遺物は陶磁器・瓦などがパンケース2箱分出土した。

B. 遺構と遺物

SX01 (第48・49図、図版27)

調査区の北西に位置し、攪乱に切られる。長さ2.45m、楕円形を呈する土坑で、検出面からの深さは47cm。埋土は黒色を呈する。土師器・瀬戸美濃産の磁器・瓦・七輪・石炭屑などが出土した。不明銅製品(159) 高さ3.6cm、径1.3cm。基部はラッパ状に開く。

SX04 (第48図、図版26)

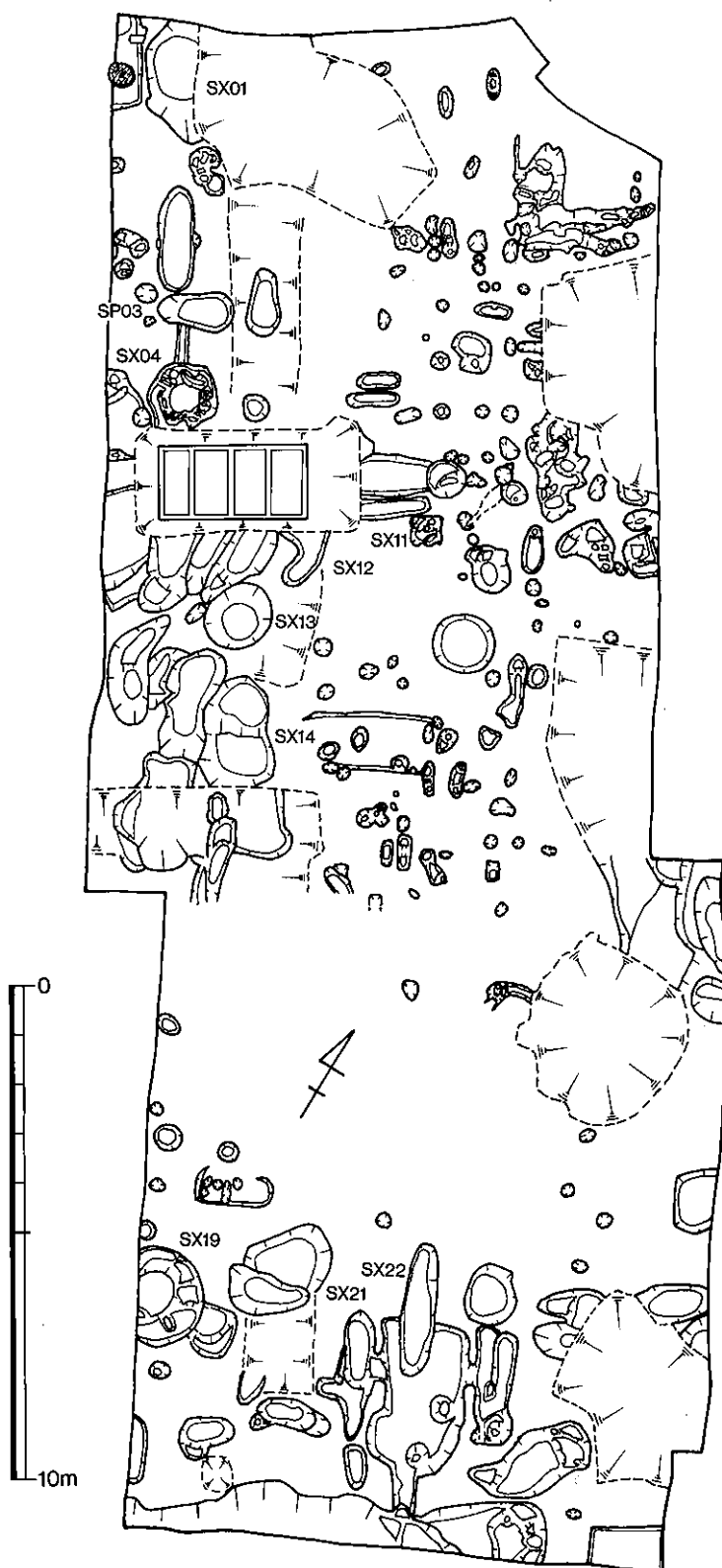
土坑は検出時は円形プランであったが、掘り下げの結果、中央部が盛り上がる円形のドーナツ状を呈する土坑であることが判明した。直径1.42m、中央の高い部分は検出面から13cm、土坑の最も深い部分は検出面から32cmである。瓦が出土した。

SX11 (第48・49図、図版27)

幅約40cmの細長い土坑で、検出面からの深さは23cm。土師器・陶磁器が出土した。

陶器

鉢(160) 復元口径18.2cm、器高9.0cm。口縁部は玉縁状を呈し、片口がつく。淡黄色の胎土に、黄色の釉がかかる。関西系か? 19世紀。



第48図 4次調査遺構配置図(1/150)

S X 12 (第48図)

攪乱に切られる。幅約50cmの細長い土坑である。西側には同様の土坑が境を接して掘られる。これらの土坑埋土はいずれも軟らかい黒色土であった。弥生土器・瓦が出土した。

S X 14 (第48・49図、図版27)

長さ2.20×幅1.28mの楕円形プランを呈する。南側には平坦面がつく。検出面からの深さは40cm。陶器壺が出土した。

陶器

壺 (161) 褐色の胎土に白色の化粧土をかけ、鉄絵を施した後、灰釉をかける。19世紀。

S X 19 (第48図)

一部調査区外へのび、S X 04と同じく中央部が掘り残される土坑である。径2.0mの円形を呈し、検出面からの深さは19cm。土師器・磁器・瓦が出土した。

S X 21 (第48図)

長さ2.56m、幅約60cmの細長いプランを呈し、南側に平坦面をもち、検出面から最も深いところで10cmである。土師器・磁器が出土した。

磁器

碗 (162) 体部のみの破片である。外面には扇を中心にした文様が描かれる。明治時代。

S X 22 (第48図)

長さ2.68m、幅0.66mの細長いプランを呈する。検出面からの深さは27cm。弥生土器・土師

器・18世紀後半～昭和の陶磁器が出土した。

磁器

徳利 (163) 焼成不良のため胎土は赤褐色を呈する。高台の破片で、内面は露胎、外面には白色の釉がかかる。19世紀、肥前系。

S P 03 (第48・49図、図版27)

径45cm、深さ39cmのピットの内部に5×3cmの柱が残り、柱の周りに瓦を詰め粘土で固めていた瓦

軒棧瓦 (164) 棧の部分を使い、燻されているため黒銀色を呈する。長さ25.8cm。瓦当には梅花を中心にして、周りに唐草文を施す。瓦范は木製と推定され、文様の周囲に木目が残る。

棧瓦 (165・166) 165は側面に長さ2.45×幅1.2cmの「白木原村新七製造」のスタンプが施される。166は長さ25.65cm、幅28.1cm。いずれも燻され、黒銀色を呈する。

●乱出土遺物 (第49図、図版27)

本調査地には基礎の跡が入り、ここからたくさんの遺物が出土した。これらは遺構に伴うものではないが、調査区内の遺構の時期を知る上で重要であるので、その一部を紹介する。

磁器

皿 (168) 復元口径13.4cm、器高3.75cm。蛇ノ目凹型高台。外面に唐草、内面に牡丹を描く。18世紀中頃～後半。

陶器

すり鉢 (169) 復元口径24.4cm、器高10.4cm、底径11.8cm。口縁部は玉縁状を呈し、体部はやや丸く、高台は高くやや外方へひらく。灰白色の胎土に褐色の釉をかける。19世紀。

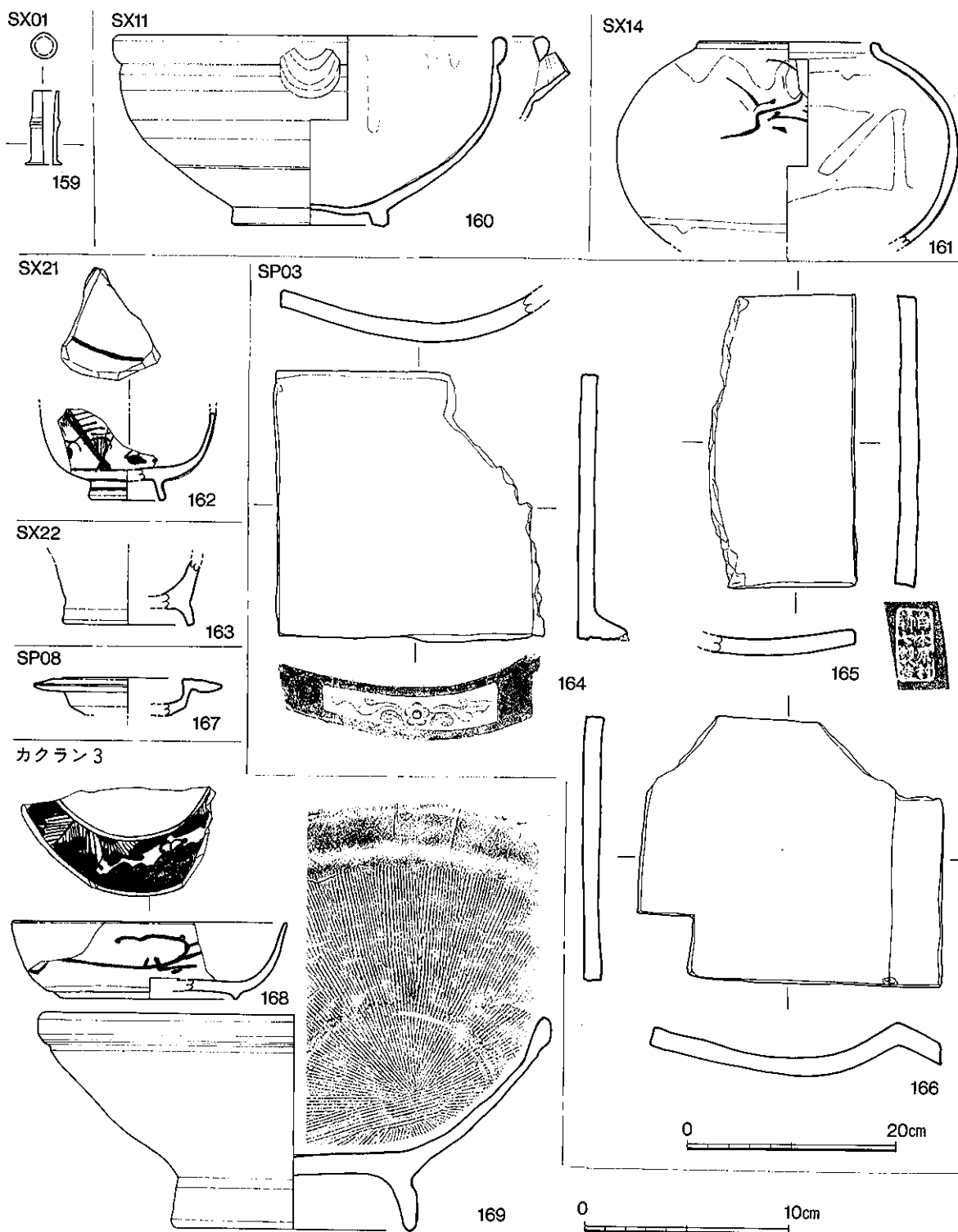
(3) 小結

本調査地では土坑・ピットが検出され、集落の一部にあたり、第1次調査B・C区と同じような状況である。出土遺物の年代は18世紀後半から19世紀前半を中心とするが、攪乱が激しく、大正・昭和の遺物も出土したが、江戸時代の遺物は少ない。また出土陶磁器も細片であり、その量は隣接する第1次調査B・C区に比べて少ない。

検出遺構のうち、土坑のプラン・形状に様々なものが見られた。S X 11・12のような細長い土坑は第1次調査B区でゴミ穴としたような土坑群と形状は異なるが、土坑埋土は有機質を含むような黒色土であり、性格としてはゴミ穴と考えられ、同様の機能をもつ土坑も場所により形状が異なることを示す。またS X 04・19のような円形プランで真ん中が掘り残される土坑は、平成10年3月に調査を終えた後原遺跡第8次調査地においても検出されている。形状から、何らかの目的があったとは感じられるが、その性格は現在は不明である。このように後原遺跡で検出される土坑には、様々な形状のものが認められるが性格を明らかにできないものもある。

また、S P 03では柱を地面に直接埋め込み、その周りに瓦を詰めて根固めとし、その瓦の一枚には「白木原村新七製造」の銘が入っていた。柱は5×3cmの細い角柱であった。文献によれば『大野城市史』に、大正時代の聞き取り調査の結果として白木原村に焼瓦屋が1軒あったことが記され

ているが、明治13年編纂の「福岡県地理全誌」の白木原村の項には焼瓦屋の記述はない。さらに、大野城市教育委員会収蔵の瓦の中に「明治23年」等のへう書きをもつ瓦があり、製作者の名前や依頼者の名前も入っていることから、この時期には瓦の生産が始まっていることを伺わせる。白木原村における瓦の製造開始年代については現在調査中であるが、文献からは江戸時代まで遡るとはあまり考えられない。また、掘立柱建物を明治時代まで建築・使用していることは注目される。

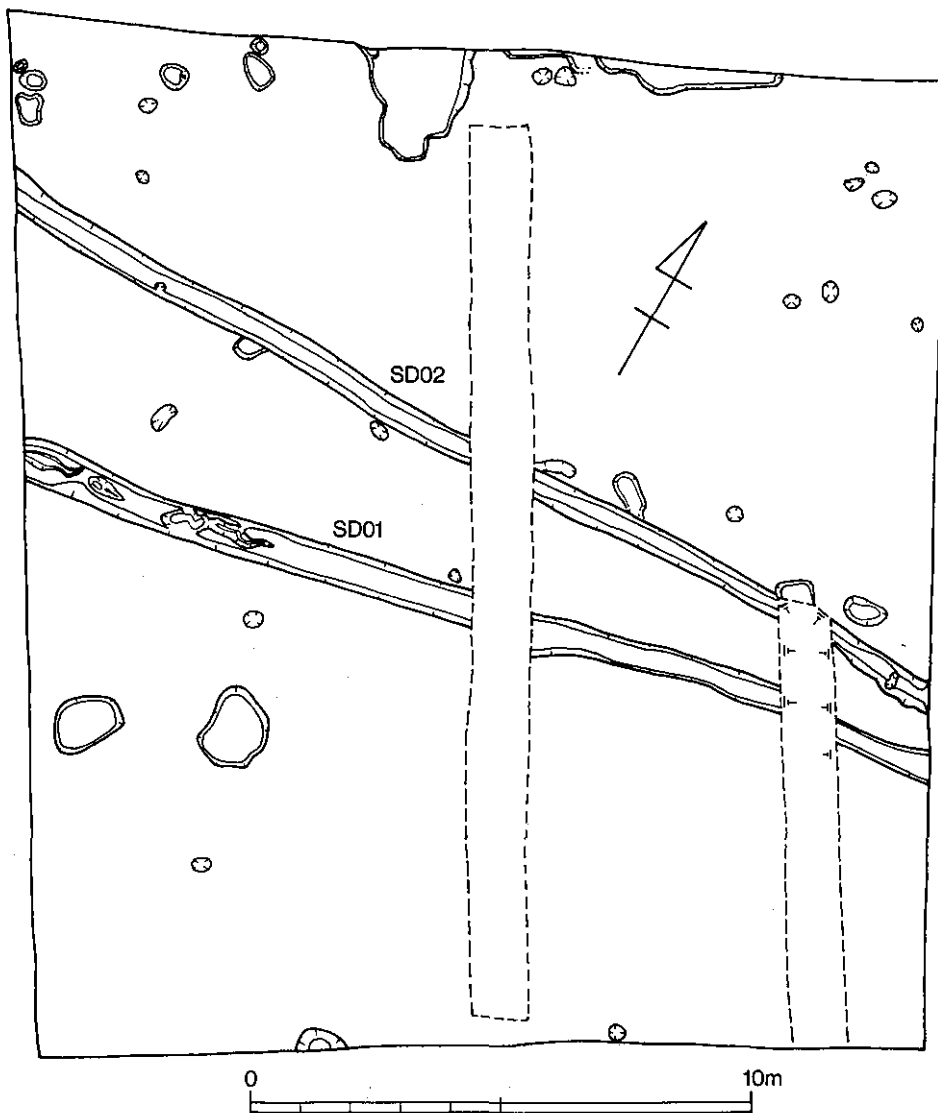


第49図 4次調査出土遺物実測図 (163~165は1/6、その他1/3)

5. 第5次調査

(1) 調査に至る経緯

第5次調査地は大野城市白木原1丁目283-1に所在し、第1次調査A区の西側にあたり第6次調査地の西隣に位置する。当地においてマンション建設が予定され、埋蔵文化財の有無について照会があったが、隣接する第6次調査地は平成8年4月に試掘調査を実施した結果遺跡であることが確認されていた。このため当地も遺跡の範囲に含まれる可能性が極めて高く、遺構の内容と密度を確認するため試掘調査を実施することとなった。試掘調査は平成8年6月に実施し、溝やピットが検出された。これを受けて、建設工事を担当する大東建託、土地所有者である大谷一男氏と本市教育委員会で協議をおこなったが、マンション建設に変更はなく、発掘調査を実施することとなった。発掘調査は平成8年6月24日から7月25日の間実施した。調査対象面積518㎡のうち発掘調査面積は336.8㎡である。発掘調査は徳本洋一が担当した。



第50図 5次調査遺構配置図 (1/150)

(2) 調査の結果 (A. 調査概要 B. 遺構と遺物)

A. 調査概要 (第50図・図版28)

調査地はまったく攪乱を受けず遺構は良好な状態で残存していたが、遺構の内容は東西方向にのびる溝2条と土坑・ピットと非常に散漫な状態で検出されている。溝は、隣接する第1次調査A区・第6次調査地で検出されている溝の続きと考えられる。溝やピットからは土師器・須恵器がビニール袋4袋分出土しているが、少量・小片であり図示できるものはない。

B. 遺構と遺物

S D 01 (第50図)

ほぼ直線的にのびる溝であるが、やや南側へふれる。溝幅は40～90cm、検出面からの深さは3～20cmと東側が浅くなっているが、溝底のレベル差は東西でほとんどない。溝断面は浅い鍋底状を呈する。溝内からは土師器が2点出土しているが、小片のため器種不明である。

S D 02 (第50図)

ほぼ東西方向に直線的にのび、調査区を横断する。溝幅は40～60cm、検出面からの深さは12～36cmで東側が浅くなっているが、溝底のレベル差はほとんどない。溝断面はU字型を呈する。溝内からの出土遺物はない。

(3) 小結

本調査地で検出された溝は掘り方からみると、S D 01は第1次調査A区S D 01、S D 02は第1次調査A区S D 02と同じであり、後述するが位置的にも第6次調査で間をつなぐ溝が検出され、それぞれは一連の長い溝と考えられる。しかし、出土遺物は少なく時期は不明である。またいずれの溝も溝底にレベル差がなく、埋土の状況は水が溜まっていたようではない。しかし、S D 02のような直線的な溝は意図的なものと思われ、あるいは土地の区画を意図したものではなかったかと推測される。また、出土遺物中に近世の陶磁器は含まれていない。

6. 第6次調査

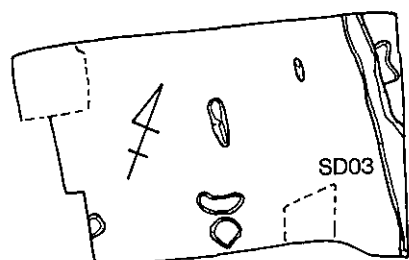
(1) 調査に至る経過

第6次調査地は、大野城市白木原1丁目283-3・4に所在する。当地はマンション建設が予定され、(有)格設計より埋蔵文化財の有無の照会があったが、第1次調査地のすぐ西隣にあたることから遺跡の存在する可能性が極めて高く、平成8年4月に試掘調査を実施した。その結果、第1次調査A区からの続きと思われる溝やピットが検出された。これを受けて協議を行ったが、当地におけるマンション建設に変更はなく、土地所有者である大谷宗雄氏と委託契約を締結し、発掘調査を実施することとなった。発掘調査は平成8年7月25日から8月5日の間実施した。開発対象面積189m²のうち発掘調査面積は69.65m²である。発掘調査は徳本洋一が担当した。

(2) 調査の結果 (A. 調査概要 B. 遺構と遺物)

A. 調査概要 (第51図・図版29)

調査の際打って返しを行ったが、調査地が狭く土を置ききれなかったため、中央部が未調査となってしまうのは残念である。調査では、溝3条とピットが数個検出された。遺物は弥生土器・土師器・須恵器・黒色土器がビニール袋5袋分出土したが、小片・少量である。



B. 遺構と遺物

SD01 (第51図)

調査区の南側に位置し、東西方向にのびる。溝幅60~90cm、検出面からの深さ約20cm、溝底のレベル差はほとんどない。溝の断面は浅い鍋底状を呈する。土師器が出土したが、小片のため図示できない。

SD02 (第51図)

SD01のすぐ北側に位置し、略北西~南東方向にのびる。溝幅50~80cm、検出面からの深さ約30cm、溝底のレベル差はほとんどない。溝の断面はU字型を呈する。土師器・黒色土器A、B類・須恵器が出土したが、小片のため図示できない。

SD03 (第51図)

調査区の北側に位置する。略南北方向にのび、SD01・02の在り方と異なる。溝幅40cm、検出面からの深さは5cm程度と極めて浅い。溝底のレベルは、南側にかけてゆるやかに深くなっている。土師器の糸切り小皿が出土したが、小片のため図示できない。

第51図 6次調査遺構配置図 (1/150)

(3) 小結

本調査地は極めて狭小で、遺構の全体像を把握するには不十分である。SD01・02は溝の位置と掘り方から第1次調査A区SD01・02と第5次調査SD01・02をつなぐものであるが、SD03は調査区外へのび規模・機能は不明である。出土遺物は少量であるが土師器・須恵器が主体を占め、近世陶磁器は出土していない。これが本調査地で検出された遺構の時期的傾向を表すかもしれないが、即断はできない。

IV. 福岡県大野城市後原遺跡3次調査出土の近世人骨について

大森 田・金 宰賢・田中 良之

(九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座)

1、はじめに

後原遺跡の3次調査において、2号墓、22号墓、23号墓、31号墓から人骨が出土した。各墓の埋葬主体はいずれも甕棺である。筆者らは、31号墓については発掘現場において人骨の観察・調査を行う機会を得、その後4墓から出土した人骨を九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座に搬入し、整理・復元を行った。以下、各墓ごとに分析結果を記載する。なお、分析にあたって、計測は主にMartin-Sallre(1957)に従い、性判定には中橋の方法(中橋、1988)、年令推定は栃原の方法(栃原、1957)を援用した。

人骨は九州大学大学院比較社会文化研究科考古人類資料室に保管されている。

2、2号墓出土人骨

【保存状態】人骨の保存状態は比較的良好で、ほぼ全身の骨が遺存している。

頭蓋骨は脳頭蓋がよく遺存しているが、顔面頭蓋を欠く。後頭骨外後頭隆起の発達強い。頭蓋主縫合は、内板がいずれも完全に閉鎖しており、外板も癒合が進行している。

軀幹骨は、腰椎が1個残存している。

上肢骨は、左右上腕骨遠位、右尺骨近位、右橈骨近位、左手の第2基節骨が遺存している。上腕骨の三角筋粗面は良く発達しており、骨体も太い。

下肢骨は、左寛骨の腸骨翼付近、左右大腿骨近位、右膝蓋骨、右脛骨、左脛骨遠位、左右腓骨骨体、右第1・3・4・5中足骨、左舟状骨、第2・4・5中足骨が残存している。大腿骨粗線の発達は良好で、脛骨においてもヒラメ筋線が良く発達している。

【年齢・性別】性別は、頭蓋骨、四肢骨の筋付着部の発達が強く頑強であることから、男性と判定される。年齢は、頭蓋縫合の閉鎖状況から判断して、老年と推定される。

【形質】計測結果は、主な比較群とともに表1・2に示している。人骨の残存状況から計測可能部位は限定されたが、以下、当人骨の特徴を述べる。

まず、上肢骨であるが、上腕骨は同時代や中世・現代人骨と比較してやや太めで、特に骨体最小周は、他の近世人を大きく上回っている。骨幹断面型については扁平傾向は認められない。前腕骨は、骨幹諸径は現代人と比較すると値が上回っているが、同時代人においては比較各群とほぼ等しい。

下肢骨においては、大腿骨の骨幹諸径は現代人を上回るものの、他の比較群とは大差ない。しかし、骨体断面示数はやや値が大きく柱状傾向が認められ、また、骨体上部においても扁平性が非常に強いことが指摘できる。脛骨は、推定長ではあるが、長さは現代人に比較すると長いといえるが、

他の近世人との比較においては福岡市の天福寺と比較するとかなり短く、江戸よりは長い。骨幹諸径については細めで、現代人と近い値である。骨体断面示数は大きく、扁平性は認められない。

以上当人骨は、他の近世人と比較して上腕骨はやや太めで、大腿骨において筋付着部が発達していることが指摘できる。

3、22号墓

【保存状態】人骨の保存状態は非常に悪い。残存する骨は、骨片1個のみである。この骨片も細片であるため、部位の同定は困難であった。

4、23号墓

【保存状態】人骨の保存状態は不良である。遺存する部位は、左上腕骨遠位、右尺骨近位、右橈骨近位、左大腿骨近位である。大腿骨の骨頭は大きく、骨体は太い。

【性別・年齢】性別は、四肢骨の骨体の太さから判断すると男性の可能性が高い。年齢は、四肢骨の骨端が完全に癒合していることから、成人には達しているといえる。それ以上の細かい年令の推定は不能である。

5、31号墓

【出土状態】31号墓は、調査区西壁沿いに位置する。人骨は、口径約45cmの甕棺に、西向きの坐葬の状態で検出された。人骨の関節部分は、多少乱れが認められるが、各骨の方向や位置に不自然な点は見られないことから、遺体が腐朽する過程で脱落し、倒れ込んだ結果と思われる。

【保存状態】人骨の保存状態は比較的良く、ほぼ全身の骨が遺存している。

頭蓋骨においては下顎骨と上顎左犬歯が残存している。下顎骨の歯槽は全て完全に閉鎖している。上顎犬歯の咬耗度は、栃原2°bである。

軀幹骨は、肋骨片、腰椎1個が残存している。腰椎の椎体縁には骨棘が形成されている。

上肢骨は、左鎖骨、左右肩甲骨の一部、左右上腕骨、右尺骨、左橈骨骨体、右手舟状骨、右第2中手骨、第2・3基節骨、左手大菱形骨が遺存している。上腕骨の三角筋粗面はやや発達気味である。

下肢骨は、右大腿骨近位、左右脛骨遠位、左右腓骨、右足舟状骨、第2・3・4・5中足骨、左距骨、左足舟状骨、第2・3・4・5中足骨、第1基節骨が遺存している。大腿骨粗線、脛骨ヒラメ筋線の発達はやや弱い。

【性別・年齢】性別は、四肢骨の骨体の太さから判断すると、男性の可能性が高い。年齢は、下顎骨の歯槽が完全に閉鎖していること、椎骨に骨棘が形成されていることから、老年であると推定される。

【形質】計測結果は、表1・2に示している。当人骨の形質的特徴は、上肢骨においては上腕骨が他の比較群と比べてやや太めである。上腕骨骨体断面示数からは、扁平傾向は認められない。前腕骨の骨幹諸径は、他と比較して大差ない。下肢骨は、大腿骨の骨体上部が、骨幹の細い現代人と比

較すると太めであるが、近世人との比較においては遜色ない値である。骨体上部の扁平性は弱い。腓骨は、他の比較群中最も細く、扁平性は認められない。

以上、当人骨の特徴としては、上腕骨、大腿骨は他の近世人骨に比べて、やや太いといえるが、断面形状に扁平性は見られず、筋付着部の発達が弱いといえる。

6、おわりに

後原遺跡3次調査において4基の近世墓から人骨が出土した。人骨はいずれも甕棺から検出された。出土状態が判明した31号墓においては、西向きの坐葬で埋葬されたことが明らかになった。性別・年齢の推定が可能であった2個体（2号墓・31号墓）はいずれも老年男性で、当墓地には比較的高齢者が含まれていることがわかる。また、人骨の形質的特徴としては、計測が可能であった2個体においては、他の近世人と比較して、上腕骨・大腿骨の骨幹がやや太めである傾向が捉えられた。四肢骨幹断面においては、2号人骨の大腿骨にやや柱状傾向が認められたが、2号人骨の他の部位や31号人骨には柱状性や扁平性は認められず、筋付着部位の発達は概して弱いといえる。

謝辞

当人骨を調査、研究するにあたって、様々なご教示、ご助力いただいた大野城市教育委員会の石木秀啓氏及び諸氏に深謝いたします。また、資料整理等でご協力いただいた、九州大学大学院比較社会文化研究科基層構造講座の諸先生ならびに学生諸氏に感謝いたします。

参考文献

- 阿部英世 1955 「現代九州人大腿骨の人類学的研究」『人類学研究』2。
- 遠藤萬里、北条輝幸、木村賛 1967 「四肢骨」『増上寺徳川將軍墓とその遺品・遺体（鈴木他、編）』、東京大学出版会
- 鑄鍋命達 1955 「九州人下肢骨の研究」『人類学研究』2。
- Martin-Saller 1957 Lehrbuch der Anthropologie. Bd. I. Gustav Fischer Verlag. Stuttgart.
- 溝口静男 1957 「現代九州日本人前腕骨の人類学的研究」『人類学研究』4。
- 中橋孝博・永井昌文 1985 「人骨」『吉母浜遺跡』、下関市教育委員会。
- 中橋孝博 1988 「古人骨の性判定法」『日本民族・文化の生成』（永井昌文教授退官記念論文集）、六興出版。
- 中橋孝博 1993 「福岡市席田青木遺跡出土の弥生・近世人骨」『席田青木遺跡Ⅰ』福岡市埋蔵文化財調査報告書第356集、福岡市教育委員会。
- 専頭時義 1957 「現代九州日本人上腕骨の人類学的研究」『人類学研究』4。
- 栃原博 1957 「日本人歯牙咬耗に関する研究」『熊本医学会雑誌』31、補冊4。

表1 上肢骨計測値

	後原2号墓		後原31号墓		天福寺 ¹⁾		江戸 ²⁾		吉母浜 ³⁾		九州 ⁴⁾	
	(近世)		(近世)		(近世)		(近世)		(中世)		(現代)	
	R	L	R	L	N	M	N	M	N	M	N	M
上腕骨												
5 中央最大径	23	—	22	23	22	22.9	—	22.7	20	22.6	106	21.9
6 中央最小径	18	—	18	19	22	17.7	—	17.7	20	17.6	106	16.9
7 骨体最小周	66	—	66	65	22	63.8	—	63.5	20	62.5	106	61.8
7 a 中央周	68	—	68	69	22	66.5	—	69.5	20	66.1	106	63.7
6/5 骨体断面示数	78.3	—	81.8	82.6	22	77.6	—	78.3	20	78.1	106	79.1
橈骨												
3 最小周	41	—	—	41	23	42.2	—	41.6	20	41.9	63	40.1
4 骨体横径	17	—	—	—	23	17.5	—	16.6	20	16.9	63	16.0
4 a 骨体中央横径	16	—	—	15	23	15.7	—	15.6	20	15.5	63	15.2
5 骨体矢状径	12	—	—	—	23	12.6	—	11.9	20	12.1	63	11.7
5 a 骨体中央矢状径	13	—	—	13	22	12.6	—	12.0	20	11.9	63	11.9
5/4 骨体断面示数	70.6	—	—	—	23	72.0	—	71.8	20	71.6	60	71.4
5 a / 4 a 中央断面示数	81.3	—	—	86.7	22	80.3	—	77.5	20	77.5	40	77.9
尺骨												
11 尺骨矢状径	—	—	13	—	24	13.1	—	12.8	19	12.8	63	12.8
12 尺骨横径	—	—	17	—	24	17.0	—	16.2	19	17.6	64	16.5
11/12 骨体断面示数	—	—	76.5	—	23	77.9	—	79.0	19	73.7	63	74.9

1) 中橋1993 2) 遠藤他1967 3) 中橋他1985 4) 専頭1957、溝口1957

表2 下肢骨計測値

	後原2号墓		後原31号墓		天福寺 ¹⁾		江戸 ²⁾		吉母浜 ³⁾		九州 ⁴⁾	
	(近世)		(近世)		(近世)		(近世)		(中世)		(現代)	
	R	L	R	L	N	M	N	M	N	M	N	M
大腿骨												
6 骨体中央部矢状径	27	26	—	—	17	27.7	—	28.3	19	28.1	59	26.5
7 骨体中央部横径	25	25	—	—	17	26.9	—	27.4	19	27.7	59	25.6
8 骨体中央周	86	86	—	—	17	85.4	—	87.2	19	87.8	59	82.4
9 骨体上横径	29	29	30	—	14	30.4	—	30.7	19	32.1	59	29.4
10 骨体上矢状径	27	27	26	—	14	26.3	—	27.8	19	24.1	59	24.3
6/7 骨体中央断面示数	108.0	104.0	—	—	17	104.1	—	103.9	19	101.3	58	103.8
10/9 上骨体断面示数	93.1	93.1	86.7	—	14	86.7	—	91.2	19	76.1	58	82.8
脛骨												
1 全長	—	(330)	—	—	13	339.5	—	327.1	12	341.9	61	320.3
1 a 最大長	—	(336)	—	—	16	340.1	—	331.2	11	348.0	60	326.9
8 中央最大径	—	26	—	—	14	29.4	—	28.9	20	29.6	61	27.8
8 a 栄養孔位最大径	—	30	—	—	15	33.7	—	32.9	20	33.8	60	30.6
9 中央横径	—	22	—	—	14	21.9	—	21.6	20	21.6	61	21.1
9 a 栄養孔位横径	—	25	—	—	15	24.1	—	23.7	20	24.0	61	23.7
10 骨体周	—	78	—	—	14	80.4	—	79.4	20	80.8	62	78.4
10 a 栄養孔位周	—	84	—	—	15	91.3	—	89.3	20	90.8	61	88.9
10 b 最小周	—	72	69	72	15	73.7	—	70.8	20	74.5	60	71.3
9/8 中央断面示数	—	84.6	—	—	14	74.8	—	74.9	20	73.0	61	76.1
9 a/8 a 栄養孔位断面示数	—	83.3	—	—	15	71.9	—	72.2	20	71.0	60	77.5
10 b/1 長厚示数	—	(21.8)	—	—	8	21.3	—	21.7	12	22.0	60	22.4
腓骨												
2 中央最大径	—	—	13	13	13	14.3	—	15.3	17	16.1	59	14.5
3 中央最大径	—	—	10	10	13	10.8	—	11.0	18	10.8	59	10.0
4 中央周	—	—	35	36	13	40.5	—	43.4	17	44.8	59	41.5
3/2 骨体中央断面示数	—	—	76.9	76.9	13	75.5	—	72.1	17	68.0	59	69.5

1) 中橋1993 2) 遠藤他1967 3) 中橋他1985 4) 阿部1955、鑄鍋1955

V. ま と め

後原遺跡の性格

既述のように、後原遺跡の各調査では様々な遺構・遺物が検出された。第Ⅱ章でふれたように、江戸時代、白木原には村があったことが文献からうかがえる。白木原村の集落は数カ所に別れていたようであり、その名称と位置について『大野城市史 民俗編』に記されたものを挙げると以下のとおりである。

筑前国続風土記拾遺 (1814年～)	本村	安行（大道側作出也）	原
福岡県地理全誌 (1872年～1880年)	本村	町（町ノ西北ハ瓦田村ニ属ス）	原

大正初期の聞き取り調査 村組（地祇神社の周辺） 町往還上組、下組 四軒屋(新)

いずれを見ても白木原村は3カ所の集落に別れており、江戸～大正時代までその状況は変わらない。以下で、各集落の位置の推定と後原遺跡の性格について考えてみたい。

明治33年作成の地図では、大きく分けると神社の周辺と旧街道沿いの2カ所に集落が位置している。『筑前国続風土記拾遺』と『福岡県地理全誌』によれば、「町」と呼ばれる集落は瓦田村に接し、大道・往還とも呼ばれる街道沿いに広がっていたことが分かる。したがって、「町」は旧街道沿いの集落を指すものと考えられる。

「原」は、現在同じ小字名が第1次調査地の北東側約300mの所にある大野中学校の南側に残っていることから、この辺りが「原」の集落にあたると推定される。

第1次調査地の東方70mの所には白木原地祇神社があり、明治時代の地図と比較しても位置的には全く変わらない。大正時代の聞き取り調査によると、地祇神社の周辺には「村組」と呼ばれる集落があった。「四軒屋」の集落の位置は不明であるが、新しく小さな集落であることから、神社の周辺に広がる「村組」は、『筑前国続風土記拾遺』や『福岡県地理全誌』に記された「本村」にあたると思われる。以上のことから今回報告した後原遺跡第1次～6次調査地は白木原村の本村にあたると考えられる。

白木原村の景観復元

発掘調査の結果、各調査で検出した遺構を基に、白木原村本村の村落景観復元を試みる。まず大きく分けると、北西側（第1次調査H・I区、第3次調査）に墓地が営まれ、南側（第1次調査B・C区、第4次調査）は集落が展開していたことが分かる（付図）。

墓地は西側の範囲が不明であるが、北・南・東側の境は調査区の中でほぼ捉えることができる。それによると、墓地は南北長約45m、東西長30m以上の楕円形の範囲の中に広がり、検出された墓坑の数だけで200基近い。墓坑同士は近接しているが、切り合うものは少ない。棺としては、大甕・早桶・箱棺を使用し、人骨の調査から大甕内に座葬の状態で埋葬されていたことがわかる。出土遺物の時期からは、18世紀前半から明治・大正時代までは墓地として機能していたことが分かるが、改葬による攪乱のため個々の墓の年代や墓地の変遷を明らかにすることはできない。また、3次調

査で完掘した43基のうち、大甕を棺として使う墓は8基と全体の約1/5程度であった。大甕の他、早桶を使用するものもあったが、墓坑内に早桶が残るもののうち、底板の直径が分かるものでは平均が大体48cm前後であった。桶の高さおよび口径は不明であるが、成人を納めるには非常に小さいという印象を受ける。

集落は調査区が狭く、建物の規模・構成・内容を明らかにすることはできなかったが、礎石を使った建物が見られず、掘立柱建物のみしか検出されていないことは注意される。また、第1次調査S X 14からは雁振瓦が出土しているが屋根全体を葺くほどの量ではない。したがって、一部瓦を使う部分もあるが、基本的には草葺きの家屋を想定することができる。検出された遺構のうち性格の分かるものとしては、第1次調査B区で検出された土坑（ゴミ穴）がある。これは連続して掘られていることから、屋敷内でゴミ穴が掘られる位置が決まっていたことが分かる。この他、第1次調査B区S X 19は方形プランの土坑で、第3次調査34号墓と同じような形状を呈することから墓である可能性がある。集落の範囲は、調査区が限定されているため不明な部分が多いが、第1次調査A区と第5・6次調査ではピット・土坑などの生活遺構は検出されず、近世の遺物も出土していない。また、試掘調査の結果ではこれより南側では遺構は検出されていないことから、第1次調査A区と第5・6次調査地は、村の南側の境にあたると思われる。

古文書から見た白木原村の年代について

白木原の名はいくつかの文書に散見されるが、最も古くは明応八年（1499年）の文書に見える。したがってこれ以降白木原には集落があったことが推定されるが、発掘調査で検出された遺構は江戸時代終わり頃（18～19世紀）のものが主で、中世から江戸時代前期の遺構は見つかっていない。

また白木原村の壇那寺である長円寺（浄土真宗本願寺派 春日市春日所在）に残る過去帳には、長円寺が保管する最も古い過去帳の最初の頁に白木原村の名がみえる。年代は寛文五年（1667年）十二月のものであったが、この過去帳は長円寺が創建された当初からのものではなく、これより前の部分は既に失われていた。したがって、白木原村はすでに寛文五年には成立しており、その年代はさらに溯ると考えられる。また過去帳の記録によれば、3次13号墓出土の「釈誓了信士」の没年は天明五年（1785年）十月三日であった。墓石には安永二年（1773年）と刻まれ、実際の没年より12年も溯る。このことが意味するものは不明であるが、墓石の紀年銘と実際の没年が必ずしも一致しないことは注意すべき点である。

近世墓出土の灯火器について

第1次調査H・I区、第3次調査で検出された近世墓から出土する遺物には、陶磁器の碗・土師器小皿・煙管・土人形などがある。このうち土師器小皿と陶器小皿に煤が付着したものがあり、これは灯火器と考えられる。この使用状況について、『大野城市史 民俗編』に参考となる記述があるので引用してみたい。

（十）埋葬

イ ジどり

「じどり」というのは、墓穴を掘る仕事をする人間のことである。組内から四人が選ばれて葬式

が行われる前に墓地へでかけて墓穴を掘る。穴掘りに使用する鍬の柄はあらかじめ短く切ってある。

墓穴を掘り終わるとこの鍬に縄を結びつけて鍬を穴の中に入れておく。魔除けのためであるという。墓穴の周りに六道を立てて葬列の到着を待っている。

六道というのは「ローソク立て」である。青竹を一節つけて節の下から切り取ると、これを縦に二つに割る。この半片の「ふし」のところに穴をあけて細くした竹の棒を上へ通し、ここにローソクを立てて灯をともし、下の方は長くして柄としてこれを地面にさして立てる。六本作っておく。もちろん死者が行くといわれる六道を照らして死者を無事に浄土に導くわけである。家に帰り着くと門の口で「おしおい」か塩をふりかけてけがれをはらった。

ロ 埋め込み

葬列が到着する。僧侶の読経がすむと、穴の周囲に立ててあった六道を抜き取って墓穴に入れる。次いでかめにかけてある四本の縄をもってそろそろとかめを墓穴に沈める。この時かめは死者の顔が西に向くように入れるのである。前にかめの外側に張った念仏紙がその目印になるわけである。
(後略)

『大野城市史 民俗編』P. 496～497より抜粋

このように埋葬の際に灯をともして死者を送る習俗があり、土師器小皿も葬送儀礼の中で灯火器として使われたもので、他のいわゆる副葬品とは性格を異にすると考えられる。しかし、ローソクと土師器小皿の使用する灯火器の違いが何に起因するのかは不明な点や、『大野城市史』にみえる「六道」は6本立てられ、使用後墓坑内に投げ込まれるが、一基の近世墓から出土する土師器小皿とは数量的な差がある点など、細かな点が異なっており、さらなる検証が必要である。

今後の展望

後原遺跡は江戸時代の白木原村にあたり、村内の景観も少しづつ明らかになりつつあるが、白木原村の実像を明らかにするにあたって調査や整理の段階でいくつかの課題に気付いたので、箇条書きにしてまとめてみたい。

- ・第1～6次調査では、調査範囲が狭く、家屋（掘立柱建物）の間取りや一軒の屋敷範囲を捉えることができず、また屋敷内の空間利用を明らかにできなかった。今後、家屋構成や屋敷内の建物の内容を明らかにするとともに、村内の屋敷割りを明らかにする必要がある。
- ・調査区内の個々の屋敷から出土する陶磁器（特に陶器）の産地推定と組成をそれぞれ調査することで、村の経済力や村内の家々の階層差が明らかにできると考えられる。
- ・墓地の変遷を考える上で、墓坑プランが異なるものがあり、新旧関係によるものか検証できなかった。出土遺物と他の遺跡の事例との検討が必要である。
- ・白木原村に関する古文書には、村の拡大する時期や村で作る作物の内容や借金など様々な事項が記されている。これら古文書の調査をさらに進める必要があり、それによって文献と発掘調査成果の両面から白木原村の社会的状態を復元していくことが可能と考えられる。

白木原村は享和二年（1802年）の明細記によれば、家数19戸・人数84人・石高263石の小さな村であった。村人はすべて農民であり、純農村であった。ここ数年白木原地区では高層マンションがい

くつも建設され、街の様子が日々変わっている。古い村の記憶・記録は時代を経るにつれ失われてゆき、発掘調査では村の姿を一部垣間見させてくれるが、その実態については不明な部分が多い。本書では古文書の調査をはじめ重要な検討項目を取り扱うことができず、上記の課題も非常に不十分な内容である。ご叱正・ご教示頂きたい。

最後になったが、陶磁器の年代については鈴田由紀夫氏・家田淳一氏（九州陶磁文化館）にご教示頂いた。また長円寺住職高橋信証氏・副住職岩本直樹氏には過去帳の閲覧について便宜を頂いた。さらに、赤司岩雄氏・田中好美氏（大野城市文化財保護審議会委員）、森山栄一氏（筑紫野市教育委員会）、山村信榮氏（太宰府市教育委員会）、栗原和彦氏（九州歴史資料館）には調査・整理時に様々なご指導・ご助言を頂いた。第3次調査中に出土した人骨については、田中良之教授に取り上げをお願いしたところご快諾頂き、分析結果の玉稿を頂いた。また、井上繭子・石井博司・大森円（当時九州大学院生）の各氏には人骨の調査に多大なご協力を頂いた。記して感謝申し上げたい。

末尾ながら、発掘調査・整理作業中、作業員の方々には多大なご苦勞とご協力を頂いた。あわせて感謝申し上げたい。

参考文献

『大野城市史 民俗編』大野城市史編纂委員会（1990）

『福岡県史 近代史料編 福岡県地理全誌（五）』（財）西日本文化協会（1993）



白木原1丁目交差点より南側をのぞむ（正面奥へのびる道路は第1次調査地、
左手前マンションは第3次調査地）

圖 版



(1) Ⅰ次調査前全景(手前Ⅰ区より南を望む)



(2) Ⅰ次A区全景(北西より)



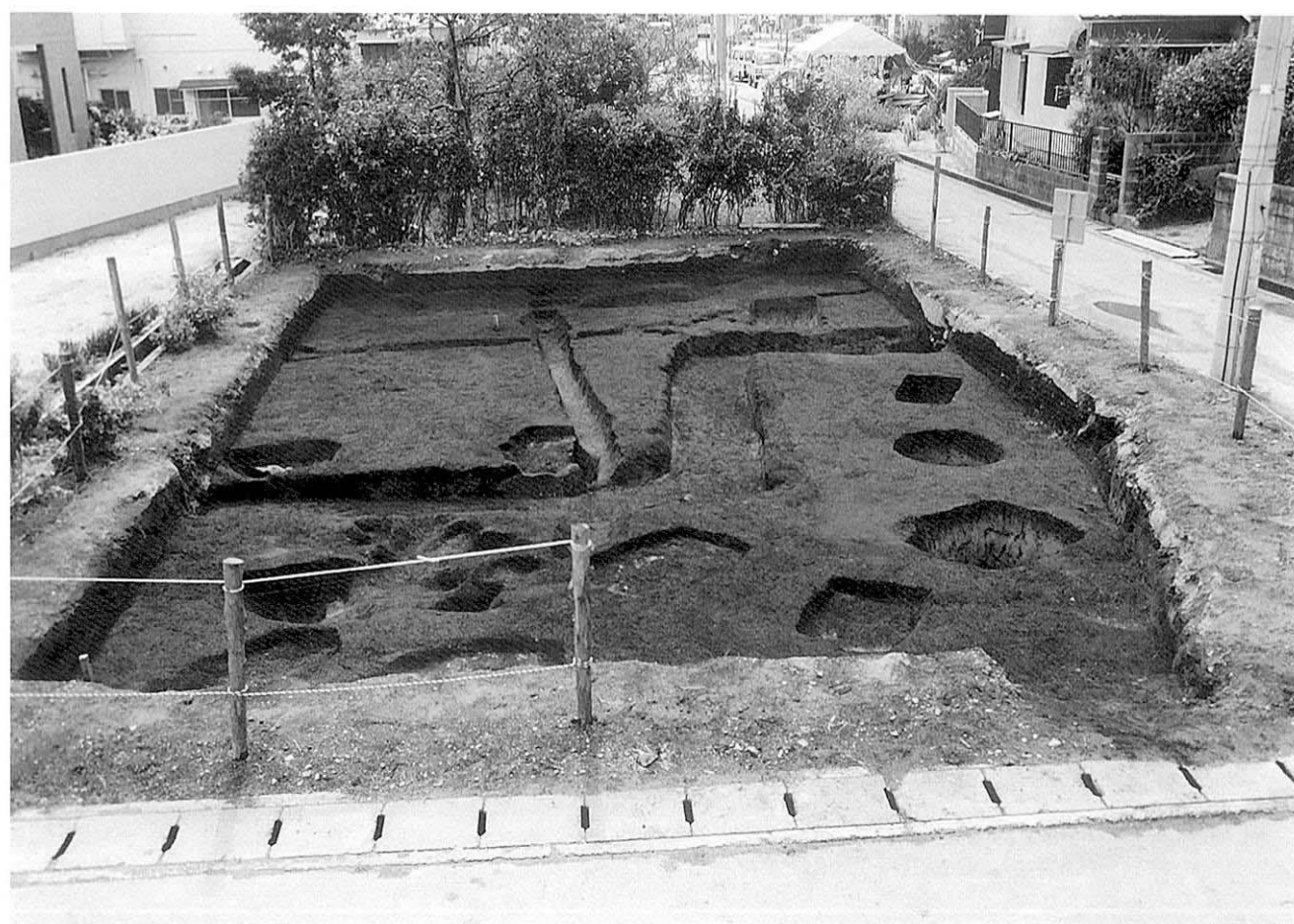
(1) I 次 B 区全景(北西より)



(2) I 次 C 区全景(北西より)



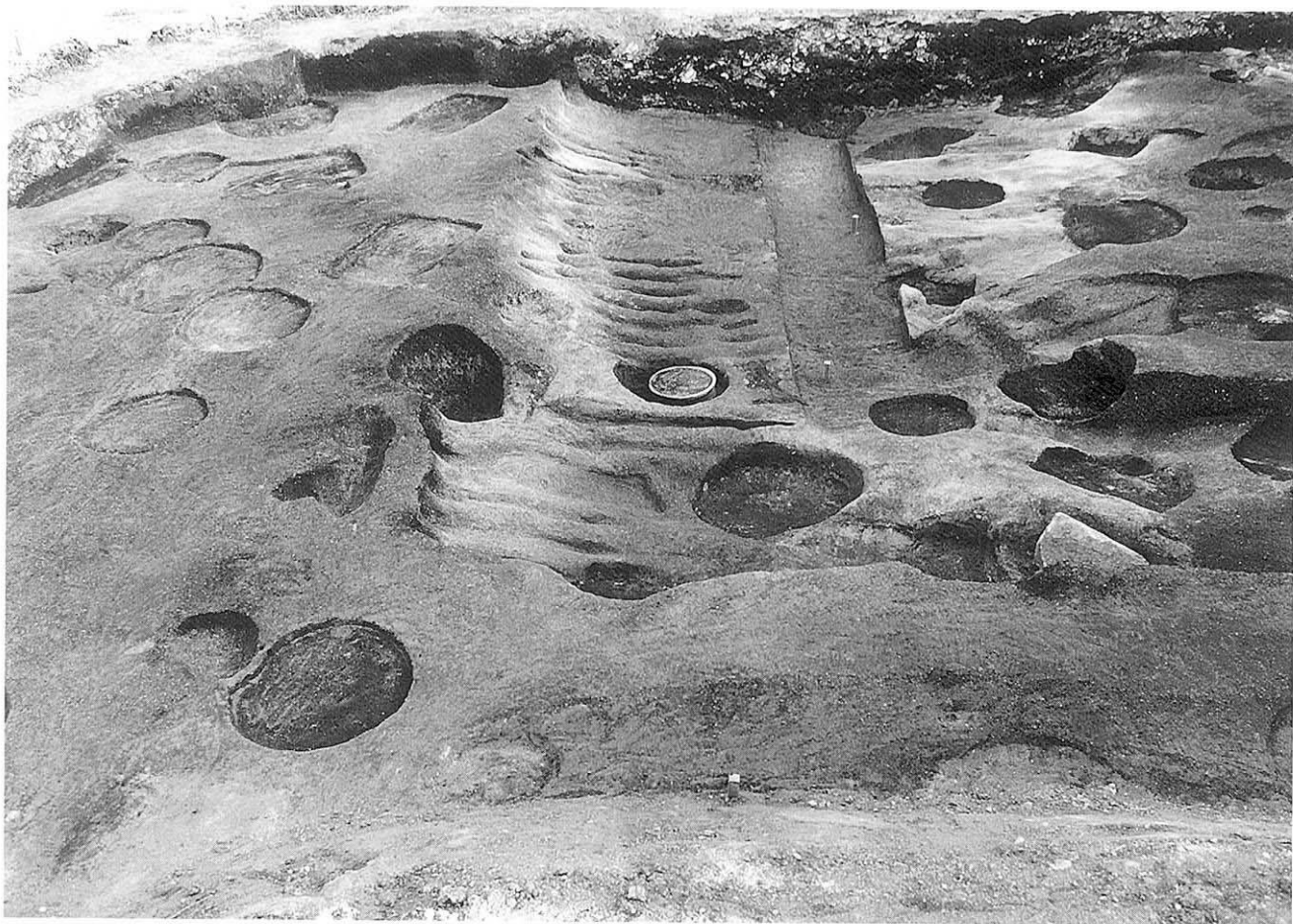
(1) I 次 G 区全景(南東より)



(2) I 次 H 区全景(北西より)



(1) I 次 I 区北西部(南東より)



(2) I 次 I 区南東部(北より)



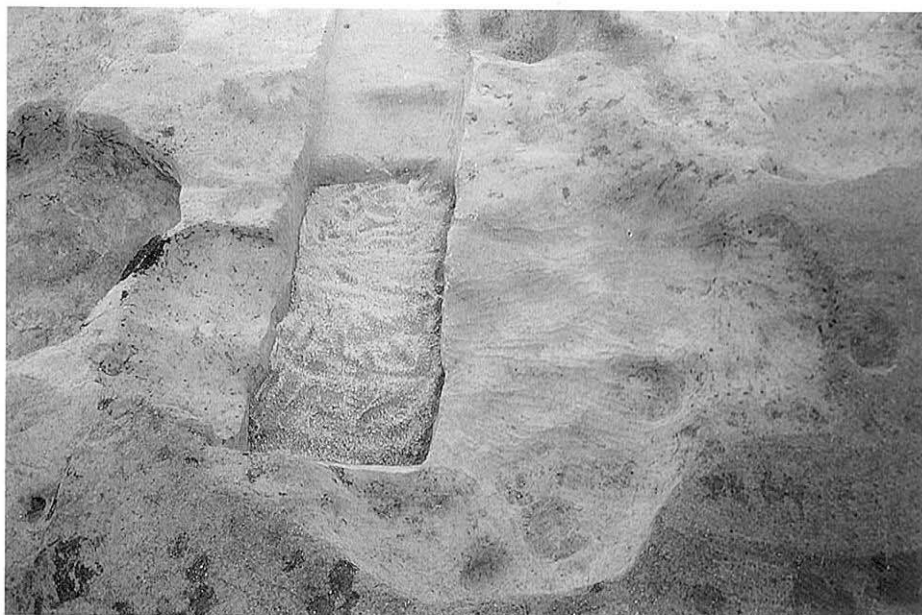
(1) Ⅰ次Ⅰ区北東部(南より)



(2) Ⅰ次Ⅰ区南西部(北より)



(1) I 次 A 区SD02(南西より)



(2) I 次 B 区SX02(南西より)



(3) I 次 B 区SX14~17・20(南西より)



(1) I 次 B 区 SX19 (北西より)



(2) I 次 G 区 SX23 (南西より)



(3) I 次 G 区 SD07 (南東より)



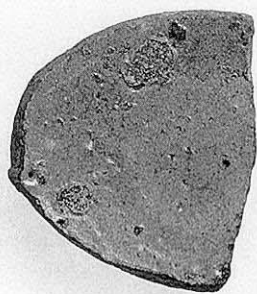
(1) I 次 H 区 SX26 (東より)



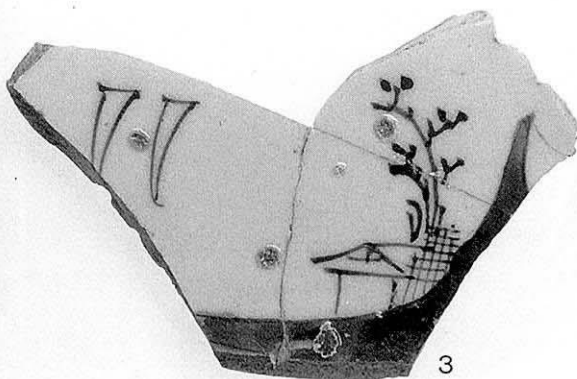
(2) I 次 H 区 SX27 (南西より)



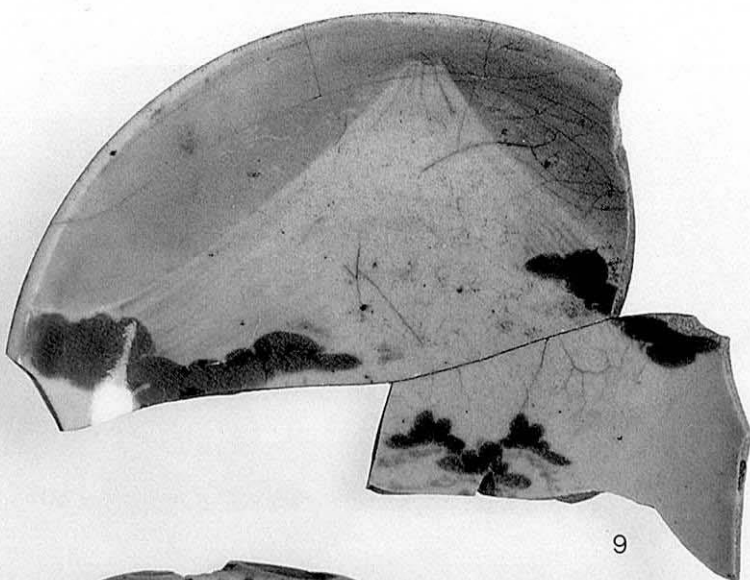
(3) I 次 H 区 SX31 (南西より)



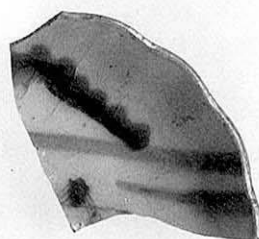
2



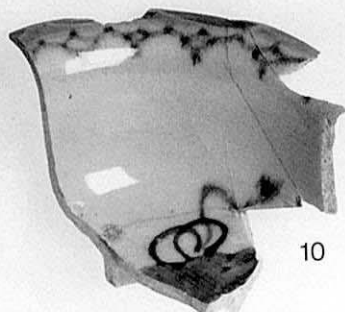
3



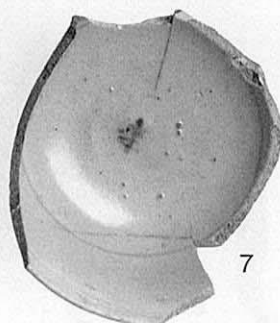
9



8



10



7



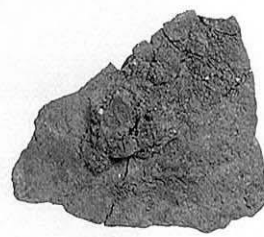
18



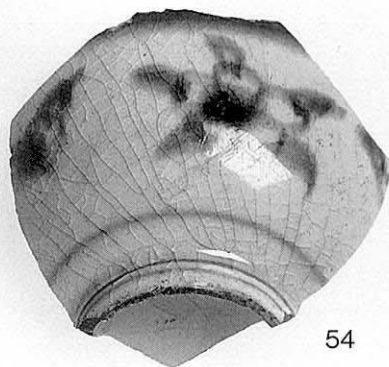
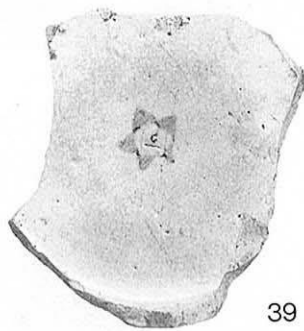
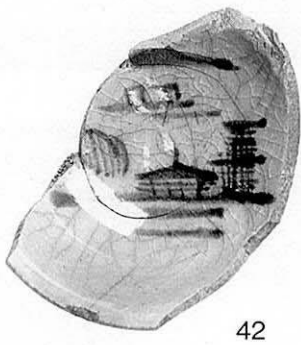
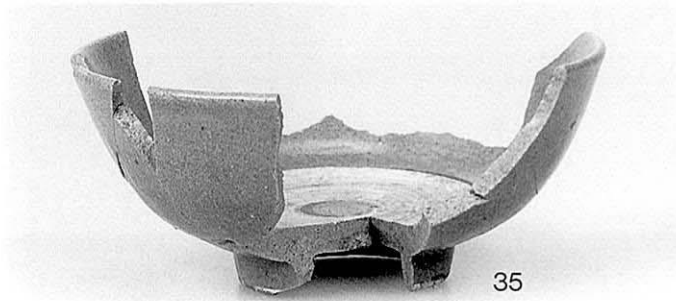
17

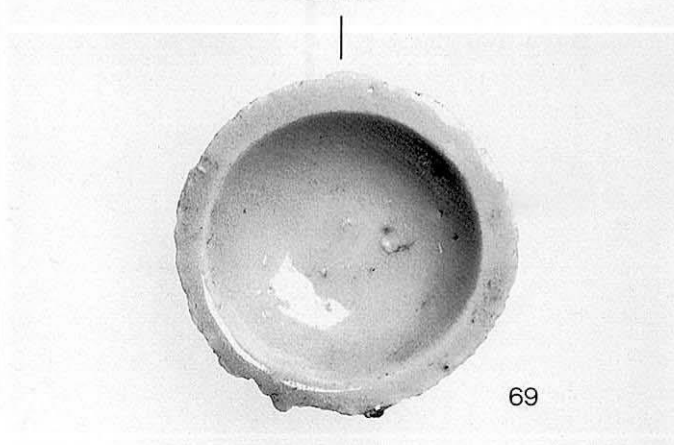
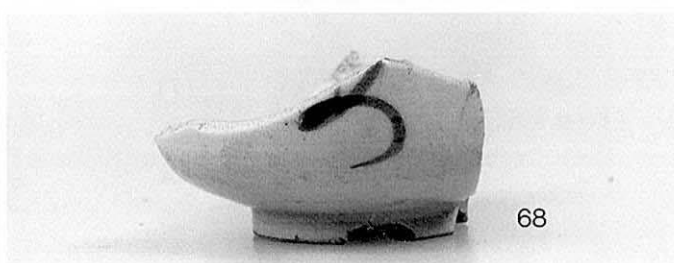
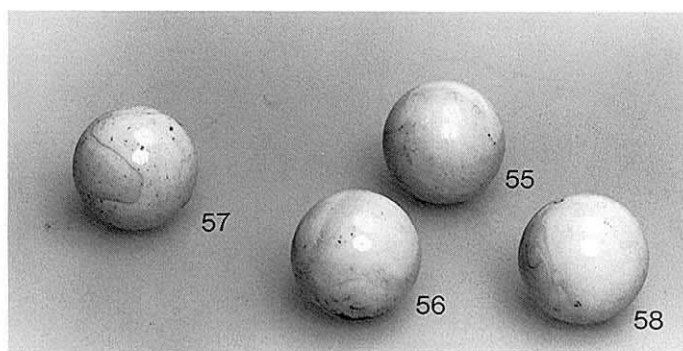


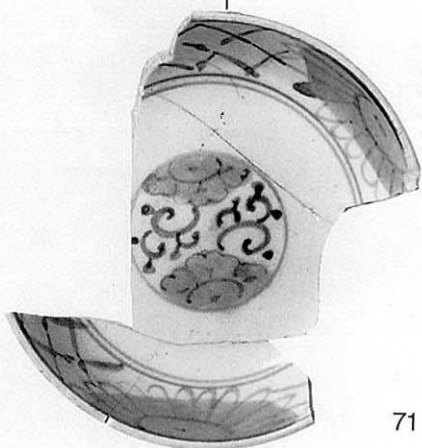
19



20







71



72



73



81



82



83



84



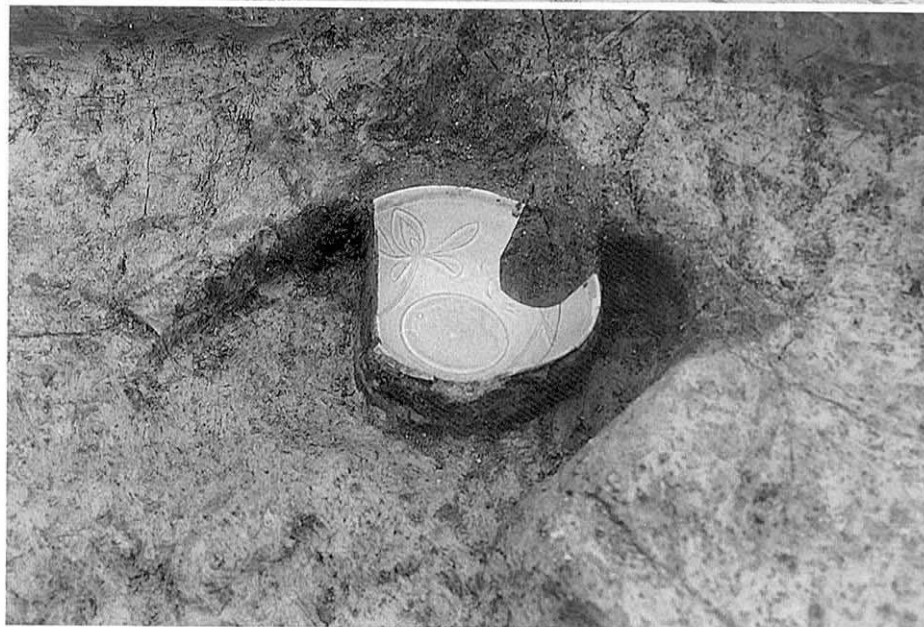
85



86



(1) 2次調査全景(北西より)



(2) 2次SX08遺物出土状態



94



95



(1) 3次調査南西部全景(北より)



(2) 3次調査北西部全景(南東より)



(1) 3次SX01遺物出土状況
(南西より)



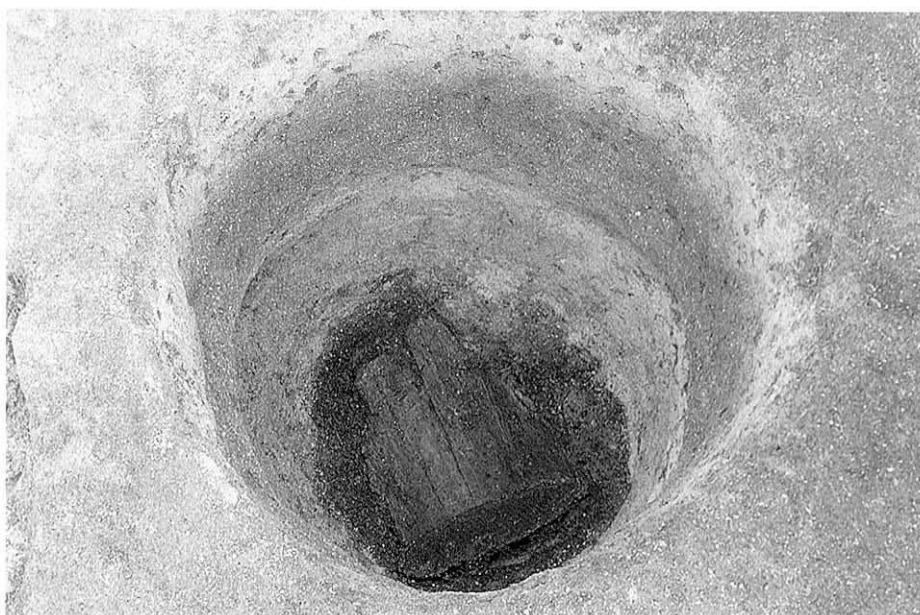
(2) 3次SX01セクション(南より)



(3) 3次2号墓(東より)



(1) 3次4号墓(東より)



(2) 3次6号墓(北西より)



(3) 3次7号墓(南より)



(1) 3次11号墓(南より)



(2) 3次12号墓(東より)



(3) 3次18号墓(北西より)



(1) 3次22号墓(南西より)



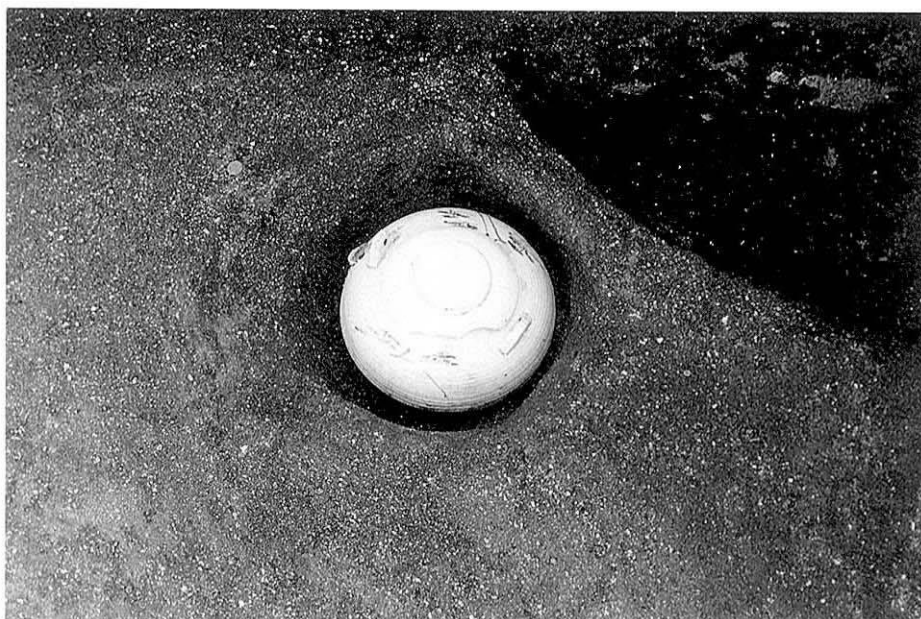
(2) 3次23号墓(北東より)



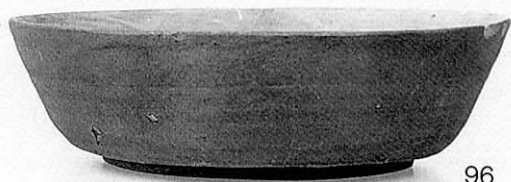
(3) 3次31号墓人骨出土状況
(北東より)



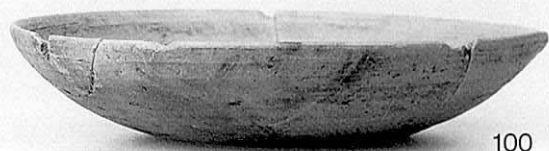
(1) 3次36号墓(東より)



(2) 3次SX03(北より)



96



100



101



102



103



底部墨書

3次調査出土遺物①



104



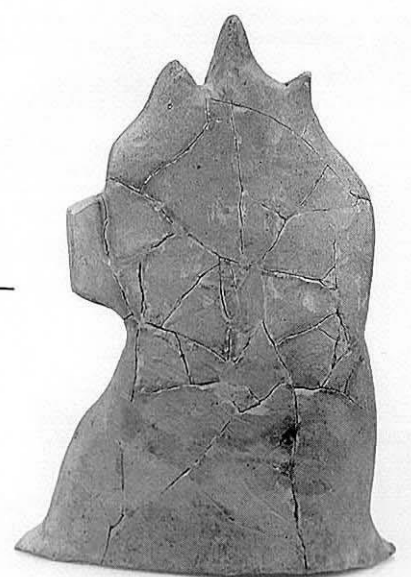
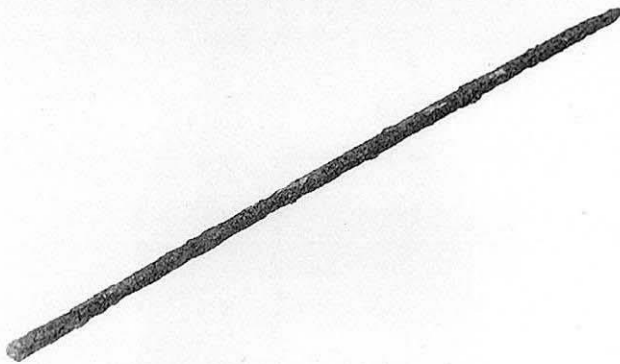
105



106



107



111



115



116



117



118



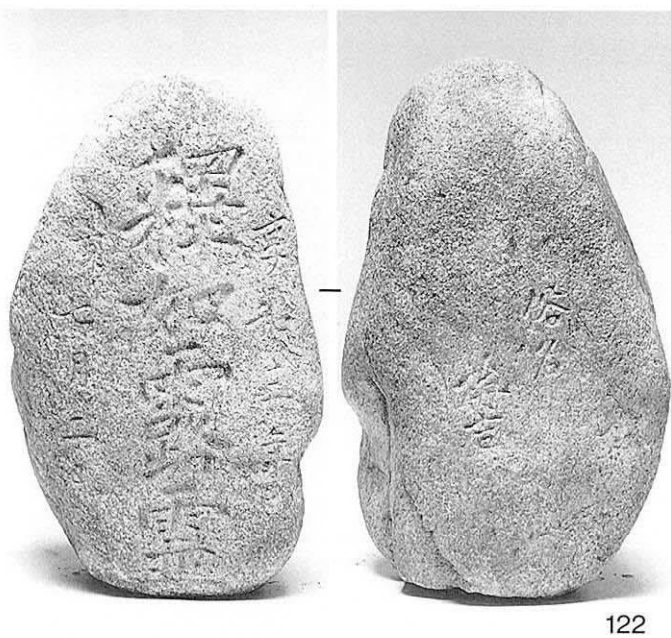
119



120



121



122



125



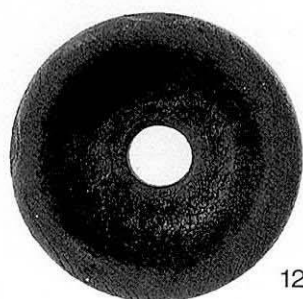
123



126



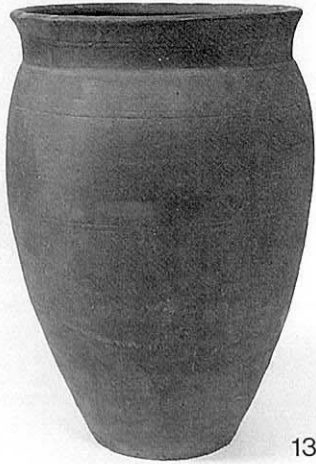
127



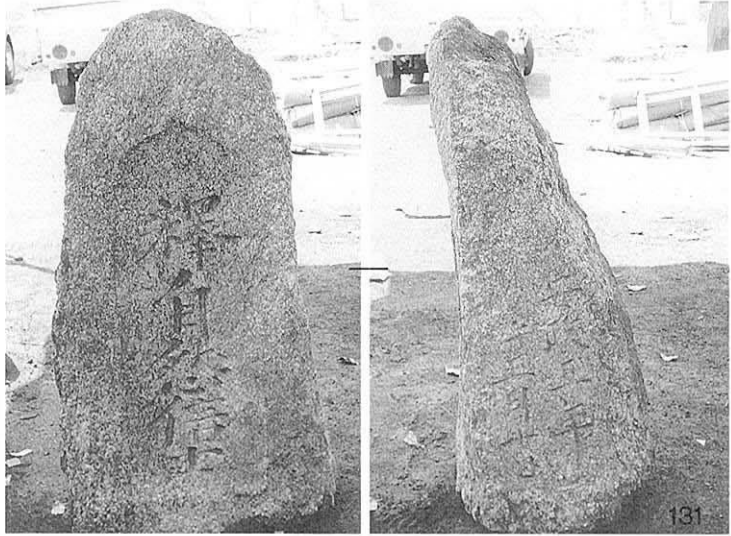
128



129



130



131



132



156



157



158



(1) 4次調査北半部全景(南より)



(2) 4次調査南半部全景(南より)



(1) 4 次SX04(東より)



(2) 4 次SX14(東より)



159



160



161

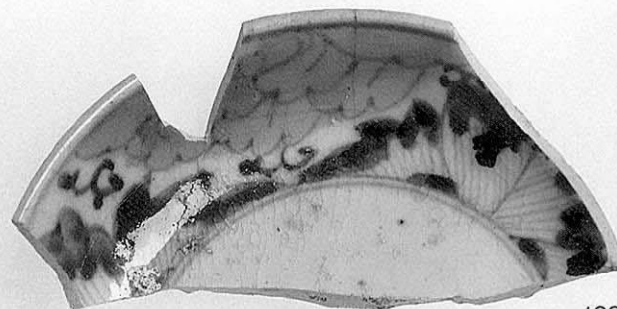
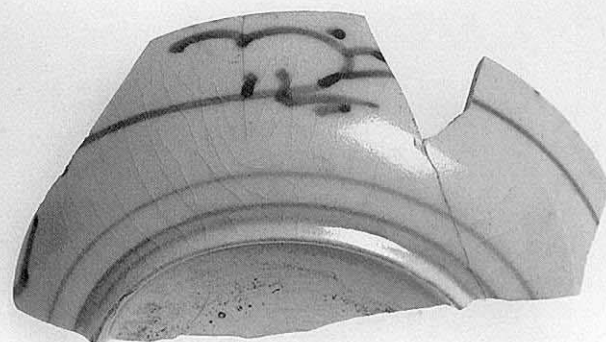


166

164



165



168



169



165



(1) 5 次調査西半部全景(南より)



(2) 5 次調査東半部全景(南より)



(1) 6次調査北半部全景(南より)



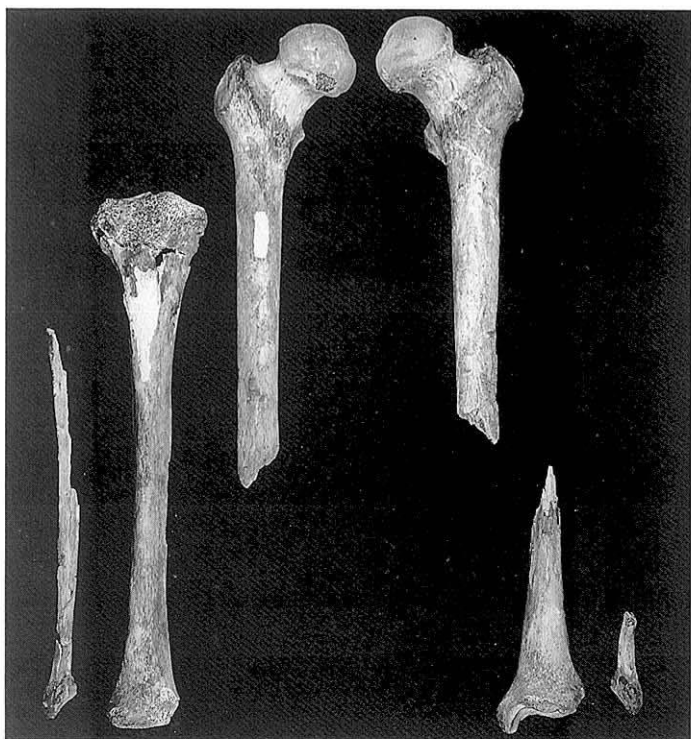
(2) 6次調査南半部全景(北より)



(1) 2号人骨頭蓋上面觀



(2) 2号人骨上肢骨



(3) 2号人骨下肢骨



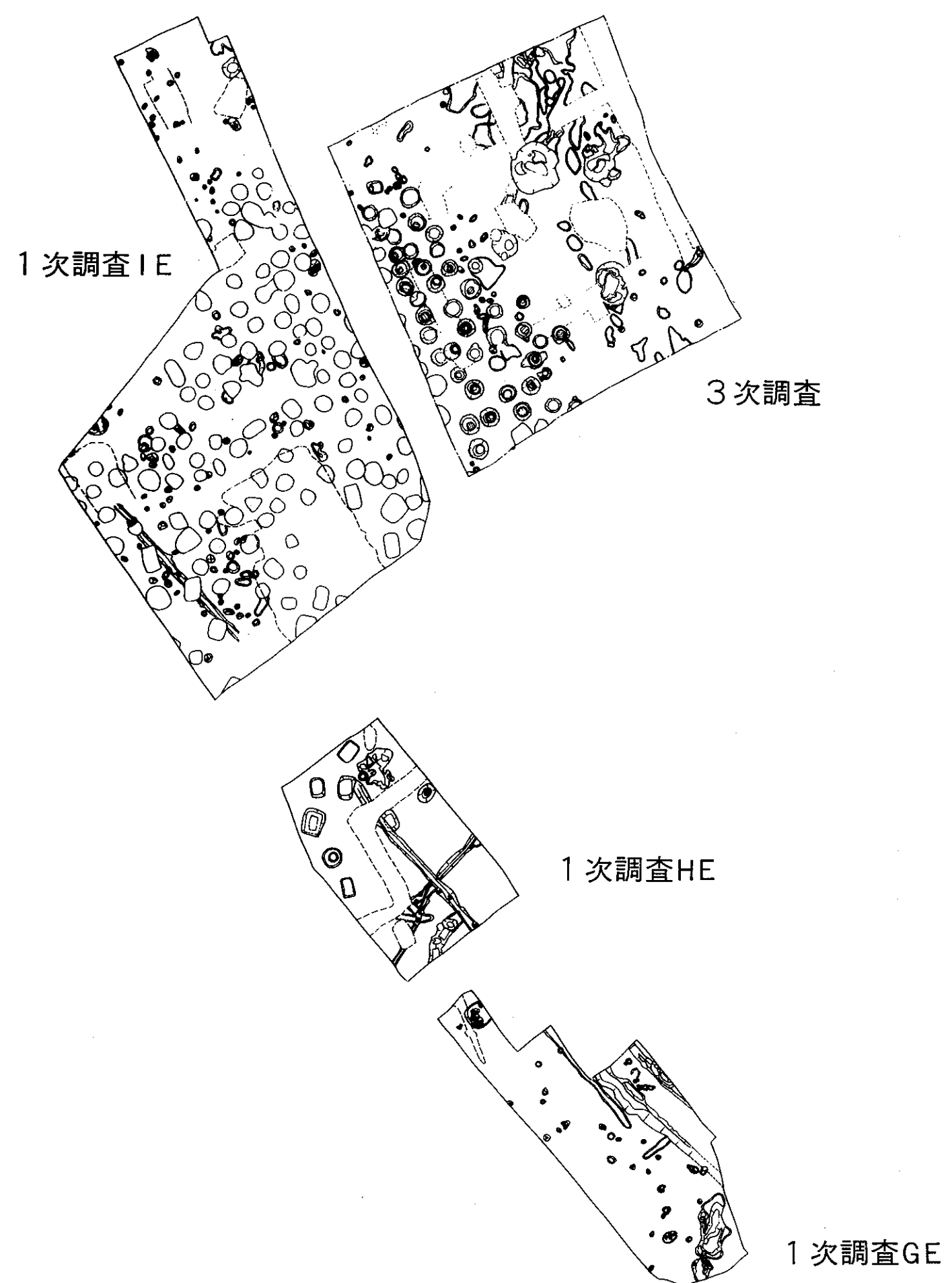
(1) 31号人骨下顎骨



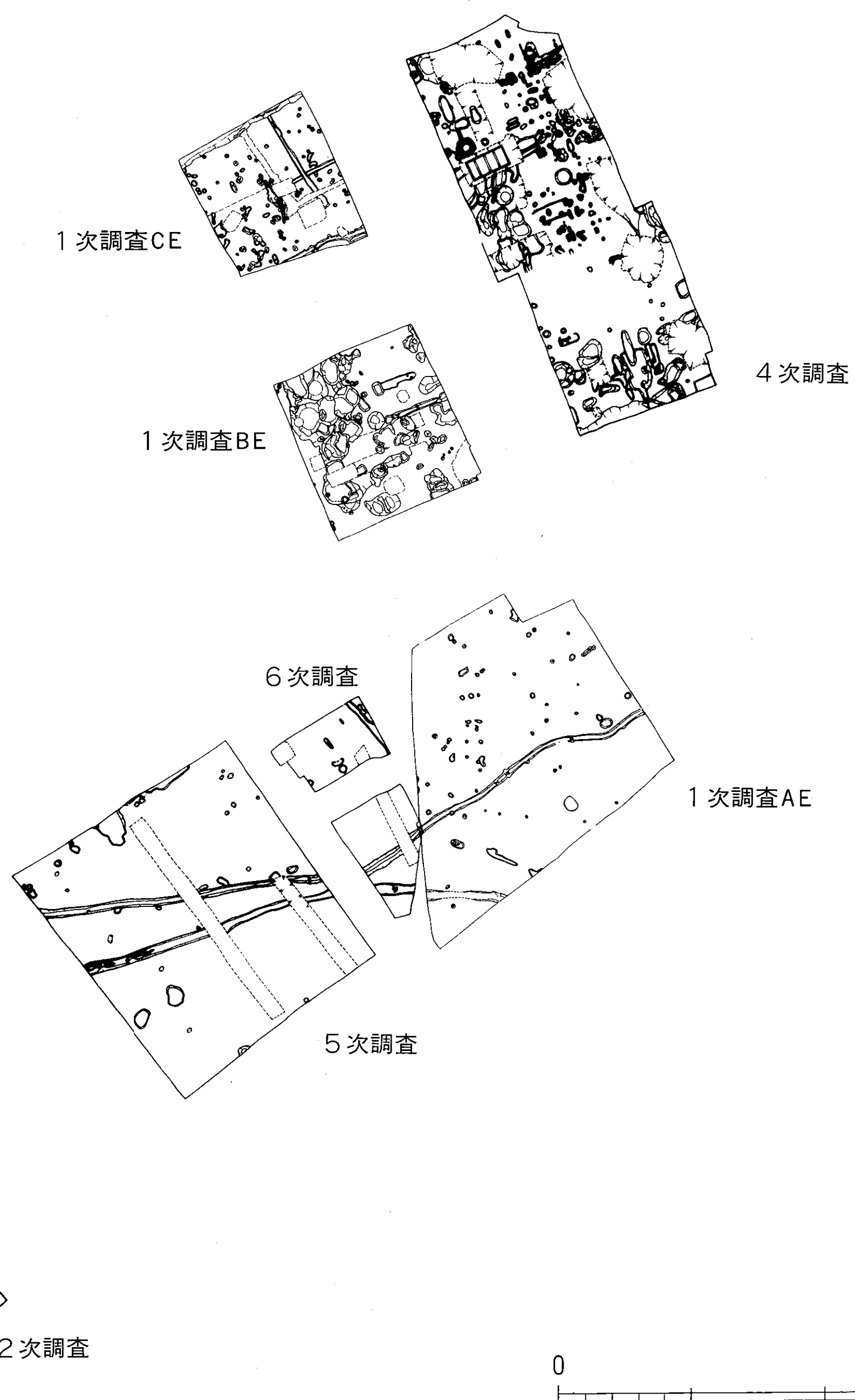
(2) 31号人骨上肢骨



(3) 31号人骨下肢骨



4



報 告 書 抄 録

ふ り が な	うしろばるいせき							
書 名	後原遺跡 I							
副 書 名	第 1 次～ 6 次調査							
巻 次								
シ リ ー ズ 名	大野城市文化財調査報告書							
シ リ ー ズ 番 号	第53集							
編 著 者 名	石木 秀啓							
編 集 機 関	大野城市教育委員会							
所 在 地	〒816-0934 福岡県大野城市曙町 2 - 2 - 1 TEL092-501-2211							
発 行 年 月 日	西暦 1998年 3 月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所 在 地	コード 市町村 遺跡番号		北緯 ° / "	東緯 ° / "	調査機関	調査面積 ㎡	調査原因
うしろばる い せき 後 原 遺 跡	ふくおかけん 福岡県 おおのじょうし 大野城市 しろきばる 白木原 1丁目							
所収遺跡名	種名	主な時代	主な遺構		主 な 遺 物		特 記 事 項	
後原遺跡	集落 墓地	近 世	土壙 溝 墓		須恵器・土師器 陶磁器・瓦		近世白木原村の 調査	

大野城市文化財調査報告書

第 53 集

平成10年 3 月31日

発 行 大野城市教育委員会
福岡県大野城市曙町2丁目2-1

印 刷 鹿島印刷株式会社
佐賀県鹿島市古枝甲249番地3